釧路市タンチョウ鶴愛護会

設立50周年記念誌

～「護る」から「共生」へ～

釧路市タンチョウ鶴愛護会

撮影提供　佐　藤　照　雄

撮影提供　佐　藤　照　雄

撮影提供　佐　藤　照　雄

釧路市阿寒国際ツルセンター「グルス」

〒085-0245
釧路市阿寒町上阿寒23線40
電話 0154-66-4011　FAX 0154-66-4022
URL：http//aicc.webcrow.jp/

正　　面　　撮影提供　河瀬　幸

室　内　展　示　　撮影提供　大山　昇

タンチョウ観察センター　タンチョウの群　　撮影提供　山﨑　定作

三代目 山﨑　一彦 氏 給餌　　撮影提供　山﨑　定作

釧路市動物園

〒085-0201
釧路市阿寒町下仁々志別11
電話 0154-56-2121　FAX 0154-56-2140
URL：http//www.city.kushiro.lg.jp/zoo/
館長　阿部　友行

数多くの家族を見つづけている正門

エゾリスが出迎える。北海道ゾーン入口

代表動物

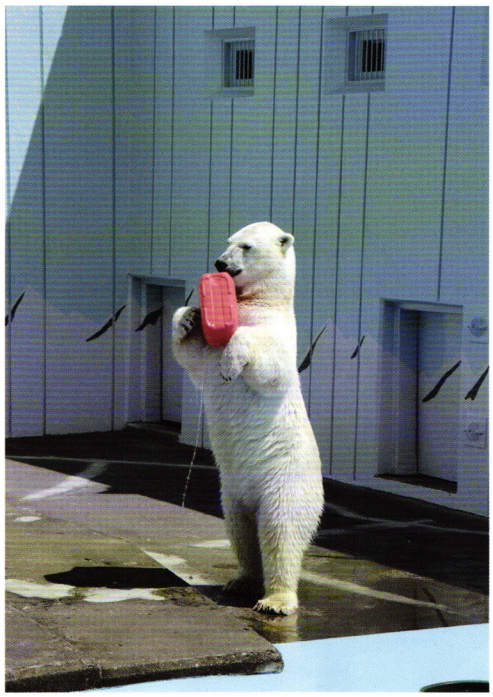
◆ アミメキリン

いつも仲睦まじい

◆ アムールトラ

元気に７歳になった「ココア」

◆ ホッキョクグマ



遊びの天才「ミルク」

◆ レッサーパンダ

郷土の誇る武将の名を持つ「シンゲン」

◆ チンパンジー

子育てに奮闘中の「リリー」

釧路市丹頂鶴自然公園

〒084-0926
釧路市鶴丘112
電話 0154-56-2219　FAX 0154-56-2216
URL：http//kushiro-tancho.jp

多くの人々を迎えてきた鶴公園入口

鶴公園の歴史やタンチョウについて紹介する展示室

展望台より飼育ケージを望む

ヒナを育てる姿も間近で見られる

釧路市立博物館

〒085-0822
釧路市春湖台１－７
電話 0154-41-5809　FAX 0154-42-6000
http://www.city.kushiro.lg.jp/museum/
館長　白幡　敏弘

一、釧路市立博物館

釧路市立博物館は、昭和十一年七月十四日に創立し、現在地の春採湖畔には昭和五十八年十一月三日に移転新築しています。中央のドームを境に左右対称のユニークな外観は、翼を広げたタンチョウの姿にも似ています。博物館入口には釧路市と博物館の位置を示す世界地図と模擬水準点が置かれ、正面玄関を通り館内に入ると吹き抜けのロビーにマンモスの骨格標本が展示されています。

博物館の常設展示は三層に区分けされ、一階は「釧路の大地」、「釧路の生物」、「釧路の海」のコーナーです。二階は一部を三階まで吹き抜けとし、「釧路の先史時代」と「釧路の近世と近代」、四階は、「サコロベの人々」、「タンチョウ」で構成されています。

二、釧路の大地

中央の地形模型を見ると釧路地方の海岸線、釧路湿原と丘陵、火山地形の様子が分ります。この大地の地史は、約七、〇〇〇万年前の白亜紀末期から始まり、その生い立ちの様子が八枚の古地理図で描かれています。それを裏づけるようにアンモナイトや新種のほ乳類上あご化石・クシロムカシバク等の化石や岩石が展示されています。

三、釧路の生物

ジオラマ初夏のミズゴケ湿原や初秋の谷地坊主は、湿原をそっくり切り取ってきた状態でカプセルの中に復元されています。原生林に生きる鳥や獣、天然記念物の鳥等は、動作の一コマをストップさせて展示しています。釧路湿原にはキタサンショウウオやエゾカオジロトンボら氷河期の依存種や日本最大の淡水魚イトウが生息し、釧路の生物相を特徴づけています。

四、釧路の海

釧路川を境にして東側には岩礁地帯がつづき、カジカ類やアイナメ類が生息します。西側には砂浜が広がり、ハタハタやカレイ類が砂底に生息しています。釧路沖には夏から秋にかけて、サンマ、マサバ、マイワシ等が本州の南方海域から回遊してきます。魚類だけでなく、浅海から深海まで貝類やエビ・カニ類も豊富に生息します。また、サケ、スケトウダラ、ニシンを追ってトドやアザラシ等の海獣も集まり、豊かな海をつくっています。

五、釧路の先史時代

北海道は本州とちがい、先土器・縄文・続縄文・擦文と各時代をへて、やがてチャシ(砦)を築いたアイヌ文化が花開きます。釧路湿原周辺の台地には四〇〇カ所以上の遺跡があり、釧路市貝塚にある東釧路貝塚は、縄文時代前期（六～五千年前）としては北海道最大規模の貝塚です。

六、釧路の近世と近代

江戸時代の釧路は、十七世紀後半からクスリ場所とよばれて、漁場が開かれるとともに各地へ交通路も整備されて交易の中心となりました。明治から大正時代にかけて、石炭・水産・製紙が基幹産業へと成長し、交通や商業の中心地となりました。以降、北海道東部の拠点都市として発展してきました。

七、サコロベの人々

サコロベとは人間を主人公にするアイヌの英雄物語です。アイヌは北海道を中心としてサハリン、千島列島、本州北部に広く住み、狩猟・漁労・採集を中心として生活していました。釧路アイヌの人々は、釧路川流域を生活の拠点として、幕末頃には十数か所の集落で生活していました。実物資料を中心に、衣食住から信仰まで生活に関わる様々な資料を展示しています。

八、タンチョウ

特別天然記念物タンチョウの生活や形態について、標本、オートスライド、ＶＴＲ、全天空型ジオラマで紹介しています。同じ姿勢につくったはく製と骨格標本では、体の内と外の比較を行なえるように展示してます。オートスライドの「タンチョウのお話」やＶＴＲ「タンチョウの四季」では、釧路湿原のタンチョウの生活をつぶさに紹介しています。

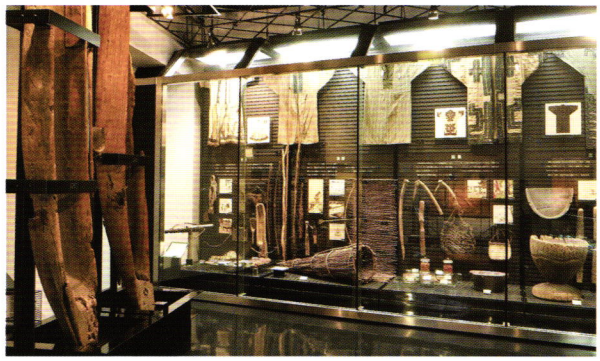
全天空型ジオラマ「湿原とタンチョウ」は、半円球の天井全面に湿原の澄んだ青空を展開し、その下に初夏の湿原で憩うツル家族と冬の雪原に舞うツルを、できるだけ自然に近い状態で再現したものです。

釧路市立博物館

釧路の先史時代

釧路の近世と近代

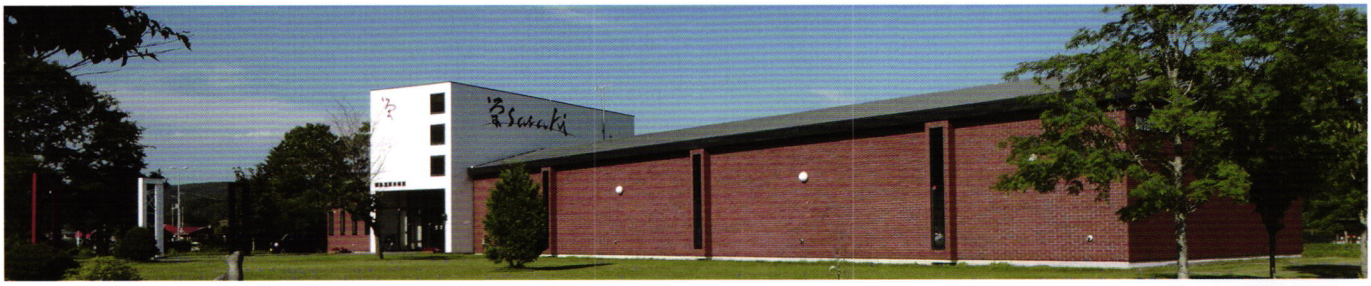
湿原とタンチョウ（夏）



サコロベの人々

湿原とタンチョウ（冬）

NPO法人 佐々木榮松記念 釧路湿原美術館



理事長 片野 良一
館　長 髙野 英弥
副館長 髙野 範子
<住所>〒085-0245 釧路市阿寒町上阿寒 23-38
<電話> 0154-66-1117
<ホームページ> http://www12.plala.or.jp/kushiro/

釧路湿原をはじめ道東の幻想的な自然や、そこに息づく人々の姿を心象風景として描き続けた佐々木榮松の油絵、水彩画、デッサン、魚拓など約６００点を収蔵・展示している。

平成二十四年に亡くなった画伯本人と交友のあった人たちが、その魅力を後世まで伝えようと　平成二十五年六月にオープンした美術館である。

お陰様で、美術館として地元をはじめ、全国から多くの来館者から高い評価と励ましをいただいております。一例ですが

「画伯の亡き後、こんなに早く美術館ができたことは夢のようです。真っ白なタンチョウが導くように立っています。改めて画伯の絵に熱い想いを持ったファンが大勢いるのだとわかります。絵が人を突き動かしていく力をもつなんて！画伯の絵からは自然への畏敬の念・壮大な宇宙・厳しい自然を生き抜いた小さな命への愛を感じます。

絵とともに湿原の自然を保護し未来の子供達へと価値を伝えていきたい。ここを訪れた人と人とが出会うことで、様々な方向に可能性が広がり、夢のある美術館を期待します。」

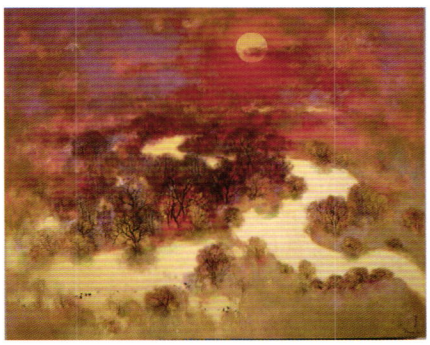
（横浜のS様からの投稿より抜粋。）

また、画伯の主張として、人々は私のことを「湿原の画家」と言いますが、私は自分から湿原の画家といったことはありません。だが、湿原の作品が著しく多いことは事実です。これは湿原の持つ空間が私の制作の上に不可欠の意義をもたせているからで、その意味では根釧原野の広大さも同じだと思っています。ですから、「道東の原野画家」とか「空間の画家」と呼んでくれた方がよいと思っています。即ち、私の作品は風土、人物、動物、植物やその他の者の命の描写でありますから、道東の心象表現が制作の基となっています。

（佐々木榮松　１９９１年「画家の手記より」抜粋）

館名を決める際、きっかけになった絵
「釧路湿原」油彩 F30 1987
当美術館のシンボルとなっている。

第３展示室の様子
大自然を背景に、鶴・鹿・白鳥、
釣り師にフローラ等々、まるで
湿原の曼陀羅の世界観である。



「湿原の秋」油彩 F100　1981
2016 年 4 月から中学校 1 年国語の
教科書 (教育出版)
「鑑賞文を書こう」に掲載

「鶴眠る」油彩 F250　1985~90
榮松の青の世界に月明かりを
浴びた真っ白な鶴群は幻想的である。

写真提供　河　瀬　　幸

目次

発刊にあたって　釧路市タンチョウ鶴愛護会　会長　吉田守人……1
愛護会設立五十周年記念に寄せて　釧路市長　蝦名大也……2
釧路市タンチョウ鶴愛護会設立五十周年を祝して　釧路市議会議長　月田光明……3
設立五十周年を祝して　北海道釧路総合振興局長　田辺利信……4
設立五十周年を祝して　北海道教育庁釧路教育局長　石川忠博……5
釧路市タンチョウ鶴愛護会設立五十周年を祝して　釧路市教育委員会教育長　林義則……6
釧路市タンチョウ鶴愛護会五十周年をお祝いして　釧路市動物園長　阿部友行……7
五十年という年月　専修大学名誉教授　元阿寒国際ツルセンター名誉館長　正富宏之……8
設立五十周年に寄せて　賀茂鶴酒造株式会社　代表取締役社長　藤原昭典……9
阿寒町を頼り　越冬するタンチョウ　釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長　高橋良治……10
五十年の歩み……11
給餌に尽くした人々……69
市内愛鳥校紹介……85
資料……113
編集後記

グラビア

表紙他写真　佐藤照雄氏提供
山﨑定作氏・大山昇氏・河瀬幸氏提供
市動物園・市丹頂鶴自然公園・市博物館・釧路湿原美術館提供

発刊にあたって

釧路市タンチョウ鶴愛護会
会長 吉田守人

釧路市タンチョウ鶴愛護会は、昭和四十年十一月三十日に、「阿寒タンチョウ鶴愛護会」として発足、五十周年を迎えました。

昨年六月十三日には、阿寒川水質浄化のための記念植樹を、十一月七日には、高橋良治釧路市鶴公園名誉園長による「親子で聞けるタンチョウのお話」と題して記念講演が行われました。また、ホームページを開設し、子供達も学習でき相互交流が出来るホームページを立ち上げました。

保護活動のおかげで千五百羽を超えるまでの生息数となり、保護活動も次の時代へと入ったといえましょう。

本日は、テーマを**「護る」から「共生」へ**とし、サブテーマを**「絶滅から保護して五十年・愛護活動は新たな五十年へ」**として、記念式典と記念講演、そして祝賀会の開催となりました。

顧みますと、絶滅したと思われていたタンチョウは、人の入ることが出来なかった釧路湿原のおかげで、釧路地方にだけ留鳥として生き残り、大正十三年、十数羽の生息が確認され、昭和十年八月、天然記念物に指定されました。

昭和十年「釧路国丹頂鶴保護会」が結成され、密猟防止と保護思想の普及が主な目的だったが、昭和三十三年八月「釧路市丹頂鶴自然公園」を誕生させ、解散しています。

一方、阿寒町では、昭和二十五年一月、故山﨑定次郎氏によってトウモロコシの給餌に成功。タンチョウの絶滅の危機を救ったことが、タンチョウ保護のはじまりでもありました。

昭和二十七年三月二十九日には、特別天然記念物に指定され、小・中学生を動員して生息数の一斉調査が始められました。

昭和三十二年阿寒中学校二代目学校長として赴任した大井健次先生によって「ツルクラブ」が設立され、保護活動が行われ、三十九年一月ＮＨＫ「こちらわんぱくテレビ局」にツルクラブ員が出演、「えさ不足でツルがかわいそう」と訴えたところ反響を呼び、全国から餌や現金などが送られて来ました。ツルクラブ員は、「日本の鶴」を発刊しお礼に送ったが、更に山の様に集まったプレゼントの処理が限界に達していました。ツルクラブ担当の伊藤博通先生より当時社会教育委員長の吉田勝美氏に相談があり、中学生だけでなく、全町あげての保護活動ができる組織と言う事で、「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」が発足。初代会長に吉田勝美氏が就任し、タンチョウ保護に関係のある地元関係団体の代表者をもって組織され、エサや募金の窓口を受け持つ事になりました。事業として「タンチョウ祭」の開催、初代会長の吉田勝美氏が苦労して、作詞・作曲・振付けを完成させた「タンチョウヅル音頭」の普及に努めました。

平成八年には阿寒国際ツルセンターが開館し、当会の活動の拠点となり、センター横にタンチョウ愛護発祥の碑を建立。タンチョウの里への飛来期間の給餌活動及びねぐらの監視活動、幼・小・中学校の愛鳥啓発の作品展、タンチョウクイズによる全国への保護思想の普及活動を行ってまいりました。

三市町の合併時には設立四十周年の節目を迎え記念式典を開催、合併後は、私が二代目会長に就任、活動を引き継ぎました。本年は、釧路市において唯一の愛護団体であることから、名称を「釧路市タンチョウ鶴愛護会」と改めております。

この間、関係機関、賀茂鶴酒造株式会社様をはじめ全国のタンチョウを愛する多くの方々から厚いご支援と、ご指導を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

おわりに、五十年間、愛護会を支えて下さいました多くの会員、歴代役員の皆様、そして今式典・祝賀会、記念誌編集にご尽力いただきました実行委員の皆様に感謝申し上げ発刊に当たっての言葉と致します。

愛護会設立50周年記念に寄せて

釧路市長
蝦　名　大　也

このたび、釧路市タンチョウ鶴愛護会が、長年にわたるタンチョウ愛護活動のなか、五十年の記念すべき節目を迎えられたことを、市民を代表して心よりお喜び申し上げます。

また、吉田会長はじめ愛護会の皆様におかれましては、タンチョウの保護活動を通して釧路市のまちづくりに多大なるご貢献を頂いているところであり、感謝申し上げる次第でございます。

さて、釧路市民憲章の中に「わたしたちは、広野に丹頂が舞い、夕焼けが太平洋を染める釧路の市民です。」と記しているとおり、タンチョウは釧路市民にとって親しみ深く、誇りとも言える鳥です。

大正十三年に、絶滅したと考えられていたタンチョウが、釧路湿原でその姿を確認されてから、すぐに官民あげての保護活動が始まりました。このような中、愛護会は、昭和四十年に設立され、タンチョウ保護の中心となって、保護を進めていかれました。

愛護会が実施したタンチョウの給餌に始まり、不足する餌の確保のほか、ねぐらの監視や越冬地に飛来するツルの分布調査、学校での愛鳥活動など、さまざまな活動を通じて、阿寒のタンチョウ保護を推進されてきました。

このようなたゆみない努力によって、いまでは、タンチョウは一、五〇〇羽を超え、絶滅の危機を脱したといわれています。市民の方々を中心とする、保護活動の結果、このような大きな成果をあげられたことに、深甚なる敬意を表する次第でございます。

愛護会の名称は、タンチョウを救いたいという教師や生徒の愛情、地元有志の善意、そして「ツルに餌を」と餌や餌代を送ってこられた全国のタンチョウを愛する皆様の思いをもって名づけられたと伺っております。

今年からは「釧路市タンチョウ鶴愛護会」と改称され、阿寒町のみならず、広い地域での保護を視野に入れた活動を行っていかれるとのことで、さらなる深い愛情をもって活動を広げていただけることをご期待しております。

結びになりますが、この度の設立五十周年を新たな契機といたしまして、今後とも根を張った地道な活動を通して、タンチョウの保護に尽くされますことをご祈念申し上げますとともに、会員の皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

釧路市タンチョウ鶴愛護会 設立50周年を祝して

釧路市議会
議長 月田光明

釧路市タンチョウ鶴愛護会が設立五十周年を迎えられますことに、釧路市議会を代表し、心からお祝いを申し上げます。

タンチョウは、赤、白、黒という色彩の素晴らしさ、立ち姿の気高さ、飛行する姿の優雅さ、そして夫婦愛のシンボルと言われるつがいの愛情あふれる生態などから、私たち釧路市民の誰もが誇りに思う存在であります。

そしてこのタンチョウを見ようと国内はもとより、海外からも多くの人が釧路市を訪れるなど、タンチョウは釧路市にとって重要な観光資源ともなっています。

そして、一時は絶滅したのではないかと言われたタンチョウの数が、湿地の環境が次第に悪化していく中にあって、今日の数までに回復したのは、タンチョウを絶滅させてはいけないという思いから、多くの皆さんが強い意志で長年にわたり努力を継続されたからであることも、私どもは承知しております。

それは、初めてタンチョウの人工給餌に成功し保護の歴史に大きな足跡を残された故山﨑定次郎様を初め、ツルクラブの観察・給餌活動が昭和四十五年には吉川栄治賞にも輝いた阿寒中学校の教師・生徒の皆さん、そしてタンチョウに関する学習会の開催や資料の発行など長きにわたり保護活動に取り組んでおられる吉田会長を筆頭とする釧路市タンチョウ鶴愛護会会員皆さんの努力と、関係団体、市民の皆様の協力であります。改めて関係の皆様に深く敬意を表し、そして心から感謝を申し上げます。

本年、設立五十周年を契機に、「釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会」から新たな名称のもとで活動をより強化していくとの決意を新たにされたとお聞きしております。タンチョウにとっての我が家とも言うべきこの地域、タンチョウが優雅に飛び交う平和な郷土を次の世代にしっかりと引き継ぎ、人と鶴とが共存する環境を守っていくことは、私たちの子孫に豊かな感性をもたらせる貴重な財産を残すことであると確信するところでありますので、皆様の新たな決意とその活動が多くの人の共感を呼び、一層活動の輪が広がりますことを念願するところであります。

釧路市タンチョウ鶴愛護会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を心からご祈念申し上げ、記念誌発刊に当たってのご挨拶とさせていただきます。

設立50周年を祝して

北海道釧路総合振興局長
田　辺　利　信

釧路市タンチョウ鶴愛護会が設立五十周年を迎えられました節目に際し、長年にわたる貴愛護会の地道な活動に、心から敬意を表します。また、記念誌が発行の運びとなりましたことに対しまして、お喜びを申し上げます。

北海道にとってタンチョウは特別な存在です。特に釧路管内の方々にとっては、かけがえの無いシンボルとなっています。

冠にその名を戴く「たんちょう釧路空港」では、飾られているポスターにイラストで、壁面に大きな写真、玄関先にはブロンズ像と、数多くのタンチョウが、飛行機を降り立つ観光客の方々を、温かくお迎えしています。釧路にお帰りになられた地元の方々にとっても、タンチョウを見ることにより安堵感を覚えるのではないでしょうか。

言うまでもなく、釧路地域は絶滅が危惧されたタンチョウを、地域住民の熱心な保護活動により、その危惧が回避された経緯があります。その後も様々な難事を乗り越えながら、千羽を越える現在の生息数にまで回復しました。道としても昭和五十六年、タンチョウの越冬地一帯を、阿寒鳥獣保護区に指定するなど保護増殖に努めてきたところです。

また、生息数が回復するにつれ、以前では考えられないような新たな問題も浮かび上がるようになりました。人の生活に近いタンチョウが増えることで、農業への被害や、電線や車両への接触事故が発生しています。給餌場に集中することで、感染症の発生も懸念されているところです。

こうした現実を見すえながら、課題解決に次のステージに向かっていくものと考えています。

環境省ではタンチョウ生息地分散行動計画を定め、繁殖地や越冬地の分散を図り、給餌に依存しない個体群を増加させ、タンチョウが安定的に生息する状態になることを目指すとしています。そのためにはより一層、関係者一同が連携を強化し取組みを進めていく必要があります。このため、貴愛護会の地域に根ざした活動は、さらに重要になっていくもの考えており、今後益々の御活躍を期待しているところです。

私たち共通の願いは、いつの日かタンチョウが人の手を借りず、自然の中で存在することです。そのときはタンチョウだけではなく、他のあらゆる生物も活き活きと存在する多様性豊かな北海道になっていることでしょう。

最後になりますが、貴愛護会のさらなる御発展と御健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

設立50周年を祝して

北海道教育庁釧路教育局長
石　川　忠　博

このたび、釧路市タンチョウ鶴愛護会が、設立五十周年の記念すべき節目を迎え、ここに記念事業の一環として記念誌を発行されますことに対し、心からお祝いを申し上げます。

貴愛護会は、昭和四十年に阿寒町タンチョウ鶴愛護会として発足以来、ツルと共存する地域の発展を目的に、タンチョウ鶴の保護の給餌、飛来地やねぐらの監視活動の実施、タンチョウ鶴に関する学習会の開催、タンチョウ鶴の専門知識をもったボランティアガイドの養成、会報の発行をはじめとする各種啓発活動などを、永きにわたり取り組まれてこられました。絶滅のおそれのあったタンチョウ鶴が千羽を超え、平成二十六年度の調査では、羽数の総数が過去最多を記録するまでに至ったのは、貴愛護会の熱心な保護活動が大きな役割を果たしており、深く敬意を表すところですあります。

北海道教育委員会といたしましても、ふるさと北海道に誇りを持ち、地域を支える人材を育成するため、郷土を愛し、発展させていこうとする気持ちを育むことができるよう、本道の自然や文化、観光などの教育資源を活用した学習の充実に努めております。

このような中、釧路管内の学校においては、地域の自然や生き物の多様性に気付き、大切にする態度を育むことを目的として、学校農園でタンチョウ鶴の餌となるデントコーンを栽培し、餌場となるニオづくり、給餌活動などを行ったり、タンチョウ鶴の生態や給餌の歴史・方法などについて学習した成果を地域住民や観光客等へ広く情報発信したりするなどの取組が行われているところであり、こうした取組に対しまして貴愛護会の皆様のお力添えをいただいておりますことに改めて感謝申し上げます。

これまで五十年の永きにわたる取組は、子どもから大人までが地域ぐるみで継続的に進めてきた活動であり、タンチョウ鶴の保護活動を通じて湿原の保護や地域づくり活動にもなっております。今後とも貴愛護会の皆様がタンチョウ鶴及びタンチョウ鶴の生息に適した自然環境の保護のための地域一体となった活動の推進者として、より一層御活躍されますことを御期待申し上げます。

国の特別天然記念物であり、国内希少野生動植物、さらには北海道のシンボルでもあるタンチョウ鶴が、これからも北の大地で安心して生息できることを祈念し、お祝いの言葉とします。

釧路市タンチョウ鶴愛護会設立50周年を祝して

釧路市教育委員会
教育長　林　　義　則

釧路市タンチョウ鶴愛護会が設立五〇周年を迎えられ、長きにわたる活動の歩みをまとめられた記念誌を発刊されますことに対し、心からお祝いとお喜びを申し上げます。

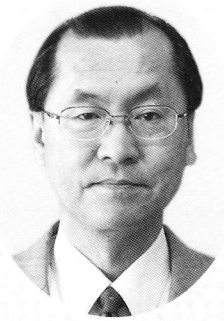
タンチョウが絶滅の危機を脱することとなったきっかけは、猛吹雪に襲われた昭和二十五年の冬、阿寒町上阿寒の故・山崎定次郎氏が畑に飛来したタンチョウに自家用のトウモロコシを分け与え、ツルがついばみ、人工給餌に初めて成功したことによると言われています。その後、山崎さんのほかにも、上阿寒の農家をはじめとする阿寒町の人々がタンチョウに餌を与えて、彼らの越冬を手助けしました。徐々に冬を越すタンチョウも増え、阿寒町はタンチョウの暮らす町となりました。

昭和三十二年には、当時阿寒中学校の校長でありました故・大井健次氏が、動物愛護教育の一環として、タンチョウの保護と生態研究を生徒と共に進めるために、「ツルクラブ」を立ち上げ、生徒たちを中心とするタンチョウの保護・研究活動も始まりました。生徒たちは、ツルの越冬を助けるためにトウモロコシの栽培やドジョウの養殖などを行い、ツルの餌を自ら作り、給餌も行いました。また、ツルの熱心な観察を通じて数多くの記録を残していきました。生徒たちの観察記録は「鶴の日記」としてまとめられ、発表されました。これは現在でも、当時のツルを知る貴重な記録となっております。この中学生による保護活動と研究活動は、全国的に話題となり、「吉川英治賞」を受賞したこともあって、阿寒中学校は一躍、世間の注目を浴びるようになりました。

阿寒町タンチョウ鶴愛護会（現・釧路市タンチョウ鶴愛護会）は、この生徒たちの活動を町ぐるみで応援するために、昭和四十年に結成されたと聞いております。愛護会はそれまでの保護活動を、さらに活性化され、さまざまな取り組みを行って、現在に至っております。その結果として、阿寒町上阿寒は三百羽近くのタンチョウが越冬する一大越冬地となり、また、北海道に生息するタンチョウも千五百羽を超すまでに増えてきました。

これからの愛護会は、保護から一歩進めて、タンチョウと人との共生に向けて活動を更に前へと進めていくために、生息地の河川環境の浄化を目的とした植樹事業にも取り組まれるほか、五十周年を迎えるにあたり、名称も「釧路市タンチョウ鶴愛護会」と改称し、阿寒町と同様、多くのタンチョウが越冬する音別町等も含めて、釧路市全域で活動されると伺っております。釧路市教育委員会では、今後とも愛護会の皆様と協力し合って、「釧路の風土で育まれ、未来を拓く心豊かな人づくり」に向けて、タンチョウをはじめとする様々な動物たちの命を紡ぐ活動を通して、環境教育・心の教育・ふるさと教育を推進していくことをお誓いして、お祝いの言葉に代えさせていただきます。

釧路市タンチョウ鶴愛護会 50周年をお祝いして



釧路市動物園長
阿　部　友　行

釧路市タンチョウ鶴愛護会設立五〇周年、誠におめでとうございます。

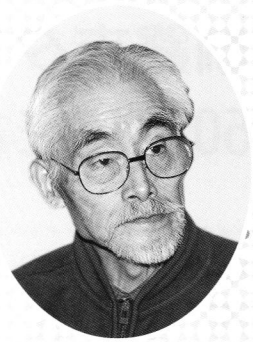
北海道のタンチョウは、昭和二十年代後半に人工給餌が成功したことによって、数が増え始めました。それにより各地での保護活動も、いっそう力が入り始めました。阿寒町タンチョウ鶴愛護会（現・釧路市タンチョウ鶴愛護会）は、町をあげての保護活動を、さらに進めていくために昭和四十年に設立されたと伺っております。

釧路市（旧・釧路市）におけるタンチョウ保護は、昭和三十三年の釧路市丹頂鶴自然公園の開設が大きな転機となっております。野生下の保護だけではなく、タンチョウをなるべく自然に近い状態で飼育し、繁殖したツルを野生に返すこと、飼育することによって生態を詳しく明らかにすることを目的に鶴公園は造られました。ツルの生態についても当時はまだ不明なことが多く、飼育・繁殖にはたいへん苦労したようです。最初の飼育員で、現在は名誉園長でもある高橋良治氏のたゆまぬ努力により、昭和四十三年には自然孵化による人工育雛に初めて成功、昭和四十五年には人工孵化にも成功しました。ヒナの飼育に当たっては、阿寒中ツルクラブの生徒たちから、小魚を届けてもらうなど、阿寒の方々のたくさんのご協力もいただいたということです。

昭和五十年には釧路市動物園が開園し、動物園内にタンチョウ保護増殖センターが昭和五十七年に開設いたしました。動物園でも飼育繁殖が始まり、昭和六十一年には人工ふ化に成功しました。また、野外から傷ついたり、弱ったりしたタンチョウを保護し、治療することも始まり、今にいたるまで多くのツルが収容されてきています。平成八年に阿寒町に開館した阿寒国際ツルセンターも合併に伴い、釧路市動物園の一施設として、タンチョウ保護のための活動を続けております。ツルセンターの運営や怪我したツルの収容などに当たりましても、愛護会の方々のご協力をいただいており、たいへん感謝しております。

動物園では、飼育繁殖や、保護収容など、飼育施設を生かした保護活動を行ってまいりましたが、釧路市タンチョウ鶴愛護会は、タンチョウの越冬を助けるために、給餌やねぐらの監視活動、調査活動を行ってこられたと伺っております。今後は、ツルとの共生を目指して、環境整備などの活動に取り組まれると聞いております。タンチョウは順調に数が増えてきておりますが、人との軋轢など、新たな問題も生じてきております。釧路市動物園も野生復帰できない傷病鳥の増加など、課題も出てきておりますが、愛護会と協力して、新しいタンチョウと人の未来を作っていけるように、ともに尽くしていきたいと思います。

50年という年月



専修大学北海道短期大学名誉教授
元 阿寒国際ツルセンター名誉館長　**正　富　宏　之**

あとひと月もすれば東京オリンピックという一九六四（昭和三十九）年九月一日、釧路市郷土博物館の新米館長として私は着任し、緊張した最初の日を迎えた。

その丁度五十年前、一九一四年九月一日午後一時、アメリカの動物園で、一羽のメスのハトが死んだ。一見、些細にみえるが、それは野生生物保護の歴史にとり、記憶すべき事件だった。

ハトの名はマーサ。アメリカ初代大統領J・ワシントンの夫人の名に由来する。ハトは、北米に住んでいたリョコウバトである。このハトは十八世紀に五十億羽！もいたらしい。が、森林開発、食用のための乱獲、繁殖力の弱さ（産卵は年一個）などが重なり、急激に数が減り、飼育されていた最後のマーサが死んで、地球上から姿を消した。

しかし、これは遠い他国の話ではない。まかり間違えば、タンチョウも同じ道を辿る危険が十分あった。生息地である北海道の湿原は土地開発により急速に失われ、北海道特産物として十九世紀終盤まで捕獲され、塩漬けにして本州へ食用に売られた。しかも、卵は年平均で一・八個しか生まれないから、前世期初めには、日本でも絶滅視する人さえ現れていた。

それでは、ハト（絶滅）とツル（回復）の運命を分けたのは何だったのか。

確かに、両者とも産卵数は少ないが、タンチョウは環境への適応力があり、餌と営巣条件が整えば、しぶとく繁殖を続けることができる。つまり、ツル自身の持つ繁殖能力の強さが働いたのも確かだ。だが、その力を発揮できる条件がなければ、確実にタンチョウも絶滅しただろう。その条件とは、冬の十分な餌の存在である。では、餌を用意したのはだれか。それは役人でも研究者でもない。日々タンチョウに接し、全くの善意から、自家用の穀類をツルのために分け与えた、阿寒をはじめとする地域の人々である。給餌活動は徐々に広がり、効果も見えてきた。そして、一九六五（昭和四十）年、阿寒ツル愛護会が発足した。が、当時、ツルの数は二百羽ほどで、あとどれほど増えるか、それとも減るか、見当もつかなかった。

あれから五十年。ツルの数も千五百羽を超えた。愛護会を立ち上げた吉田勝美前会長をはじめ、ツルをいとおしんで餌を与え続けた山崎定次郎・加地良次給餌人ほかの皆さんなど、鬼籍に入られた方々は、現状を想像しえただろうか。なるほど、五十年前に比べ、ツルの寿命や生存率などのほか、将来や過去の予想・推測も、今はある程度可能になってきた。しかし、地球温暖化や農業人口減少など不特定要素があり、五十年後のタンチョウの実態を、残念ながら見定めるのは難しい。

ただ、この愛護会の活動は末長く続くだろうし、ぜひそうあってほしい。五十年後に発行されるであろう記念誌で、百年前に地域の多くの人々がタンチョウの魅力にひかれ、日本人の心にも棲む鳥の維持のために努力したことを、改めて取り上げてほしいと願っている。

設立50周年に寄せて

賀茂鶴酒造株式会社
代表取締役社長 **藤 原 昭 典**

釧路市タンチョウ鶴愛護会設立五十周年、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。承りましたところ、ご当地のタンチョウ鶴保護活動の端緒は、昭和二十五年一月に故山崎定次郎様が始められた給餌活動とのこと。吉田会長様はじめ会員の皆さまはもとより、爾来営々と保護活動を営まれた先人の皆さまの、タンチョウ鶴へ注がれた愛情とご努力に改めて敬意を表させて頂きます。

弊社の酒銘「賀茂鶴」は、明治六年に命名されました。「賀茂」とは酒をかもす（醸造する）という動詞から転訛したもので、酒という意味を持っています。「鶴」は気品の高い瑞鳥であり百鳥の王でありますが、明治の初年頃までは弊社の所在地である（旧）広島県賀茂郡西条町に、毎年たくさん飛来しておりました。こうしたことから、「賀茂鶴」という名が「酒の中の王様」という気持ちで考え出され、今日に至っております。また、弊社の伝統的ラベルは、「谷文晁」作「富士双鶴の図」を使用しており、いろいろとタンチョウ鶴とは深いご縁がございます。

そんな弊社と貴愛護会との出会いは、昭和五十九年一月八日十八時のＮＨＫ「こちらワンパクテレビ局」に於いて、ツルクラブの皆さんの給餌活動と飛来地の餌不足の様子が放送されたことでございました。爾来、微力ながら活動のお手伝いをさせて頂いておりますことは、大変光栄に思っております。

それにしても、渡りの習性のタンチョウ鶴が住み着くということは、豊かな自然と豊富な餌はもとより、阿寒川をタンチョウ鶴が安心して過ごせる川に仕上げ、また、厳しい冬には凍った川の氷を割る等の、町をあげての正に献身的な保護活動の賜物と存じております。

弊社は、来る平成三十年八月に法人設立百周年（賀茂鶴命名百四十五周年）を迎えます。そのため、現在次の百年へ向けての経営基盤を整備すべく、全力で取り組んでいるところでございます。貴愛護会におかれましても、百周年へ向けて今後更に充実した活動を続けられることをお祈り致しますとともに、弊社も会社の続く限り活動のお手伝いをさせて頂くことをお誓いして、お祝いの辞と致します。

阿寒町を頼り越冬するタンチョウ

釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長
高　橋　良　治

このたび、特別天然記念物保護五十周年を迎えられました釧路市タンチョウ鶴愛護会に対し、心からお喜びと感謝を申し上げます。昭和三十三年からタンチョウと共にしてきたものにとって、タンチョウは生涯を通じ深い因縁のあります鳥でございます。顧みますと、魚釣で、カモ猟と農作物で、タンチョウを知りました。平戸前（現北斗）の湿原を流れる長沼、穏祢平（現山花）旧河川や、三ヶ月沼、大楽毛川には、多種のカモ類が渡来していまして、特に冬鳥として渡来するカワアイサは、単独か2～3羽で渡来するのを追って猟を行っていました。昭和二十六年に湯波内（現櫻田）でタンチョウが射殺された事件があってから、タンチョウを注意して見るようになりました。秋から冬に気温が下がりはじめ、沼も小川も凍ると、鳥たちは阿寒川へ移動するのでした。淀の浅瀬で見たタンチョウは、年々場所を上流へ上流へと移し、湯波内（現櫻田）から下舌辛へと移動していました。この頃から冷害が続き、トウキビや豆科の作物が不作となり、タンチョウは餌を求めて移動したように思われましたが、天候異変による大雪が、タンチョウを移動させました。特に春先のドカ雪は、大洪水となって阿寒川を怒り狂ったように流れ、土手を壊し、川底を変えたのでした。それまで、下舌辛地区で餌を求めては、川の中で見られたタンチョウも、年々さがる気温に川岸が凍り、浅瀬が無くなり、阿寒町十七線三十八番の阿寒川にカモ達といて、タンチョウは3羽と5羽連れで陸に上がって地面を掘り、何かを食べるようになりました。この場所は元木材が流送され、木材を引き上げていた水切場であり、積み重なっている木の皮の下に凍死の虫類が見られました。また周辺に住む人々は、トウキビの殻をニオに立て、トウキビを与えていましたが、十七線の川も凍るようになって、タンチョウは十九～二十三線へ移動し、その数は五十一羽を確認しました。阿寒町タンチョウ鶴愛護会は、砕石業者の協力を得て、阿寒川をタンチョウが安心して過ごせる川に仕上げられましたが、マイナス三十一℃と厳しい日はその川も凍り、タンチョウ達は二十六～二十九線の上流に移動しました。タンチョウ鶴愛護会は川の氷を割り、タンチョウを二十三線に戻してくれました。風もなく、やたらと気温のさがる日は、ねぐらの舌辛川へ行く群れがあって、愛護会の保護区域は広いものでした。また阿寒地区は冷害にもトウキビや穀物が実り、地区農家の畑にはいつもタンチョウの採餌の姿が見られます。

阿寒住民に救われたタンチョウ達。厳しい冬も安心して身を守れる川、阿寒中学校にツルクラブがあって、住民を代表してくれる山崎定作さんがおります。釧路市タンチョウ鶴愛護会が、いついつまでも引き継がれますよう、心からお祈り申し上げご挨拶といたします。

五十年の歩み

釧路市タンチョウ鶴愛護会設立の経緯

ホロロン　　ホロロン　　イヤコーコ

愛にこたえて　　丹頂鶴(つる)の群(むれ)

ここに阿寒に　　棲(す)みついた

撮影提供：佐藤　照雄

愛護思想の高まりをめざして

ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
愛にこたえて　丹頂鶴の群
ここに阿寒に　棲みついた

昭和四十二年にタンチョウ鶴愛護会が制定した「丹頂鶴音頭」の一節である。

この音頭の制定にまつわる話題は後述するが、阿寒の住民は毎年秋になると忘れずに里帰りするタンチョウをこよなく愛し、留鳥としてこの地にとどまることを願って町ぐるみで保護に関心を寄せている。

タンチョウ鶴愛護会はこのような住民のツルに対する愛情の高まりから誕生したものである。昭和四十年十一月三十日も保護に関係のある地元の関係者の代表をもって設立され、保護の目的を達成するために、次の事業を行うことを決めた。

まず、ツルの保護活動として、飛来分布調査、生息観察、一斉調査、被害農家調査、給餌対策及び標識説明板の整備をすることとし、更に愛護思想の普及徹底を図るための事業として、タンチョウに関する資料の出版や理解を深めるための講演会、映画会、展覧会の開催、その他のツルの保護校並びに愛鳥家との交流などを上げ、このときを期して地道な活動が展開されることになるのである。

発足後、最大の事業として取り組んだのは「タンチョウ音頭」の歌と踊りの制定と普及であった。初代会長の吉田勝美さんの依頼によって、作詞は今は亡き藤田印刷社長であった藤田久さん、作曲は根室出身の飯田三郎さん、振り付けは釧路の花柳徳保さんによって完成したものである。この四者が一体となって、タンチョウに対する純粋な愛一筋にこの音頭が出来上ったのだった。

この音頭の完成の陰には、ひたすらタンチョウの愛護運動に生涯をかけ、この音頭制作にも身をなげて奔走した会長の吉田勝美さんがありそして、この運動の推進役として事業を成功に導いた今は亡き藤沢盛夫さん（当時、社会教育係長）の努力と功績も忘れてはならない。特にこの愛護会を組織化するとき「タンチョウ保護、それは単なる保護ではなく、人の心と愛が加わらなければ本物の保護にはならない。会の名称も愛護会とすべきだ」と主張した吉田会長の言葉を記録として残したいと思う。

音頭制定時に、先の四名の方々が残されたコメントを記録として紹介し、タンチョウに寄せられた愛情、そして音頭制作への強い情熱のほどを後世に伝えたい。

会長・吉田勝美さん　「〝丹頂鶴は日の本、祝いの瑞鳥、たくさん幸福わせ呼んでくる〟この音頭により我が日本が、郷土がより豊かにより和やかなまとまりのあるものになることを念願します。」

作詞者・藤田久さん　「人間と鳥との交歓、無言の愛情、自然との調和、タンチョウのこの美しさ、このやさしさを何とか芸術作品にまとめ、そのよろこびを世に分かちたいと念願して私は想を練りました。」

作曲者・飯田三郎さん　「この丹頂鶴音頭が新民謡として全国的に愛唱されるものとの意気込みでの快心作であり、現代の若い人たちにも理解出来るリズム感と同時に、北海道先住アイヌ民族の調べも取り容れるよう考慮しました。」

振付者・花柳徳保さん　「私自身の勉強としては上阿寒の山崎さんのお二階で特別に鶴の群れの観察の便を与えられました。また丹頂鶴自然公園の高橋さんに鶴の舞う秘伝の伝授を願ったり、鶴の特別演技の鑑賞をお恵みいただき、決定版を構成しました。」

このタンチョウ音頭の踊りにはタンチョウの図柄の浴衣も作られ、昭和四十一年から三回行われたタンチョウ祭を契機に、阿寒の郷土芸能として、どっかり根を下ろした。子供たちの運動会をはじめ、ふるさとまつり、盆踊りなどの諸行事で普及が図られ、これを通してタンチョウ愛護意識は地元町民に一段と強まることになったのである。

餌や募金の窓口に

昭和二十五年冬の山崎定次郎さんによる餌付けの成功以来、タンチョウは年々その数を増していったが、当時は、給餌に対する行政の対応も十分でなく、地元の農家や子供たちの善意に頼らざるを得なかったのである。阿寒中学校にツルクラブが誕生したのもそのような経過の中であり、給餌や調査などにも子供たちなりの貴重な役割があったのである。

阿寒中学校のツルクラブのことは別な項でふれるとして、校長の大井先生を中心とする学校ぐるみの活動が昭和三十九年一月、NHKテレビの子供番組「こちら、わんぱくテレビ局」で全国に放送された。この放送の中で、ツルクラブ員が自分たちの体験をもとに「エサ不足でツルがかわいそう」と訴えた。その二日後、美幌町の根塚恵子さんがトーモロコシ十キログラムを送ってくれたのをはじめとして全国的に大きな反響をよび、数ヶ月の間に寄せられたエサや募金は六百件に及んだのである。その後、毎年、札幌の藤の沢小学校をはじめ、全国の個人や団体から阿寒中学校や町教委、釧路教育局を通じて送られてくるようになるなど、タンチョウ保護に対する関心は全国的に高まったのである。

阿寒中学校としては、早速自分たちの活動のあゆみとツルの生態研究をまとめた冊子「日本の鶴」を発行しお礼に送ったのであるが、山のように集まったプレゼントの処置とお返しに頭を痛め、手が回りきらない状態が続くようになった。このような中で、タンチョウ鶴愛護会が誕生し、エサや募金の窓口を受けもつことになったのである。

全国からのエサのプレゼントはその後も数年続くことになるが、発足間もなく、どこかのテレビ局がタンチョウの好物は「茶ガラです」と、間違った放送をしたために、「病院ぐるみでためたものです、かわいそうなツルのために」とか、「老人クラブで毎日のように集めたものです」などと手紙が添えられた「茶ガラ」が大きなダンボール箱で送られてくるようになり、事情を書いたお礼の手紙を出すのに事務局はテンテコ舞いをさせられることとなった。そこで、白鳥のくる根室のある町にトラックで何回か送り届けたが、それも断わられるようになりついには、現物の処分にホトホト困って、ツルにその愛情を伝えることが出来ない複雑な気持ちで処理したが、この時ほど善意で送ってくれた人たちに、申し訳ないと思ったことはなかった。

それにしても、タンチョウに対する関心の高さとやさしい人たちの多いことにほんとうに驚いたものである。

ツルに対する善意は、今なお続いているが、中でも釧路まきばユースホステルのペアレント太田佳克さんは、訪れるホステラーにタンチョウ保護を訴え、その浄財を昭和四十九年以降毎年続けて愛護会に寄せられ、五十六年十二月でその額は十九万四千円にもなった。

また、ツルの名を商標にしている賀茂鶴酒造（本社、広島県東広島市）と日本清酒（本社、札幌市）の二社は、昭和四十年の発足以来毎年多額の寄付金を「エサ代の一部に」と、愛の定期便は続けられている。これらの浄財は、愛護会活動の貴重な財源とな

り、これまで地道な活動が展開できたのも、これらの人たちがささえてくれたお蔭と言える。

広く保護活動を展開

愛護会が発足したとき、タンチョウを直接保護する団体としての期待と役割は大きかった。タンチョウの給餌畑の耕作を農家に委託したり、ドジョウの養殖池を造って冬季の小魚を確保したり、会独自で飛来状況を調査したのをはじめ、タンチョウ見学のため訪れてくれる人人の影響からタンチョウを護るため観察施設の設置を訴え、会予算の中にそのための積立てをするなど地道な保護運動が展開された。

発足以来この十六年間の運動の中で特筆すべき成果は、昭和五十六年十月から飛来地一体が「阿寒鳥獣保護区」に指定されたことである。長い間の運動の大きな成果であった。これは、銃によるタンチョウへの影響が心配され、断定できないもののハンターらによる事故も数件あったことから強力に保護区指定を働きかけた結果、飛来地域の南北約十キロメートル、東西七キロメートルにかけた約五千三百七十三ヘクタールが鳥獣保護区に指定され、環境の保全が一段と図れることになった。従来この指定は林野が中心であるが、阿寒町の場合は市街地や農家を含んでの広域指定という点でユニークなものとなり、今後の運用と効果が期待されている。

活動の輪を全国に

当初から愛護会は、タンチョウ愛護に関係のある地元関係者の代表者をもって組織された。いわば保護の指導機関のような性格をもっていた。そのため財政や活動力などの点では限界があるため、昭和五十六年度から賛助会員制度を設けたのである。

これは、愛護会活動に対して町内はもとより広く全国の愛鳥家に協力、支援の手を募り、同時にタンチョウ愛護思想の普及も図ろうというのが制度の大きなねらいであった。広く大きな活動をするためにはこの会の趣旨を理解し、これを支えてくれる善意の賛同者が必要になったのである。

昭和五十六年十二月の下旬から開始したところ、一口三千円で延べ九十二口、八十四名が賛同し会員として協力を申し出た。地元釧路市をはじめ、遠くは九州の人も心よく入会を申し出た。今後は、この保護活動に「自分はタンチョウの愛護活動に参加しているというプライド」を持った人たちがどんどん増え、タンチョウに対する保護思想が更に一段と全国に広まることを期待しているのである。

そのことにより、今問題となっているタンチョウの生息地をおびやかす悪質カメラマンの行為が、今後減少していくであろうことを願っているのである。

昭和五十七年十一月四日発行の
「タンチョウその保護に尽した人々」より
愛護会前事務局長　佐藤照雄　記

昭和四十年度

5・10 はぐれヒナ鶴人工飼育に成功
12 文化庁**柳川寛治記念物課長**自然公園視察
16 野鳥功労者として釧路管内のタンチョウ関係者二十三名道から表彰
16 タンチョウ給餌人懇談会
24 タンチョウ営巣地状況調査
7・5 タンチョウ鶴自然公園入園料徴収許可となる
9・8 鳥取県倉吉市から剥製譲渡申請（道外から初めて）
11・30 **阿寒町タンチョウ鶴愛護会発足**
12・4 タンチョウ生息状況一斉調査 一七二羽確認
1・28 第二回タンチョウ給餌校交流会
30 第一回タンチョウ祭開催
30 管内給餌七校交歓会開催（阿寒町）
3・8 特別天然記念物釧路のタンチョウ営巣地拡張打合会
下雪裡小、愛鳥優良校で知事表彰
10 特別天然記念物「釧路のタンチョウ」の名称変更について意見聴取
25 文化財保護委員会、釧路湿原を天然記念物にする旨答申

阿寒町タンチョウ鶴愛護会

顧　問
大野直栄（阿寒町長）、野沢定太郎（町教育委員長）
大沢彌志男（町議会議長）、松野政吉（市庁長、管内丹頂鶴保護会長）、中田富蔵（町社会文教常任委員長）
平邑光弘（釧路地方教育局長）、斉藤栄助（営林署長）
正富宏之（釧路博物館長）

役員名簿

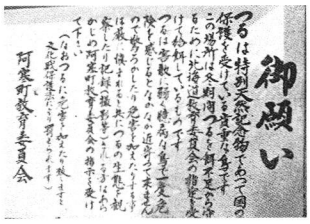
会　長	吉田勝美	
副会長	横沢宇宙	
事務局長	藤沢盛夫	
書　記	伊藤博通	
〃	前田正雄	
理　事	鎌田勉	
〃	太田佐市	
〃	大田一一	
〃	木村晴一	
〃	奥山弘	
〃	加地良治	
監　事	三浦二郎	
〃	山崎定次郎	

愛護思想の普及

★ **〝日本のツル〟映画会**
タンチョウの四季16ミリフィルム等を借用上映ＰＲ

★ **〝日本のツル〟写真会**
道新岩松健夫氏の作品等を借用

★ **給餌校生徒との交流会**
管内給餌校児童生徒と町内子どもの交かん会



注　意　札

保護事業

★ **給餌対策**
給餌人の委嘱と飼料の配送及びドジョウの養殖

★ **一斉調査への協力**
生息状況一斉調査に児童生徒と会員の協力

★ **飛来の分布と生息観察**
阿中ツルクラブを中心とした鶴日記の継続記帖と生態資料の収集

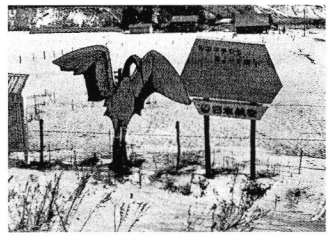
★ **標識説明板の補修と新設**
既設説明板の補修とＰＲ用模型板の新設

★ **タンチョウ保護パトロール**
毎週１回給餌ヶ所の訪問と併せて保護のパトロール

★ **給餌功労者の表彰**
委嘱給餌者と陰の給餌者として協力された方々を表彰する

★ **タンチョウ愛護標語募集**
タンチョウ鶴の愛護にふさわしい標語を募集、保護の関心を高める

★ **第１回タンチョウ祭**


給餌場入口

昭和四十一年度

5・9 タンチョウ営巣地調査（九～十五日）
（文部省**吉川調査官**来釧）

5・ **丹頂鶴自然公園でヒナの自然ふ化に初めて成功**

19 釧路湿原に野火発生（十九～二十一日）北斗地区で巣一個焼失

9・2 タンチョウ早くも民家に飛来
国鉄茅沼駅を給餌場に依頼

9・ タンチョウ生息地釧路湿原払下げ

10・14 タンチョウによる農作物の被害続出

11・24 愛知県**片山与四郎氏**からドジョウ二万匹贈られる。

12・3 タンチョウを守る子どもの集い開催
（文化財保護委員会**藤井事務官**及**斎藤春雄氏**来釧）

5 タンチョウ生息状況一斉調査
一七〇羽確認、十市町村四十三地区、協力学校六十一小中高等学校
タンチョウ生息状況一斉調査十五周年を記念し、道教委から調査協力校及団体に感謝状及記念品が贈呈される

3・5 第二回阿寒町タンチョウ祭開催
タンチョウ音頭誕生

―タンチョウを守る子どもの集い―

一、趣旨　タンチョウを守る児童生徒が集い各校の実情を交換し、今後の一斉調査等タンチョウを守ることの充実を図るとともに文化財保護思想の普及を期する。
二、主催　北海道釧路地方教育局
　　　　　釧路丹頂鶴保護会
三、場所　阿寒町、阿寒小学校
四、対象　管内タンチョウ一斉調査協力校
五、内容　感謝状、記念品贈呈
　　　　　タンチョウのお話（**斎藤春雄氏**）
　　　　　舞踊、歌唱指導、合唱
　　　　　（**橋本道博氏**）

タンチョウヅルの卵に被害
釧路原野の野火　現地調査でわかる

十九日から四日間燃え続け、三千五百ヘクタールを焼いた釧路原野の野火は、特別天然記念物タンチョウヅルの保護指定地外の営巣地をなめにし、タンチョウヅルの卵、ヒナの被害が心配されていたが、二十五日釧路地方教育局が行なった現地調査で営巣地一ヵ所が焼失、卵が被害を受けていたことが判明、このほかにも数ヵ所被害を受けた営巣地があったと推定され、こんどは保護指定地の拡大、野火防止策の確立を急いでタンチョウヅルの保護をすすめる必要性がでてきている。

営巣に使われた枯れ草は野火に焼かれて黒こげになり原形はくずれているが、長さ一メートル、幅四、五十センチほどの円形のものと推定された。焼失前なら周囲に一メートル前後のアシ、ヨシが茂ってまず人目につかないが、焼け野原となった原野ではこんもりと高くなって風にさらされていた。

二十五日の現地調査は、釧路地方教育局の石川社教係長と小野主事によって行なわれた。被害をこうむった営巣地が発見されたのは釧路市大楽毛の本州製紙工場奥の原野で、通称長沼といわれる細長い沼の近く。

石川係長、小野主事が焼け跡を入念に調べたところ、細かく割れたツルの卵のカラが発見され、ここにツルが営巣、抱卵していたことが確認された。発見された卵のカラには薄い皮膜のついたものがあり、またうぶ毛のついたカラが発見されたことから、カラを破る寸前のものとみられる。巣近くにこの死体があると捜したが死体は発見できなかった。鎮火後日数がたっていることから、カラス、野ネズミに食べられてしまった可能性も強い。

この営巣地は今月にはいって本州製紙工場近くの住民がツルの飛来を目撃したという情報にもとづいて発見されたものだが、野火で焼失した北斗、鶴野、安原などの原野湿地帯は、これまでも営巣が確認されている地域。ことしは同地域の営巣調査が行なわれず、営巣地の確認はしていないが、かなりの営巣地があり、被害を受けたものと推定される。

焼けたタンチョウヅルの巣で卵のカラを収集調査する石川係長（右）と小野主事

トウキビで補償
道教委　ツルの被害農家に

釧路地方教育局は管内のツルによる畑の被害調査を進める一方、道教委とも連絡をとってその被害補償対策を検討していたが、このほど被害を受けた農家に対して被害相当分のトウキビを補てんすることを決めた。

特別天然記念物のタンチョウヅルが農家の畑で好物のトウキビやソバをついばむのは毎年のことだが、これまでは農家の人たちもツルの保護上多少の被害には目をつぶってきた。ところがことしは冷害の影響で野にエサが少なくなったのか例年よりひと月も早く九月初めから農家の畑にツルが舞い降りてトウキビを食い荒らし、ことに阿寒町の農業、山崎久助さんは十八アールのトウキビが全部食われ四万五千円ほどの損害を受けたーと阿寒町教委を通じて釧路地方教育局に相談を持ち込んだ。

連絡を受けた同教育局では被害額の大きいのに驚いて、ほかにも被害があってはとさっそく管内全町村に被害調査を依頼したところ十月末までにさらに阿寒町の農家三戸からトウキビの被害届け出があり、その被害額は山崎さんの分も合わせて十二万一千円にのぼった。このため同教育局は実情を道教委に連絡、補償対策を検討した結果、同教育局に全国の愛鳥家から寄せられたツルのエサ代のなかから被害相当分のトウキビを農家に補償することを決め、また今後毎年こうした被害が予想されるので給じ事業の拡大を図るとともに被害防止対策について現地の人たちと研究をすることにした。これについて北川釧路地方教育局長は『こうした被害によってツルに対する愛情が薄れるのが心配だ。補償がまとまったが地元とも話し合っていっそうツルの保護対策を強めていきたい』と話している。

ドジョウ池へ放流

昭和四十二年度

5・13　タンチョウ営巣地状況調査（十三～十五日）

6・22　**タンチョウの名称及び指定地域変更**
文化財保護委員会告示第五十号
特別天然記念物「タンチョウ」
地域を定めず（主な生息地北海道）
「天然記念物釧路湿原」五、〇一一ヘクタール

7・6　日本動物学会第十八回大会で、**正富宏之、高橋良治氏**「釧路のタンチョウ自然公園において観察した抱卵例」について報告する。

8・26　タンチョウ給餌人懇談会
十月七日　阿寒町
十月二十六日　鶴居村

10・7　タンチョウ剥製道外で展示
十一月二日　千葉市
十一月十四日　鳥取市

11・2　「タンチョウを守る子供の集い」を開催

12・3　タンチョウ生息状況一斉調査
二〇〇羽確認

1・28　5　阿寒中学校、ツル観察十周年の集い
第三回阿寒町タンチョウ祭

タンチョウ ツルに 愛の手を

昭和42年11月18

一握りきょ出運動

町ぐるみの呼びかけ

＝阿寒＝

タンチョウツルのエサにどじょうを三年間送り続けている愛知県一の宮の片山与四郎さん宝五は、ことしもまた、二万匹のどじょうを空輸、関係者はこの遠く離れた片山さんの善意に感激している。

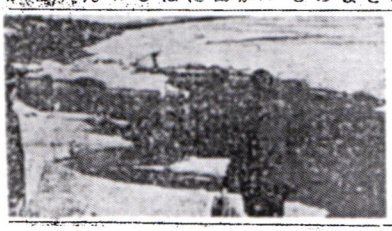
このどじょうは、阿寒中学の特設のどじょう池に入れて、越冬するツルのエサになる訳だが、阿寒町でも、地元でも全国各地からおくられてくるエサに頼っては、町民の恥だと、同町教委が呼びかけて、ツルのエサの一握りきょ出運動を展開する。

阿寒町の農家の庭先には、ことしもエサを求めるツルが飛来しているが、毎年のことながら悩みはエサ不足、多のエサ不足でタンチまれている報道はマスコミで取りあげてから、全国各地から、善意のエサがおくりこまれて来るが、阿寒町教委では、そんな好意に頼る前に地元でエサ集めをしようと呼びかけているもので、それによると一戸で一本、一人で一握りのトウキビをきょ出しようというもの。

運動は今月末から進められるが各職域団体や町内会、婦人会に働きかけて、小・中生徒が各学校に持ち寄るもの。この働きかけには地元民も大いに賛同、早くも少しずつのトウキビが持ちこまれており、関係者は発送がよいと喜んでいる。

この運動は地元阿寒ばかりでなく釧路市や隣接町村にも賛同者が

ツルの好物 どじょう



とうきびを手に、ツルを見守る阿寒中学の生徒

どじょうを空輸

愛知県の片山与四郎さん

昭和四十三年度

4・25 丹頂鶴自然公園でヒナ誕生
5・13 タンチョウ営巣地状況調査
6・ **タンチョウ人工飼育に成功**
「クン」、「シン」、「ロン」の三羽成育
8・ 下雪裡鳥獣保護区四・一六ヘクタール指定
8・ 丹頂鶴自然公園十周年を迎える
9・ **釧路タンチョウ人工飼育保護センター完成** ― 総面積 七四・二平方メートル
10・7 タンチョウ撃たれる
浜中町藻散布においてタンチョウ一羽銃撃される
11・20 阿寒でツルのドジョウ養殖池造成
12・5 タンチョウ生息状況一斉調査
一七一羽確認
12 リーダースダイジェストアジア編集局長
阿寒中ツルクラブを取材訪問
（一月号に登載される）
3・6 西ドイツ鶴学者**ヘンリー・マコースキ氏**来釧

おめでたが二つも
釧路の丹頂鶴自然公園

釧路市鶴ヶ丘の市立丹頂鶴自然公園で、最近〝おめでた〟が二つ重なった。ひとつはさる二十五日、ことしはじめての赤ちゃんが誕生。もうひとつは、長い間〝独身〟を通してきたタロ君（十二歳）が野生の〝才媛（さいえん）〟と結婚にゴールインした。

二十五日生まれた赤ちゃんは同公園内のライ（オス）とチャオ夫婦の愛の結晶。同公園の管理人高橋良治さん（三四）は、かねてから抱卵を知っていたので注意していたが、この日の朝給じにいってみて、からを破って生まれたばかりの赤ちゃんをみつけ、さっそく手製の保育器に移して育てている。

昨年春は同公園で、七羽のヒナをふ化したが、設備の不十分からみんな幼い命に終わってしまった。こんなことがあってから、高橋さんは昨年秋、上野動物園へたまごのふ化、ヒナの保育、エサの与え方など管理の勉強をしたり、市でも今年度は百五十万円かけて、ふ化、育すう設備を整えることになった。工事は五月上旬から取りかかるが、高橋さんは「設備が完成するまで何とか、このヒナを立派に育てたい」と、夜も昼も寝ずに飼育している。

もうひとつの話題、タロ君の結婚はさる十八日行なわれた。タロ君は長いやもめ暮らし。ツルの世界でも、独身者は片身が狭いらしく、タロ君はいつも公園に張りめぐらした金網のすみにしょんぼりとたたずみ、ライとチャオ、ジロとマロの二夫婦をうらやましそうにながめていた。ところが二、三年前から、野生のツル嬢（八歳ぐらいと推定）がタロ君に思いを寄せるようになり、高橋さんは「タロの結婚も近いでしょう」と期待していた。しかし、昨年秋からツル嬢の訪問がぱったり途絶えた。愛情が実らなかったらしい。再びとり残されたタロ君に、ことしになってから、また別の野生のツル嬢が訪れはじめた。高橋さんの観察では三歳ぐらいという。タロ君も若いお嬢さんには友情以上のものを感じたらしく、二か月あまりの婚前交際が終わってさる十八日めでたく結ばれた。タロ君夫婦は毎日連れ添っては園内を散歩している。

元気で保育器の中を飛び回るツルの赤ちゃん

タンチョウの繁殖盛ん
―人目につく所でも営巣

湿原の女王〝タンチョウ〟は、いま人を寄せつけない釧路湿原のヨシのかげで営巣にはいっているが、ことしは人目につくところでも営巣しているのが確認され、ツルの繁殖がここ数年、予想以上によくなっている証拠と関係者を喜ばせている。

タンチョウは国の特別天然記念物。また営巣地となっている釧路湿原のうち、道道鶴居―弟子屈線と道道釧路―標茶線の間に横たわる地域中五千三十九㌶も昨年天然記念物に指定され保護を受けている。ツルの飛来地の阿寒町、鶴居村の住民の暖かい保護もあって、タンチョウは年々増殖、営巣地域も広範囲となってきていたが、人目につくまでにはなっていなかった。

ところが十五日、釧路教育局が道道鶴居―弟子屈線沿いに保護指定営巣地付近を調査したところ、鶴居村温根内から釧路寄り一㌔地点の湿原奥約一㌔、幌呂川岸近くで営巣中のつがいのタンチョウを発見した。さらに道立さけ・ますふ化場から約五百㍍釧路市街寄りの道道と新釧路川堤防の間の湿地で、エサをついばむ成鳥一羽を発見。胸毛が黒ずんでいるところから抱卵を始めていることがわかった。この一羽ツルは、やはり幌呂川近くに営巣しているものと推定される。

タンチョウの営巣はそれぞれテリトリー（領域）を持ち、その範囲は地形により異なるが、湿原平地部では直径四㌔に及ぶといわれ、三万㌶の広い湿原のなかでも営巣条件が整った場所というと制限がある。このため人目につく所でも適地であれば営巣するようになったと考えられ、それだけツルが増殖していると釧路教育局ではみている。

新釧路川堤防近くの湿原でエサをついばむタンチョウ

昭和四十四年度

4・16 **教科書に「ツル日記」掲載される**
NHK札幌中央放送局、タンチョウ記録映画撮影（〜五月十九日）
塘路湖及び達古武近辺

9・28 釧路教育局、三年間の営巣調査結果を発表

10・6 タンチョウの電線事故対策、北電と協議

11・14 野性生物保護基金より愛護会に分配金

11・26 丹頂鶴音頭、ソノシート発注

12・5 タンチョウ生息状況一斉調査
二一二羽確認

20 釧路の陸上自衛隊一曽会（会長、**川向源太郎氏**、会員二十七名）、阿寒中学校ツルクラブに図書券贈呈
（阿寒町一三九羽）

23 町給餌人懇談会

1・31 愛護会タンチョウ愛護ポスター版画の作品募集小中学生に

2・1 タンチョウ鶴撮影会

2・16 タンチョウ給餌人懇談会

中学校で使用する教育出版社版、国語教科書に阿寒中学校ツルクラブ「ツル日記」の一部登載される。

――タンチョウ営巣状況調査結果――

一、定住地と断定できる営巣、生息地

釧路市
大楽毛の白糠境界線、北斗長沼、山花三か月沼

釧路村
釧路湿原の市寄り、達古武沼

鶴居村
オンネナイ川付近、久著呂川、雪裡川の合流点、雪裡川上流、宮島周辺、キラコタン付近、ツルハシナイ川下久著呂渡辺川、コッタロ川、ヌマオロ川上流

標茶町
糖路湖中島、二本松橋、糖路湖阿歴内寄り、茅沼、下チャンベツ

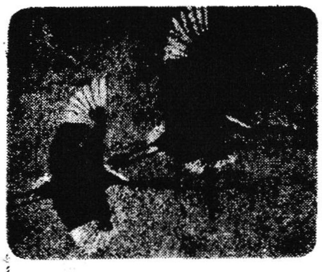
阿寒町　仁々志別川

厚岸町　糸魚沢、東梅川

浜中町　琵琶瀬湿原、藻散布沼

二、今後の調査方法

湿原内からの調査不可能のため山づたいに実施したが、正確なデータを得るため空中からの調査を計画する。



保護、育成の手伸びる

タンチョウヅル

【八王子】　日本の鳥の中でタンチョウヅルほど人気のあるものはない。世界の動物園から「日本の天然記念物タンチョウをぜひ」という希望が寄せられている。それもそのはず、全世界の動物園を合わせても、わずか二十動物園に三、四十羽しかいない。わが国でも多摩動物公園（東京都日野市）と上野動物園に七羽いるだけ。唯一の繁殖地・釧路原野には約二百羽が保護されているが、いっこうに数はふえず、滅びゆくこの名鳥の保護、育成は国際鳥類学界の悲願でもある。そこで、多摩動物公園では、保護体制強化の一環として、タンチョウの国際登録センターの指定を受けることを決め、近く国際自然保護会議（本部・スイス）に申請する。

【写真は日本の名鳥・タンチョウ】

国際登録センター指定
悲願こめ、近く申請
多摩動物公園が名乗り

登録センターの役割は、全世界の動物園、研究所などで飼われているタンチョウの血統書を作成、保存し、国際自然保護会議に報告すること。血統書には名前、性別、父母、誕生年月日、性質、特色などを詳しく書く。人間そこのけの"戸籍"である。年に一回、同会議発行のカードを全世界に発送、報告させる。

この血統書登録のシステムはオランウータン、シロオリックス（カモシカの一種）チンパンジーなど年々減っていく珍獣にも採用され、保護、育成の貴重な資料になっている。たとえばオランウータンは、アメリカ・ジョージア州のヤーキース研究所、シロオリックスはカリフォルニア州のサンジエゴ動物園がセンターになり、世界中にいるその動物の消息をつかんでいる。国際鳥類学界でも、タンチョウの登録センターをスタートさせよとの声が強く、多摩が名乗りをあげたわけ。

ところで、タンチョウはわが国で昔から神聖視されてきた。各地にいたが、徳川時代には将軍だけがとることを許され、それも正月に宮中に献上する場合に限ったという。そのころは江戸にも飛来した。だが、明治時代禁令がとかれると、乱獲されてたちまち絶滅寸前になった。大正八年、釧路原野に約二百羽が群生しているのが発見され、保護を受けるようになった。

もともと繁殖率が低く、年一回二個の卵しか生まない。そのうち育つのはせいぜい一羽。さらに乱獲と都市化がたたって"滅びゆくタンチョウ"のレッテルをはられた。ロンドン動物園発行の権威のある動物年鑑には「日本に二百羽。シベリアの湖にも三、四百羽いるらしい」とある。実質的には日本が唯一の供給地。「赤いベレーをかぶった美しいタンチョウを」と世界各地から声がかかる。

もちろん国際登録が保護、育成のすべてではない。いま多摩動物公園では、同種のアネハヅル、オオヅルの人工繁殖を研究している。成功すればタンチョウも手がけるという。

多摩動物公園朝倉繁春飼育課長の話　「北海道にも酪農開発の手が伸びればこのタンチョウもあぶない。そうすればほんとうに世界から滅びてしまう。急いで対策をたてる必要がある。ベルリン、シカゴ、サンジエゴの動物園にもいるが、一、二羽と聞く。うちで人工繁殖に成功したら登録カードをもとに各地の園を指導する。赤いベレーのタンチョウは、日本の象徴として世界で人気があるのですからね」

昭和四十五年度

4・11　阿寒中学校、吉川英治賞受賞

5・1　タンチョウ営巣調査
ヘリコプターによる初調査
下雪裡小学校、NHK「日本の自然」で紹介される。

5・　タンチョウ営巣遅れる
遅い融雪、湿原水びたし

31　釧路タンチョウ人工飼育センターで人工ふ化に成功、五月三十一日、六月二日、六月七日各一個ふ化

6・15　タンチョウヒナ鶴居村道路上で保護、鶴公園で飼育

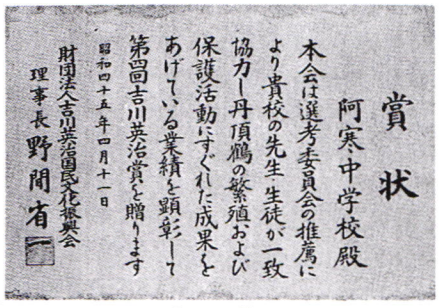
8・　釧路タンチョウ人工飼育センターの保護柵拡張工事開始

8・　阿寒中ツルクラブ、HBC放送「ツルと共に」に出演

9・8　人工ふ化タンチョウ百日を迎える

12・3　阿寒でクロ鶴発見
（タンチョウに渡り鳥説？）

5　タンチョウ生息状況一斉調査
一七九羽確認、弟子屈町を除く九市町村協力小中学生二五二四人


賞状

賞

吉川英治賞は、わが国の国民文学作家として親しまれた吉川英治氏の偉業を記念して設けられた賞で、日本文化の向上に尽くし、たたえられるべき業績をあげながらも報いられることの少ない人や団体に贈られる。

阿寒中学校ツルクラブは、代々の教師と生徒が一致協力してタンチョウの保護活動を続け、教育面に良い結果をもたらしたことが認められ受賞された。

学校長の謝辞

昭和四十六年度

10・22 タンチョウ電線事故現地調査
道教委**山田文明文化財専門員**、阿寒町鶴居村等現地視察

11・15 北海道電力道東支店、送電線にタンチョウ用標識装着

20 阿寒ツル観察休憩所完成

12・4 タンチョウ生息状況一斉調査
一四七羽確認
協力学校数四十八小中学校
二七九五人

10 鶴居村にクロヅル飛来

3・4 **山﨑定次郎氏**、釧路管内教育功績者として表彰される。

"カメラ公害"から保護
阿寒 ツル観察休憩所完成

タンチョウを"カメラ公害から守ろう"—とツルの里・阿寒町に「タンチョウヅル観察休憩所」がお目見えした。同町上阿寒の農業、山崎定次郎さん(六〇)宅裏のツル餌来地に、このほど町教委が建てたもので、これでツルは押し寄せるカメラマンや見物人におびえることもなく、訪れた人たちも寒さにふるえずに、ゆっくり観察出来る。

ことしは九月中旬からタンチョウは人里に姿を見せはじめ、四日行なわれた生息調査では山崎さんの給じ(餌)場では三十六羽が確認されている。山崎さんはもう何十年もツルにエサを与えているだけに、冬の間は、ここに数多くツルが集まってくる。そのため、ツルの見物客が毎日のように訪れ、ときにはツルより見物人の方が多いことがあるほど。最近は見るだけではなく、"優雅な姿態をカメラに"というプロやアマのカメラマンが道内はもちろん、本州各地から来ており、一、二月になると一日に二、三十人がカメラを構える。そのため、ツルは恐れて人里近くに寄ってこなくなることも考えられる。山崎さんは昨年まで、カメラマンのためにヨシズ張りのサクを造って「ここからはいらないで」と設置して来たが、これからはそんな心配もなくなった。

観察所はプレハブ建て十平方㍍の小さな建て物で、工費は十五万円。撮影が出来るように前面はガラス張りで、ストーブも備えられている。

147羽の生息を確認
タンチョウヅル 昨年より32羽減少

釧路教育局は七日、先ごろ道東でいっせいに行なったタンチョウヅル(特別天然記念物)の生息、分布状況調査の結果をまとめた。それによると、釧路、根室、十勝、網走の四支庁管内で合わせて百四十七羽が確認された。この数字は昨年に比べ三十二羽も少なく、三十八年の水準まで落ちこんでいる。

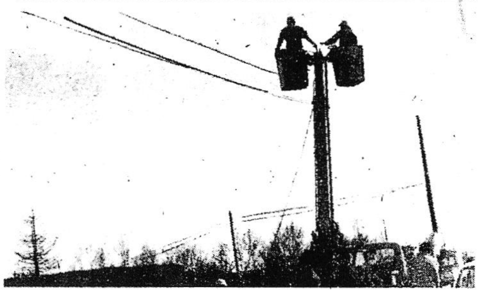
ことしは電線に引っかかって墜落死する幼鳥が続出し、調査前から減るのではないかとあやぶまれていた。しかし、同教育局もこれほどとは思っていなかっただけに、大きなショックを受けている。

ことしの特徴は網走支庁管内で初めて二羽の成鳥が確認されるなど、各管内に散らばっていたことだ。道東地方はまだ寒波の襲来を受けておらず、エサが比較的豊富にある釧路地方に移って来なくてもよかったのが原因らしい。

同教育局は、今後急減した原因についてくわしい調査をすることを決めている。

タンチョウ君標識見てネ

タンチョウの安全を守ろうと、電線衝突事故防止のため送電線の一部にツルの"交通標識"をつけた北電道東支店は、さらに方法などを検討、危険個所の全部に標識をつける方針だ。これが実現すれば、ツルたちも安心して道東の空を飛べる。



北電ではこうして危険地帯に電線標識をつける予定

黒と黄色は危険
送電線54ヵ所に付ける

ツルの交通標識は、ことしにはいってから、電線衝突、感電事故にあったツルが、すでに十二羽に達し、保護のうえからも、ゆるがせに出来ない問題になってきた。このため釧路教育局が北電に協力を求め、十一月十五、六の両日、ツルの多い鶴居村二ヵ所、阿寒町一ヵ所の送電線に直径四・五センチ、長さ一・五㍍の黒と黄のだんだら模様の管をつけた。

これが効果をあげたものか、その後は取付け個所での事故はなく、北電は自然保護、動物愛護のうえから、できる限り教育局の要望にこたえていくことを決めた。とりあえず、これまで死亡事故のあった危険場所五十二ヵ所に設置する予定で、準備を進めている。しかし、それには解決しなければならぬ問題も多い。

というのは①ツルがどの程度の色彩識別能力があるのか②技術的な問題として、標識をつけた場合、送電にどのような影響があるのかなどが、まだ解明されていないためで、同支店も、これらの解決策が見出せれば、出来る場所から実施する方針。教育局もこれに合わせ危険エサ場の一部変更を考えており、こうした対策が並行して進められれば、ツルの事故もグンと減りそうだ。

昭和四十七年度

- 4・26 「特別天然記念物タンチョウ特別調査」（四十九年度までの三ヶ年事業）（翌年三月十五日）営巣状況調査、生息状況調査 生息環境調査（昆虫、植物、鳥獣、魚類）
- 7・12 タンチョウアメリカ貸出について地元意見具申
- 26 **アーチボルト氏**タンチョウ保護について講演
- 10・ 送電線にポリエチレン標識管披覇（北海道電力道東支店）
- 12・5 タンチョウ生息状況一斉調査 二二二羽確認 余市町村で実施
- 1・6 下雪裡小学校、四十七枚 三七〇〇人協力 NHKテレビ「タンチョウを守る子供達」で全国に生中継で紹介される。
- 17 タンチョウ骨格標本展示許可（帯広畜産大学）
- 21 外務省海外広報映画「鶴と少年」ロケ開始
- 2・26 野生動植物規制国際会議小委員会、タンチョウを規制の対象とする。
- 3・16 給餌場周辺での鉄砲乱射行為多発 釧路教育局長、関係機関に自粛について要請する。

タンチョウヅル 最高の222羽を確認
生息地 徐々に広がる傾向

【釧路】道教委が五日に行なった特別天然記念物「タンチョウヅル」の生息調査結果が、八日まとまった。タンチョウの生息地釧路湿原が開発の波に押されて自然が徐々に破壊されつつあり、一部学者たちの間から「タンチョウ絶滅説」も出ているが、今年は二百二十二羽と、かつてない数のタンチョウが確認された。

調査結果が注目されていた。

調査結果は、釧路管内百九十二羽（昨年百二十三羽）根室管内二十二羽（同十八羽）十勝管内六羽（同四羽）網走管内二羽（同二羽）の合わせて二百二十二羽で、昨年に比べ七十五羽も増え、これまでの最高の数が確認された。また、昨年までツルがいなかった釧路管内標茶町沼幌地区で三羽、同浜中町姉別原野で二羽が確認されたほか、道教委が文化庁と共同で行なった十一月十九日の調査時には、同管内弟子屈町美留和地区、南弟子屈地区、標茶町の農高裏、標茶駅裏などでツルが発見され、ツルの生息地区が徐々に広がる傾向をみせている。

かつてない数のツルが確認されたことについて、釧路教育局は「人工給じや北電に依頼してツルが電線に衝突、死亡する事故を防ぐなどの保護増殖対策を進めてきた成果」といっており、来年度から人工給じ費の増額、電線事故対策などを進め、タンチョウの保護を強力に進めることにしている。また、一月から三月にかけて成鳥、幼鳥別の生息調査や〝つがい〟の生息調査も実施することにしている。

今回の調査結果について道教委の山田文化財専門委員は「確認数は過去の最高となったが、これはタンチョウが増えているのではなく、昨年の確認数が少なかったのだと思う。調査は天候、時間、ツルのその日の行動によって左右されるので、昨年はあまり見えなかったが、今年調べたらやっぱりいたということだと考えられる。だから湿原にかくれているのを入れると、今年の調査結果以上に生息しているだろう。ただ、今年に次ぐ四十四年の確認数二百十二羽と比べてみると根室、十勝、網走方面に広がっていることがわかり、これは、ツルが人間に慣れて安心して湿原から出てくる傾向であることを示している」と説明している。

タンチョウは道教委が調査を始めた二十七年にはわずか三十三羽しか確認されなかった。その後、保護しよう！と、民間人に依頼して人工給じ（餌）を始めたことなどから年々数が増え、四十四年には二百十二羽が確認されたが、四十五年には百七十九羽に減った。昨年は百四十七羽しか確認されず、生息地の釧路湿原開発が進んでいるため地元の学者や今年二月、来日したアメリカのツル博士ジョージ・W・アーチボルト氏（[illegible]）らが「このまま釧路湿原の開発が進めば、タンチョウは絶滅する」といった意見が出ており、

ひん死のタンチョウ 愛の看護で命拾い
ことしの事故すでに13件

特別天然記念物タンチョウの事故死が相ついでおり、交通事故でけがをしたツルがドライバー、給じ人、鶴公園へと次々にリレーされ、みんなの温かい手で生命の灯をともし続けている。

先月三十日午後八時ごろ、阿寒町の国道240号線で飛んでいた二羽のタンチョウのうち一羽が低空飛行のため、通行中のトラックに衝突した。「何だろう」と驚いた運転手が調べたところ、タンチョウで内出血がひどく、かなりの重傷。「このまま放置したら死んでしまう」と近くの給じ人、山崎定次郎さん宅に運び込んだ。エサを与えることになれている山崎さんもけがの手当てはできず、丹頂鶴自然公園の高橋管理人へとリレーした。

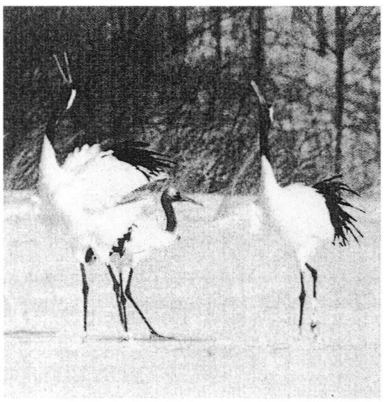
「ひどいけがをしている」と高橋さんは湿布など応急手当てに懸命、連絡を受けた市の動物園担当、渡辺さんもかけつけ手当てした。渡辺さんは獣医学を専攻し、東京・多摩動物園ではタンチョウを治療したこともあるベテラン。敏速な愛のリレーと高橋さんの応急処置でその後も手厚い治療を行ない、一番危険な〝事故三日目〟も無事、乗切った。

これまでけがをして元気を取[illegible]したケースは一、二件しかなく高橋さんは「何とかして元気に[illegible]ってほしい」と手当てに励んで[illegible]る。年々、開発の〝犠牲〟にな[illegible]ているタンチョウの生命を守るため、すぐ保護して届けたドライ[illegible]ーをはじめ関係者の努力は心温まる話。今年になってタンチョウの事故死は二日、阿寒川で発見さ[illegible]たのをはじめすでに十三件。[illegible]ているタンチョウを見つけたら[illegible]ぐ関係者に連絡してほしいと[illegible]かけている。●

昭和四十八年度

5・18	人工ふ化で五羽のタンチョウ誕生
29	**タンチョウ営巣状況特別調査**（ヘリコプター使用（〜六月四日）
6・2	環境庁、釧路でタンチョウ保護調査会議
6・	「タンチョウと釧路湿原」リーフレット作製配布（釧路教育局・保護会）
11・2	下雪裡小学校、自然保護活動優秀団体として道知事賞、道教育長賞を受ける
6	阿寒町**加地良次氏**、北海道文化財保護功労者表彰をうける
28	タンチョウ農作物被害調査
12・5	タンチョウ生息状況一斉調査　二三三羽確認
1・24	タンチョウ生息状況調査
29	タンチョウ保護増殖センター着工
3・30	タンチョウ特別調査員会議

加地　良次 氏
北海道文化財保護
功労者表彰をうける



私の長寿は鶴のおかげ

阿寒町
給餌人
加地良次

鶴は我ら阿寒町民初め生息地の人々の愛護精神により増殖しましたが、ヨシズ原野でなければ子育てできない。湿原ヨシズ地に集まる故我等の畑に姿を見ることがなくなり、給餌もできなくなることを思う時、この大自然の美が見られなくなるのを寂しく思う。昭和四十八年頃のように水田地に行くと必ず鶴が見える観光地でありました。中間に小川が流れ、ヨシズの生えた沢と凹地。水田の中に鯉を育てるための池。田植の六月の初め、夫婦鶴は大空を飛ぶ。その姿は今もなお心に残る私の長寿も鶴のおかげと鶴を敬し慕うものである。

タンチョウの人工ふ化
5番目　元気よく
<<<釧路のツル公園>>>

【釧路】ツルの公園として全国にも知られる「丹頂鶴自然公園」（釧路市鶴丘）で、十八日、人工ふ化のタンチョウのヒナ一羽が誕生した。同公園では、四十五年に世界で初めて人工ふ化に成功したが、人工ふ化で誕生したツルは今度で五羽目。

同公園には、現在十八羽のタンチョウが飼育されており、今度誕生したのは「ジロ」と「マロ」の間に生まれた卵。四月十五日に卵二個が生まれたが、当時、飼育フィールド内が雪解けで増水気味だったため、親鳥が卵を抱くのは無理との判断から、人工保護センター内のふ卵器に入れてふ化させることにした。

その後、三十一日たった十八日朝、二個のうち一個の殻が破れ、中から元気なヒナがかえった。背丈約十五㌢で、全身が薄い茶かっ色の羽毛に覆われている。すでにドジョウなどのエサを食べ、順調に成育を続けており「丈夫に育ってくれればいいが…」と関係者は成長を期待している。

人工ふ化で誕生したタンチョウの赤ちゃん

道新48・5・20（朝）

昭和四十九年度

5・17 山火事で厚岸、標茶の営巣地二ヶ所消失
6・2 文化庁企画テレビ番組「美をもとめて」でタンチョウ放映される。
10 財団法人日本自然保護協会から、給餌に対するアンケートくる。
タンチョウ踊り指導者講習会
7・13 タンチョウ特別調査（～十七日）
8・15 タンチョウパレード（参加四〇〇名）
10・30 鶴居村下雪裡小学校廃校となる。
下雪裡小学校閉校記念全校文集「鶴っ子」発行
11・9 **両陛下主催園遊会に阿寒町山崎定次郎氏招待される。**
タンチョウ保護増殖事業、増殖センター完成後、環境庁へ移管について文化庁と合意
12・5 タンチョウ生息状況一斉調査
二五三羽確認
八市町村六十六小中学校 一九〇九人参加
1・21 岡山県からタンチョウの繁殖依頼くる。
24 タンチョウ特別調査で二六二羽生息確認
2・13 タンチョウの記念切手（二十円）全国に四千万枚発売
3・1 **林田恒夫氏**、釧路管内教育実践奨励賞受ける。
8 全国子供の自然と小鳥と鶴会議、阿寒町で開催される。

S41～49年
タンチョウ一斉調査
阿寒町内の確認数

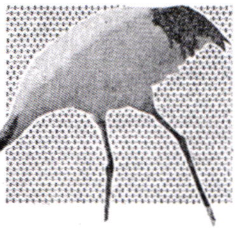
年度	全　体	阿寒町
41	170羽	87羽
42	200羽	111羽
43	171羽	89羽
44	212羽	139羽
45	179羽	89羽
46	147羽	56羽
47	222羽	87羽
48	233羽	87羽
49	253羽	79羽

おイタが過ぎるヨ

農作物食い放題

農家「馬のエサどうしよう」

阿寒



タンチョウのためすっかり食い荒らされたトウモロコシ畑

【阿寒】特別天然記念物「タンチョウ」が今年も釧路管内阿寒町や鶴居村などに大群で姿を見せ、優雅な舞いを見せているが、数が増すにつれて農作物の被害が目立っている。このため「ツルのことなので少々のことはがまんするが、あまりひどくなるとどうも…」と農家の人は渋い表情。地元ではタンチョウ保護の機運が高まっている時だけに「国でもなんらかの対策を」―という声も出ている。

今年、タンチョウの飛来は例年に比べて早いが、最も多く姿を見せている阿寒町内では三十戸ほどの農家で「トウモロコシやデントコーンを食べられた」「一カ所に集めて乾燥していた小豆が食い散らされた」などの被害をうけている。

ョウが食べたのだから」と目をつぶっている。

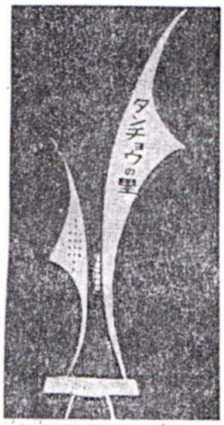
しかし、阿寒町上舌辛一九線の高橋正司さん(四〇)宅の被害はひどい。約十アールのトウモロコシを刈って積んで置いたところ、ほとんどが食べられてしまった。また隣接して植えていたデントコーンも被害に遭っている。例年、被害があるため、今年も飛来前に取り入れる予定だったが、奥さんが体の具合を悪くし、取り入れが遅れたためだ。

高橋さん宅には馬が二頭おり、この飼料にトウモロコシやデントコーンを作ったもので「これからどうしよう」と荒らされた畑をながめながら困り切っている。

タンチョウは保護が行き届き、年々増えて今年五月の調査では百九十二羽確認されている。しかし、増加するにつれて農作物の被害が目立っているのが現状。このため地元では「この辺で国が広大なトウモロコシ畑を作るとか、被害農家に補償するなど、抜本的な対策を立てるべきだ」と訴えている。

タンチョウの保護塔

阿寒 近く国道沿いに建てる



タンチョウ保護塔の予想図

昭和49年11月16日

昭和五十年度

4・16	丹頂鶴自然公園で二羽人工ふ化
4・	特別天然記念物タンチョウ特別調査報告書刊行（道教委）
26	岡山タンチョウ総合打ち合わせ会
5・29	タンチョウ営巣地現況調査 航空機四機による空中調査
6・	北海道電力、丹頂鶴の電線衝突事故防止対策をたてる。
8・14	タンチョウパレード
9・9	タンチョウによる農作物被害出る
30	「野性のエルザ」**ジョイ・アダムソン女史**、鶴公園訪問
11・	阿寒町、無法カメラマンへの注意看板設置
12・6	タンチョウ生息状況一斉調査 一九四羽確認、全市町村で実施 六十五小中学校　二〇一四人協力
1・24	タンチョウ生息状況調査
3・6	第二回全国子供の自然と小鳥と鶴会議、阿寒町で開催
6	石狩町にタンチョウ一羽飛来
20	無法カメラマン対策会議開催（阿寒町）
22	農作物被害状況調査
31	釧路叢書「タンチョウの釧路」刊行

・――ベビーブームの春――
今春第一号のタンチョウのヒナ二羽が人工ふ化で誕生。四十三年に人工ふ化に成功して以来、これで十二羽目の誕生となる。

・岡山タンチョウと釧路のタンチョウ番形成準備

・豪雨による釧路湿原異常冠水のため、営巣状況を調査、一四五羽生息、抱卵中十八個所

・調印者―**釧路市長山口哲夫**、**岡山県知事長野士郎**、立会人―**北海道教育委員会教育長**、**気境公男**

・昭和四十六年度以来整備個数　三十個所

・釧路市農業協同組合長より被害届

・給餌場を中心に飛来数調査を行い二三四羽確認

・石狩川沿いに亜成鳥一羽飛来

・道教委**山本慎一文化課長補佐**、**土田文化財係長**来釧し、被害者と協議

〝エルザのおばさん〟が釧路へ

タンチョウと初対面

「本で見たことはあるが実物は初めて」と、タンチョウに見入るアダムソンさん

【釧路】「野生のエルザ」などの著書で知られる動物作家のジョイ・アダムソンさん(六五)が三十日、空路釧路入りした。日本の動物作家、ムツゴロウこと畑正憲さんの〝動物王国〟（釧路管内浜中町嶮暮帰）を訪問するため来釧したもので、この日は日本でただ一カ所特別天然記念物・タンチョウを飼育する同市鶴丘の丹頂鶴自然公園を訪れ、初めてタンチョウと対面した。

アダムソンさんは、日本の野生動物と自然保護の状況を観察し、[illegible]野生動物保護を目的とした「エルザ野生動物基金」の協力要請のため二十四日に来日、京都、奈良などを見学し、畑さんの動物王国を視察するため釧路を訪れた。

同日午後、釧路空港に到着したアダムソンさんは、宿泊先に向かう前に市内にある丹頂鶴自然公園へ早速出掛けた。釧路入りする前からタンチョウを見るのを楽しみにしていただけに、真っ赤なベレー帽をかぶったようなタンチョウの美しい姿に大喜び。同園の高橋良治管理人の案内で見て回ったが、さすがに野生動物保護に力を入れている人。「雄、雌の区別はどうして見分けるのか」「人工ふ化はどのような場合に行うのか」「野生のタンチョウは何羽ぐらい生息しているか」など見学予定時間をオーバーするほどの熱心さ。東アフリカのケニアで留守番をしている夫のジョージさんへの土産品にするのか優雅な〝ツルの舞〟をさかんにカメラに納めていた。

アダムソンさんは同日釧路に一泊、一日には国内で六十六番目にオープンする釧路市動物園で開園のテープカットをしたあと、釧路から車で約二時間離れた畑さんの動物王国を訪問。二日間滞在して畑さんと動物保護談議に花を咲かせたり、馬のどさんこやエゾシカなど動物王国の〝住人〟と遊ぶ。

昭和五十一年度

6・20 愛護会、寝ぐら巡回等の保護対策をたてる

9・3 阿寒町タンチョウ観察センター建設計画できる

10・ 愛護会、町内のタンチョウ飛来地区十五ヶ所に注意板設置

11・25 文化庁**横沢記念物課長**に保護対策陳情する

11・26 タンチョウ保護活動用腕章十本・帽子四十個・小旗十本作成

12・6 生息一斉調査　二二〇羽確認

12・23 阿寒中学校ツル委員会に活動費助成

2・2 異常寒波でタンチョウの寝ぐらである阿寒川の川面が結氷。寝ぐら確保のため大型ブルドーザで氷割作業実施

カメラ公害に泣くタンチョウ

監視の目も届かず

阿寒タンチョウ鶴愛護会 住民と保護活動に

【阿寒】特別天然記念物、タンチョウの保護にあたっている阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）は、今年から上阿寒部落会の協力を得て、活動を進めていく。阿寒町のタンチョウ生息地には毎年、本州などからアマチュアカメラマンが殺到し、年々エキサイト、なかには寝ぐらに押し寄せてシャッターチャンスを狙うというマナーの悪いカメラマンも多い。町やタンチョウ鶴愛護会では自粛を呼びかけているがいっこうにおさまる様子もなく、逆に入り込む人が増え対策に頭を痛めている。このため同愛護会では、部落会の協力も得ながら保護にあたっていこうというもの。

タンチョウの里、阿寒町には十一月ごろから雄姿を披露してくれるタンチョウが飛来してくるが、もっとも頭を痛めるのが保護対策。冬季の四日観光が、しだいに本州にも浸透してきており、またタンチョウのパンフレットが行き渡るとともに、アマチュアカメラマンの入り込みが増え、いわゆる"カメラ公害"による問題も多い。

このため今年設立十年目を迎えたタンチョウ鶴愛護会では上阿寒部落会の人たちの協力を得ながら保護活動を進めていこうと、かねてから話し合いが続けられてきた。町内には、道の監視員が一人いるだけだが多いときには二百～三百人のカメラマンが入り込み、シャッターチャンスを狙うという"ブッシュ"ぶりには監視もほとんど行き届かない実情だ。

そこで愛護活動の面で大きな役割を果たしているのが愛護会。しかし、会員二十人だけでは十分な愛護活動ができないところからもっともタンチョウの飛来が多いといわれる上阿寒地区二十三戸の住民に協力を求めていこうと計画したものだ。なかでも阿寒川沿いの約五〇㍍の区間は、タンチョウの寝ぐらにもなっており、住民に監視をしてもらうことによって少しでもカメラ公害からタンチョウを守ろうというもの。

二年ほど前からは、禁止区域に入り込んで写真撮影をするというマナーの悪いカメラマンもおり、こうしたエキサイトぶりを少しでもチェックしようと、愛護会でも具体的な活動方針を検討している。「マナーさえよければこうした心配もないのだが…」と関係者も頭を痛めている。

阿寒 いたずらからタンチョウを守る

保護監視員増やして

【阿寒】"決定的瞬間"を撮ろうと、タンチョウに石や雪玉を投げつけたり、ねぐらまで騒ぎ無謀なカメラマンは依然、後を絶たない。このため、阿寒町上阿寒地区の住民などで組織する「タンチョウ鶴愛護会」（吉田勝美会長、会員二十人）の会員の間に「愛護会の活動だけではタンチョウは守り切れない。道教委が委嘱する保護監視員の数を増やし、パトロールの強化を！」という声が高まっている。

同町上阿寒地区の"タンチョウの里"や上吉平地区などには、毎年九月ごろから翌年四月ごろまで約百羽ほどのタンチョウが"里帰り"。給餌（じ）人のまくトウキビを食べながら、優雅な舞いを披露している。

こうした姿をカメラに納めようと、タンチョウの里などを訪れるアマチュアカメラマンなどは年々増えている。しかし、カメラマンが増えるにつれて、朝まだ暗いうちからタンチョウがねぐらにしている阿寒川に入り込んだり、飛び立つ姿を撮るため、石や雪玉をぶつけたりの悪事も目立って来た。

愛護会は、こうした心ないカメラマンを一掃しようと、寝ぐら近くの地主などの許可を得て「タンチョウの飛来地なので立ち入らないで下さい」という看板を立ててPR。さらに会員たちも、赤と白の保護監視員の帽子をかぶったり、腕章をして寝ぐらや飛来地をパトロールするなどの活動を続けているが、会員たちもそれぞれ仕事を持っており、活動時間や、人員が限られている。それに、道教委が委嘱したタンチョウ保護監視員は釧路管内にわずか七人。そのうち阿寒町には、上阿寒地区の絶じ人になっている山崎定作さんだけ一人という有しさ。

一方、今冬は厳しい冷え込みから寝ぐらの阿寒川、吉平川が結氷、寝ぐらが広範囲になっていることもあって、毎朝四時ごろからパトロールしている山崎さんは「私一人ではとてもカバーし切れない」と嘆く。愛護会の会員たちも「立ち入り禁止の看板を立っても全く無視され、効果がない」「私たちの活動では限界がある。道教委が専任の保護監視員の数を増やし、パトロールの強化を！」と訴えている。

これに対し、実際にタンチョウの管理に当たる釧路教育局は「保護監視員の数は増やしたいのだが、監視員のなり手がない」と監視員不足を認めている。なり手がいないのは、わずかな謝礼も原因で、監視員の"待遇"を大幅に改善しない限り、タンチョウ保護活動は愛護会におんぶし、会員の悩み、訴えは解消されそうもないようだ。

昭和五十二年度

4・28 阿寒タンチョウの里に有志が丹頂鶴慰霊塔を建設
金子信治　山﨑定作　鐙谷　充
山﨑定義　杉橋弘義

6・7 タンチョウ浴衣地購入斡旋

10・2 阿寒町開基九十周年・町制施行二十周年事業協賛タンチョウ踊りパレードを産業まつり実行委員会と共催で実施

11・1 **タンチョウ観察センター新築オープン**

11・10 愛護会タンチョウ保護思想啓発パンフレットの作成

12・5 生息一斉調査　二五七羽確認

28 HBC「凍てつく里に鶴が舞う」放映

12・13 ナベヅル保護状況視察（山口県熊毛町）。吉田会長他一名（～17日）

1・1 NHK年始特集「新春に舞うタンチョウ」放映

2・21 タンチョウ、養殖場の幼魚捕獲被害出る

3・4 タンチョウ写真展　（～12日）

タンチョウの里に新名所

観察センター開く

もう安心、観光客を"隔離"

S52.11.2 道新全道版

オープンしたタンチョウ観察センターと開所を祝うかのように飛来したタンチョウ

【阿寒】特別天然記念物タンチョウを居ながらにして見ることができるタンチョウ観察センターがこのほど釧路管内阿寒町上阿寒に完成、一日、テープカットなどの開所式が行われ、オープンした。タンチョウを心ない観光客なとから守るのと、飛来シーズンの冬期間、暖かい室内からでも観察できるようにーと同町が建設した施設。白壁のどっしりした造りがいかにも"タンチョウの里"にふさわしく、冬の道東観光の新名所になりそう。

同センターは、国道240号線を阿寒町市街から阿寒湖畔に向かって車で五分も行くと、すぐ右手にある。この日午前十時前、佐藤八六同町教育長らがテープカットするころには、早くも六、七羽のタンチョウが近くに舞い降り、まるでオープンを祝うようだった。

建物（総工費約五千万円）は鉄筋コンクリート二階建て延べ百九十平方メートル。一階は展望室のほか、給果から人里に来るまでのタンチョウの生態を撮った写真や標本、文献などを展示した資料室、軽食やコーヒーが飲める食堂、売店。二階はバルコニー付きの展望室。一、二階とも各部屋は、タンチョウがエサを食べに来る畑側がガラス張りになっており、コーヒーを飲みながらでも、優雅なタンチョウの舞いを"観賞"できる。

もともと、ここは阿寒地方の代表的な給じ場だったが、一部の観光客やカメラマンが、タンチョウの飛ぶ瞬間を撮ろうと石をぶつけたり、果ては大声を上げる不心得者もいたため、町は観光客をこの施設内だけに限定しようーと建設を急いだ。

オープン期間は、タンチョウがエサを求めて同センターなど人里に来る十一月から三月末まで。阿寒地方は冬場、観光客の入り込みが少ないのが悩みのタネだったが同センターは釧路空港から約十五キロと近いこともあり、関係者は冬季観光の新名所にーと意気込んでいる。期間中無休、入場料は一般二百円、高校生百五十円、小、中学生百円。

昭和52年８月10日　釧路新聞

大もてのタンチョウヅル 釧路

世界各国から欲しい

福田首相のお願いも断る

一カ所でも希望に応じたら大変　放出は見送り

釧路地方のタンチョウヅルに世界の動物園から声がかかっている。代表的なところではアメリカ・西ドイツ、イギリス、スイスなどからで、地元としては、自然保護と、これまでの経過から、放出は見送っているが、いずれにしても、国際的な注目を集めていることは事実で、国際舞台へーと乱舞しそうだ。

タンチョウヅルがわが国の特別天然記念物として指定されたのは昭和二十七年三月二十九日。現在、生息数は確認されているだけでも二百二十羽。湿原に羽ばたく美しい姿は地元市民をはじめ、観光客の目を楽しませているが、それだけに、世界各国の動物園からお声がかりの多いのはもっとも。

しかし、中には、これでもあきらめ切れず直接、釧路に出向き、懇願する人もいる。国際ツル財団のアーチ・ボルド氏で、いまから三年ほど前、ツル公園を訪れ、再三にわたってツルを求めた話は市民にも周知のことだ。

同氏は、国際的なツルの研究家で、また自ら世界中のツルを集めていることでよく知られているがこの人ですら、タンチョウヅルを手に入れることは出来ない。

こうした中で、つい最近、市教委に文化庁から「ツルを一つがい分けてほしい」という内容の電話があった。東南アジア諸国連合（ASEAN）首脳会議出席と同諸五国およびビルマ歴訪のために日本を旅立った福田首相が、訪問国の一つインドネシアへのおみやげとしたいーというもので、市教委では、さっそく文化財審議会を開き、検討したが、たとえ文化庁からのお願いといえども、これまでの前例をくつがえすことは出来ないーと判断、ていよく断った。

インドネシアへのおみやげ、先に同国からコモドドラゴン（大トカゲ）が上野動物園へ贈られてきており、この返礼をかねたもので、福田首相は、まず外務省に相談、ここから文化庁にわたり、市教委へ連絡があったという。

国際舞台でのタンチョウのお声がかりは、田中元首相がオーストラリアを訪問する際にも一度ありこれで二回目。わが国を代表する動物を贈り付けるもので、こうした国際的な取り上げられかたに市としても喜びを隠せないが、自然の保護、気候的な問題から、「放出はしない」というのが一貫した方針。

また、日本野鳥の会の上田五郎支部長は「ほしい気持ちはよく分かるが、一カ所でも希望に応じたらあとがたいへん。どこにもやるべきでない」と話している。

ツル公園の優雅なタンチョウ

昭和五十三年度

8・27	市立釧路丹頂鶴自然公園創立二十周年
10・10	タンチョウ愛護標語募集 最優秀「タンチョウを守り育てるみんなの手」 （仁々志別小学校六年坂本富美代）
11・20	タンチョウ愛護広告塔の設置
12・5	生息一斉調査　二一四羽確認
1・30	タンチョウの絵はがき第一シリーズ販売
3・22	愛護会主催タンチョウ写真コンテスト入賞作品展　（〜4・10）
3・	布伏内小学校で卒業記念に「丹頂鶴物語」編集

卒業記念で編集 「丹頂鶴物語」

学校

生態などを克明に観察をもとにまとめ上げる

◎画・布伏内小五・六年生、作・川森年雄教頭◎

子供のタンチョウが巣立っていくまでの過程を一冊の物語にまとめた先生がいる。「丹頂鶴物語」の題名が付いているこの作品の原作者は丹頂の里で知られる阿寒町布伏内小学校からこの春、釧路村別保小学校に転任してきたばかりの川森年雄教頭(写真)。布伏内小学校の校庭には毎年、冬になると数羽のタンチョウが舞い降りてくる。中には親子連れの姿も。作品はこうした日ごろの観察の中から生まれたもの。

完成した丹頂鶴物語

前任地の布伏内小学校は児童が五十人たらず。この春、六十九回目の卒業生を送り出しているが、作品はこの卒業記念に、と編集されたもの。原作は川森教頭。画が布伏内小学校五、六年生ということでカットの版画を担当しており、普通画用紙三十枚にまとめられている。

布伏内の小学校には毎年、冬になると数羽のタンチョウが舞い降りてくるーと川森教頭

ストーリーは両親の温かい愛情にはぐくまれ、スクスクと育っていくヒナ鳥が自然の中で生きてくことの厳しさ、また、やさしいおとなや子供たちとの出会いを中心に展開している。

タンチョウは子供が一人前になりはじめると決してそばへ寄せようとはしない。子別れの時だ。なおも寄って来ようとする子供に対しては口ばしを使って追い返そうとする。毎年、冬になると布伏内の小学校の校庭にはタンチョウが数羽、舞い降りてくるが、中には親子連れもあり、こうした光景を目のあたりにすることも多いという。物語といっても実際の話をまとめたもの。

川森教頭は上士幌町の出身。足寄高校の定時制へ通い、道教育大学釧路分校卒業後は弟子屈の札友内小、白糠小を経て、阿寒町布伏内小教頭、この春、釧路村別保小学校へ転任した。

丹頂鶴物語は二年間の観察をもとにまとめ上げたものだが、卒業の記念に、と放課後遅くまで取り組んできた児童たちの姿は、いまでも忘れられない思い出。当時の坂田校長は布伏内小学校長は「タンチョウヅルのように自然を愛し、子ヅルのように素直で強く生きていく力をつけていくように教えてくれている作品」と寄せている。

版画を担当した生徒のは次の通り。

▽表紙　山口あけみ▽版画　土田龍湖、佐藤裕二、八幡勝利、金子恵、志賀貞信、青野博之、井上学、高橋朱美、鈴木真明、沢口竜次、武田孝美、高橋直子、田口忠則、五十嵐早苗、佐藤由▽表紙題字　市橋大明先生▽扉題字　木幡一夫先生▽版画指導　荻原博信先生。

昭和五十四年度

4	釧路教育局がタンチョウ保護看板設置。釧路市、鶴居村、阿寒町に各二基
11・1	愛護会タンチョウイラスト入りはがき発行
11	タンチョウ広告看板設置（二基）
12・5	生息一斉調査　二七一羽確認
12・24	タンチョウ観察センター給餌場にマナヅル飛来
2・1	愛護会タンチョウ図柄入りネクタイピン作成販売

昭和54年11月18日(日)

そこが聞きたい

9

タンチョウ観察センターを管理する阿寒町教委職員
佐藤　照雄さん(四〇)
聞き手・柏葉　孝記者

三年目を迎えたタンチョウ観察センターですが、オープン（十六日）はかなり遅れたようですね。

例年同様、十一月一日オープンを目標に準備を進めてきましたが、今年は秋になってから暖かい日が続き、タンチョウが湿原でもエサを見つけることができるのか、センターに飛来してくる時期が遅くなり、そのため例年より半月遅いオープンになりました。

毎シーズン全国から二万人近い人たちがセンターを訪れており、団体でやって来る観光客も多く、今シーズンも昨年を上回る人出を予想しています。

センターが道東の冬の観光名所として定着しつつあると思いますが。

全国からやってくる人たちに暖かい場所で、ゆっくりとタンチョウを見てもらおうというのも、確かにセンターを建てた目的の一つではあります。その意味ではもう名所になっているでしょう。しかし建設の本来の目的は、タンチョウがだれにも邪魔されずに飛来できるよう、そして私たちがその生態を観察できるようにと、あくまでタンチョウの保護がねらいだったわけです。このことはセンター建設の話が出てから現在まで変わっていません。

タンチョウは非常に神経質な鳥。百尺近く離れた所からカメラを向けても気配を感じて逃げ出すほどです。タンチョウを見にやって来る人たちの中には、ごく一部だが大声を上げたり石を投げつけたりするほか、タンチョウのねぐらにまで入り込む人がいるのも事実。一度ねぐらを荒らされたタンチョウは、二度と同じ場所には戻りません。それほど警戒心が強いのです。

それほどが弱い動物だからこそ、人間の手による保護が必要になる訳ですね。

ただなんでも手を貸せばよいーというのではありません。冬の間、安心してエサを食べられるようにすること。そして生息地に人が入り込まないようにすること。この二つで十分保護にはなると思います。あとは人間が遠くから見守っていればよい。タンチョウと人間の間には「かき根」も必要でしょう。センターはその「かき根」の役割を果たすものです。人里に飛んできたタンチョウに、人工的に給じをするのはいわば、非常手段。できるだけ自然のままの環境の中で守っていくということを忘れてはいけないと思います。

現在、センターは半年は閉館の状態です。これを通年開館にする考えは。

センターには一階、二階の展望室のほか、タンチョウの四季の写真や標本、文献などの展示室、それに食堂、売店があります。今後センターをどのようにしていくかということについては、まだ具体的な計画はありません。ただ希望として、世界中に生息するツルの資料を集め、ツルの博物館のようなものにすることができれば通年開館も可能になると思います。

しかし、実際に飛んで来るタンチョウを見てもらうのが、タンチョウのすばらしさを知ってもらう唯一の方法。やはりタンチョウの生活サイクルに合わせてセンターを運営するのが理想的だと思います。

今後、タンチョウの保護をどのように進めて行くべきだと思いますか。

まず自然環境を守ってゆくことです。釧路湿原の開発も取りさたされていますが、開発による自然破壊は最小限にとどめなければなりません。河川改修一つにしてもタンチョウの生息に影響を及ぼします。

私たちにとってタンチョウはいわば環境のバロメーター。タンチョウが来なくなれば阿寒町の自然破壊がそれだけ進んでいることになります。これを防ぐためにも町民が一体となって対処していかなければなりません。冬の間のエサはセンターの給じ場に設けたトウモロコシ畑のほか、みなさんの善意で寄せられたものがあり、十分賄っていけます。

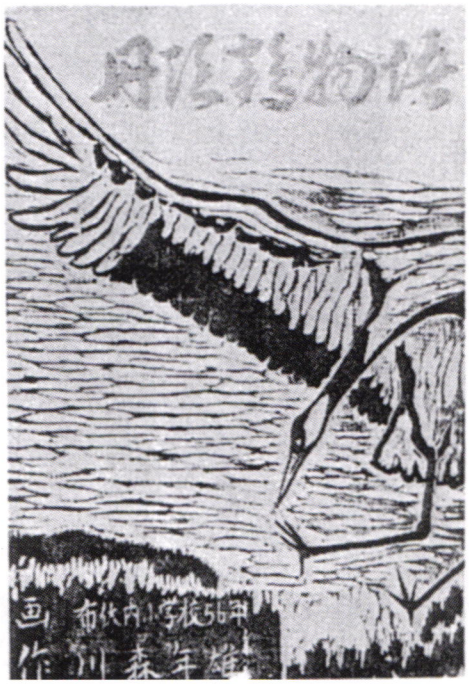
何よりもまず多くの人にタンチョウを見てもらうこと。タンチョウの保護はまずそこから始まると思います「日本にはこんなに美しい鳥がいる」と知ってもらえば、いつまでも守り続けなくては」と思うはず。少なくとも私はそう信じています。

タンチョウの保護は、まずその姿を自分の目で見ることから始まる―と語る佐藤さん

生息地での生態観察
湿原の開発は最小限に

〈プロフィル〉

三十六年、阿寒町教委職員に、四十一年から社会教育主事として、タンチョウ、マリモの二つの天然記念物の保護育成に力を注いでいる。タンチョウ観察センターの管理も兼ねており、タンチョウとのつき合いもかれこれ十八年。通信教育で大学を卒業し、タンチョウ保護をライフワークとする努力家だ。



タンチョウの近くを疾走するエゾシカ。互いに干渉はしない

昭和五十五年度

8・17 産業まつり協賛丹頂鶴音頭踊りコンテストをタンチョウ鶴愛護会の主管で実施

12・4 国際ツル財団ジョージ・アーチボルト博士と撮影スタッフ阿寒の里に来町、PBS（米国公共放送サービス）の撮影がおこなわれた。

12・5 一斉調査　二六七羽確認

12・1 阿寒町教育委員が専従のタンチョウ保護監視員一名を配置

昭和55年12月5日

タンチョウ保護、海外紹介

絶滅からの羽ばたき撮影

阿寒で米国のツル博士ら

【阿寒・鶴居】「一時は絶滅にひんしたタンチョウが、地元民の熱心な保護で生息数を増やしてきた好例として、世界に紹介します」―。国際的なツル学者として知られる国際ツル財団（本部・米国ウィスコンシン州バラブー）のジョージ・アーチボルト博士(三四)が米国人スタッフを連れて、釧路管内阿寒町の"丹頂の里"入り、四日から放送用のフィルム撮りを開始した。

「絶滅からの飛翔（しょう）」（fly from Extinction）というのが、国際ツル財団が企画、米国のPBS（公共放送サービス）が制作するこの番組のタイトルだ。カナダツル、アメリカシロツル、ソデグロツルなど七種の絶滅が心配されるツルを取り上げ、生存の状況をフィルムに収める計画だが、道東に生息するタンチョウは年々数が増えてきており"危機脱出"の好例だそう。その背景には、地元民や小中学生らの冬季間給餌（じ）の努力があり、昭和二十七年当時、わずか三十三羽しか確認されなかったタンチョウが、昨冬は二百七十羽まで増えている。

まず阿寒町内のタンチョウ観察センターに着いた一行は、アーチボルト博士とロン・マイヤー・ディレクター(三七)ら三人のPBSスタッフ、それに米国の野生動物画家夫妻、ツル財団で働く日本人女性合わせて七人。あいにく、みぞれまじりの悪天候だったが、観察センターで群れ集う三十羽以上のタンチョウの優雅な姿にレンズを向け熱心にフィルムを回していた。このあと、同管内鶴居村内の湿原を正富宏之専修大学道短大教授の案内で現地踏査した。五日朝には、道東地方全域で小、中学生や保護関係者がタンチョウ生息数調査を一斉に行うことになっており、その様子も撮影することになっている。

「初めて実物を見たが、美しい鳥だ。他のツルよりすばらしい」とPBSのスタッフ。アーチボルト博士は「番組のコピーは、タンチョウ観察センターに贈り、みなさんに見ていただく計画です」とにこやかに話していた。

タンチョウの舞を撮影する米国人スタッフ、左端がアーチボルト博士

タンチョウ二六七羽を確認

道教委は去る十二月五日、昭和五十五年度特別天然記念物タンチョウ生息状況一斉調査を実施しました。

調査結果は次表のとおりです。釧路管内では二百二十一羽（昭和五十四年度二百十八羽）、根室管内二十九羽（同二十八羽）、十勝管内十七羽（同二十五羽）と道東三支庁管内において合計二百六十七羽（同二百七十一羽）のタンチョウの生息が確認されました。

昭和二十七年の第一回調査が三十三羽、以来今回で第二十九回目の調査となりましたが、実に八倍強の増加になっています。

一度絶滅の危機に会ったタンチョウの将来に明るい希望が持てるようになって来つつありますが、未だ未だ安心は禁物です。この度の一斉調査で御協力をいただいた関係各位に、とりあえず紙上をもって心から感謝申し上げます。

―「くしろの教育」より―

55.11.14 道新

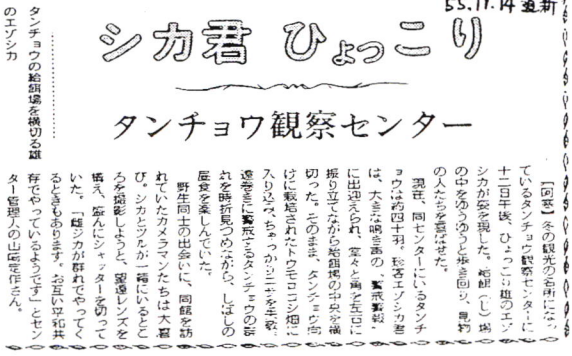
シカ君 ひょっこり

タンチョウ観察センター

【阿寒】冬の観光の名所になっているタンチョウ観察センターに十二日午後、ひょっこり雄のエゾシカが姿を現した。給餌（じ）場の中をゆうゆうと歩き回り、見物の人たちを喜ばせた。

現在、同センターにいるタンチョウは約四十羽。珍客エゾシカ君は、大きな鳴き声の"警戒警報"に出迎えられ、堂々と角を左右に振り立てながら給餌場の中央を横切った。そのまま、タンチョウ向けに載培されたトウモロコシ畑に入り込み、ちゃっかりニヤを生産。遠巻きに警戒するタンチョウの群れを時折見つめながら、しばしの昼食を楽しんでいた。

野生同士の出会いに、同館を訪れていたカメラマンたちは大喜び。シカとツルが一緒にいるところを撮影しようと、望遠レンズを構え、盛んにシャッターを切っていた。「雌ジカが群れでやってくるときもあります。お互い平和共存でやっているようです」とセンター管理人の山崎定作さん。



タンチョウの給餌場を横切る雄のエゾシカ

昭和五十六年度

7・7	新千円札にタンチョウ登場　原画に**林田恒夫氏**の写真が使用される
10・1	阿寒町のタンチョウ飛来地域、鳥獣保護区に指定される
10・8	町内幼・小・中学校にタンチョウカラー写真寄贈
12・5	一斉調査　二九五羽確認
12・21	愛護会賛助会員制度発足、会員募集
1・1	タンチョウ鶴愛護会設立十五周年に賀茂鶴酒造㈱・日本清酒㈱に感謝状贈呈
1・	阿寒町教育委員会がタンチョウ鶴愛護会と協力して三ヶ年計画でタンチョウ生態調査を実施
3・10	愛護会「鶴（たず）のしおり」万葉シリーズ作成販売

そこが聞きたい

タンチョウ愛護に賛助会員

阿寒町タンチョウ鶴愛護会長　吉田（よしだ）勝美（かつみ）さん（六二）

聞き手・本村　龍生記者

全国から支援の手

"活動に参加"が最大の特典

――町内のタンチョウ保護活動の中核として活動を続けて来た阿寒町タンチョウ鶴愛護会がこの冬から賛助会員制度を発足させ、広く全国から会員を募っていますね。最初にこの賛助会員制度の性格とそのねらいについてうかがいたいと思います。

阿寒を含めた釧路地方のシンボルとして親しまれて来た特別天然記念物のタンチョウを末永く守って行こう―というわれわれ愛護会の活動に対して、広く全国の愛鳥家に協力、支援の手を募ろうというのがこの制度の趣旨です。賛助会員から一口三千円の出資金をいただき、愛護会活動を支えてもらう一方、全国各地に住む賛助会員の方々を通してタンチョウ愛護思想の普及も図れるのではと期待しています。

まあキャッチフレーズ風にいいますと「三千円を払ってあなたもタンチョウ保護運動に参加しませんか」ということになりましょうか。

――愛護会にとっては一種のパトロンを大衆的に募る形となるわけですね。

そうですね。愛護会自体は四十年春に発足して以来、会員は町内の有識者や助役、教育長ら行政機関の代表など十五人に限定された指導機関のような性格がありました。その分、高い見識を踏まえた理想主義的な活動は保証されますが、財政や活動力などの点で一般のボランティア組織のような力はなく、活動には限界がありました。

ところが今日のようにタンチョウの生息数が三百羽を超すほど増え、全国にも広く知られ、町内には多くの観察者が訪れるようになると、保護活動の守備範囲もぐんと広がって来ます。だからといって愛護会員を不特定の一般人にまで対象を広げることは良い意味での愛護会の伝統が消えてしまう。そうした意味での会の本来の性格を守りながらより広い活動をするために、会の趣旨を理解し、これを支えてくれる善意の賛同者がどうしても必要ということになったわけです。この問題はここ二、三年来の懸案だったのですが、昨年末の役員会で正式に賛助会員制度の採用を決めました。

タンチョウは阿寒の誇り―と保護活動の歩みを話す吉田会長

――募集開始以来、賛助会員はどれくらい集まりましたか。

正式に募集をスタートさせたのが昨年の十二月二十一日でしたが、これまで四十九人の賛助会員が集まっています。大半がタンチョウ観察センターを訪れるアマチュアカメラマンですが、なかには話を聞いてわざわざ会費を同封して郵便で入会を申し込んで来る熱心な愛鳥家もおり、感激しました。

大体、半分は東京、横浜など道外の人、町内はわずかで三分の一は札幌、釧路の方々です。当初は三十人もいればと考えていたのですが、思わぬ反響に驚いたと同時に、それだけタンチョウを愛する人が全国にいるのか―と心強く思いましたね。

――賛助会員と愛護会との関係はよくわかりました。ところで賛助会員には何か恩典がありますか。

賛助会員になっていただくと会員証を渡し、登録の意味でタンチョウ観察センターに名前を掲示します。タンチョウに関する資料や会報を送るほか、観察センターの入場券を三枚差し上げるといったささやかな特典はありますが、やはりタンチョウ保護活動に参加しているというプライドを持っていただけることが最大の特典と思っています。

――愛護会ではこのほかにも調査活動や絵はがきの販売などもしていますね。今後の課題やビジョンをお聞かせ下さい。

会ではタンチョウが増えて来たことから、より効果的な保護活動が推進できるように昨年から三年計画でねぐらなど冬の生態調査に入りました。当面、標識付け（バンディング）をどうするか内部でも大きな問題となっていますが、二、三年かけて慎重に検討する方針です。活動費を賄うために絵はがきやしおりなども販売していますが、タンチョウ保護思想の普及にも効果があり、今後も販路の開拓など含めて積極的に取り組んでいくつもりです。

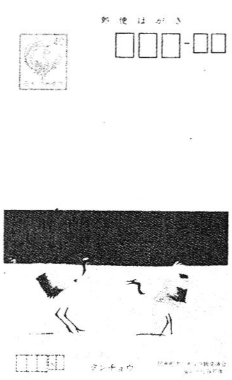
〈プロフィル〉

愛護会発足以来、十七年間も会長の重責にあった。「タンチョウは日本の宝」との信念に立ち、行政を強く動かしてエサの確保やタンチョウ観察センター建設を陰で推進して来た。新聞販売店などを経営する一方、釧路支庁地区社会福祉協議会長、町体育協会長などの要職を歴任し自民党釧路連合支部の幹事長として各種選挙に飛び回る。空知管内栗山町出身。トリ年生まれというのも何かの縁か。

昭和五十七年度

4・25 タンチョウ絵はがき（十二枚組）第三シリーズ作成販売

8・9 愛護会発行タンチョウ写真入り官製はがきと絵はがき同時発行される。



◇◇好評！タンチョウの官製 はがき◇◇
阿寒町タンチョウ鶴愛護会が発行したもので撮影は阿寒町教委**佐藤照雄氏**による。絵はがき（カラー十二枚セット）も同時発行される。

10・23 タンチョウ鶴愛護会が北海道文化財保護功労賞受賞

11・4 特別天然記念物タンチョウ保護三十周年記念式典において北海道教育委員会より感謝状を受ける。

12・4 生息一斉調査　三二〇羽確認

12・10 タンチョウ保護情報第一号発行

3・ 万葉学者・犬養孝大阪大学名誉教授がタンチョウ鶴愛護会の名誉会長に就任

昭和57年８月14日

広げよう踊りの輪

郷土芸能「丹頂踊り」

7年ぶりに講習会

ふるさとまつりで優雅な舞を

阿寒

【阿寒】郷土再発見―をテーマに十五日阿寒町自然休養村で第一回の「阿寒町ふるさとまつり」が開かれるが、これに合わせて七年ぶりに郷土芸能「丹頂踊り」の講習会が町民センターで開かれた。この講習会は、まつり会場で行われる丹頂踊り大会を前に正しい踊りの型を―と丹頂鶴愛護会（吉田勝夫会長）が町民に呼びかけて行ったもので、振り付けを行った花柳徳保師匠も駆け付けた。この踊りは十五年前に誕生した若い郷土芸能。正式な踊りの伝承が今大きな課題となっていただけに、この日は三十人の婦人が参加「まつり会場ではタンチョウの優雅な舞をタップリ演じてみたい」と張り切っていた。

町民センターで花柳師匠を招いて開かれた丹頂踊り講習会

この丹頂踊りが生まれたのは、昭和四十二年十一月、誕生のきっかけは、四十年に結成されたタンチョウ愛護会の呼びかけからで、タンチョウ愛護運動の普及にと藤田久さん作詩、飯田三郎さん作曲の丹頂音頭がまず完成。これに花柳徳保さんが振り付けをして生まれたもの、

踊りはタンチョウの美と優雅さを表現したもので、踊りが完成するまでには花柳さんが自ら徹別のタンチョウ飛来地に通いつめ、動作を観察して出来たというエピソードが残されている。

歌はソノシートになり、踊りのために愛護会がタンチョウを図柄とした浴衣も大人用、子供用合わせて四百枚製作。五十年には振り付けを行った花柳さんを招いてタンチョウ踊りのリーダー講習会まで行っている。

しかしこの踊り、発表の機会が少なくなったことや一部の踊り愛好家の手で受け継がれ、活動は最近伸び悩み、そんな中でふるさと運動の一環で踊りの輪拡大が注目されている。

今回ふるさとまつりで丹頂踊り大会が開かれるのは「郷土芸能をみんなで育てよう―」というのがその主旨。今回の講習会もそれを前提に開かれたもので、手の運びや足の形、表情などを花柳さんの指導の中みっちり学んだ。

「講習会には菊の会や芳鶴会といった町内の舞踊サークルの会員も多く参加、花柳さんの華麗な舞はいい勉強になったようです。今後はこうした講習会をコンスタントに開き根強い普及活動を続けて行かなければならないでしょう」と佐藤昭雄町社会教育係長は話している。

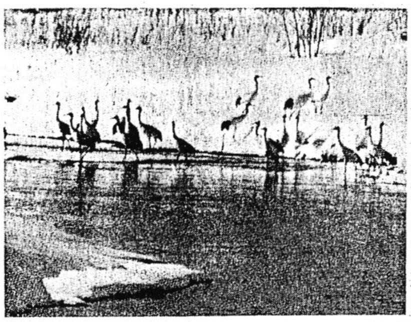
丹頂踊り大会は十五日午後零時半から三十分間まつり会場で開かれ、参加者には記念のタオルが配られるなど楽しい催しとなりそうだ。

昭和58年２月23日

タンチョウのねぐら調査へ

阿寒町教委

環境や移動経路など



ねぐらの河川へ集まるタンチョウの群れ

悪質カメラマンから保護

【阿寒】なぞに包まれたタンチョウの夜間の生態を解明するため町教委は阿寒川、舌辛川を中心に三月からねぐらの本格的調査を開始する。二カ年計画の調査は寝床となる河川の環境や分布状況など細部にわたり、その調査結果はタンチョウの安眠を妨げる悪質カメラマンらを規制する「夜の聖域」指定などの貴重な資料となる。

タンチョウは冬季間、釧路湿原から阿寒町や鶴居村の給じ場に飛来し日没後、給じ場近くの結氷しない河川で集団で夜を過ごす。しかし最近は町外から多くのアマチュアカメラマンが入り込んでシャッター・チャンスを狙い、このため神経質なタンチョウの安眠を妨げるトラブルが相次いでいる。

町教委はこうした悪質カメラマンの実態やタンチョウのねぐらでの生態を解明するため、今冬から二カ年計画で生息環境調査を実施することになった。昨冬の予備調査ではおおまかな分布調査が行われ、阿寒町内には両河川合わせて十カ所のねぐらで七十羽から百羽近くが夜を過ごしていることが分かった。

町教委は町丹頂鶴愛護会や町内の監視人らの協力を得て昨年十二月からねぐら河川の水温などを調べてきた。この三月からは同愛護会と仁々志別小中学校の片山登教諭らが中心となって本格調査に入る。

内容はタンチョウのベッドとも言える川の流れや深さ、川底の土質、周囲の植物分布、小魚の種類、移動経路などで「ツルを刺激しないよう夜間調査はなるべく避け、早朝の午前六時ごろから正午ごろまで不定期に調査したい」（町教委）としている。

ねぐらによっては毎週土曜日から日曜日にかけて数十人のカメラマンがタンチョウに接近し脅かすといった事態も起きている。町教委は二カ年の継続調査の結果次第ではカメラマンの立ち入り禁止する「夜の聖域」を設定し、タンチョウ保護に役立てることにしている。

昭和五十八年度

11・25　鶴居村タンチョウ飛来地視察

12・5　生息一斉調査（三百四十五羽）

12・6　ナベヅル・マナヅルの飛来地調査研修視察（鹿児島県出水市）。佐藤事務局長他一名　（～9日）

2・10　タンチョウ鶴愛護会でタンチョウ絵はがき（十二枚組）第四シリーズ作成販売

昭和58年６月23日

初めましてマリモさん

阿寒湖畔にタンチョウ三羽

【阿寒】平野の湿地帯に住むはずのタンチョウが山中の阿寒湖畔に現れ、地元の写真工芸社経営宮本稔さん（54）がその優雅な姿をカメラに収めた。標高が高く原生林に囲まれた土地に何故タンチョウが飛来したのか、関係者も首をかしげている。

宮本さんは二十日、知人からの連絡を受けて阿寒湖畔のキャンプ場付近で三羽のタンチョウを確認した。三羽はすぐに飛び立ったが、成鳥らしい、二十二日現在まだリンクにとどまって水たまりにエサを探しているのか、時々くちばしを突っ込んでいる。

宮本さんは湖畔に住んで約四十年、もう三十年ほどカメラを持ってタンチョウを追っているが「阿寒湖畔で営巣すると段階で、成鳥になる一歩手前の亜は考えにくい」との見方だ。

観察を続け三羽を見守りたい」と言っている。阿寒町教委にも湖畔でのタンチョウ確認例はなく、珍しい現象に注目しているが、釧路教育局などは「おそらく営巣地を探す過程で、たまたま立ち寄ったものでこのまま湖畔で営巣すると

阿寒湖畔に姿を見せたタンチョウ＝宮本稔さん撮供

昭和58年12月16日

金曜アングル

調査時期を見直せ

まちまちなタンチョウ確認数

実数に近い給餌場の調査

特別天然記念物タンチョウの生息状況一斉調査は昭和二十七年度以来、毎年十二月五日に行われている。三十二回目の本年度の調査結果は二十一日道教委から発表されるが、過去最高を記録した昨年度の三百二十羽を上回るのかどうか、生息数の推移は保護対策の基礎資料となるだけに関係者の寄せる関心は大きい。

いま「過去最高の三百二十羽」と言ったが、別の調査によれば昨年度の生息数は三百三十四羽とある。タンチョウ監視人や給餌（じ）人が道教委の一斉調査とは別に五十六年度から独自に続けている「給餌場における飛来数調査」の結果である。この年も一斉調査では二百九十五羽だったのに対し、飛来数調査ではそれより二十二羽も多い三百十七羽が確認されている。

このギャップはなぜ生じるのか。飛来数調査は一―三月の毎月二十六日に行われている。タンチョウは厳冬のこの時期になると、エサを求めて釧路管内二十三の給餌場にほとんど例外なしに全羽しかいなかったタンチョウだが、その後の行政と住民が一体となった手厚い保護の努力が実を結んで今日では三百羽の大台を超えるまでに増え推移の把握である。「タンチョウの国勢調査」とも呼ばれる一斉調査が三十年以上も毎年欠かさず続けられている理由だ。

しかし調査時期が必ずしも適切ではないことは先に述べた通りである。「国勢調査」にふさわしく確認数により正確を期すため、厳冬期に実施するよう見直すべきではないのか。タンチョウの保護行政は文化庁―道教委の手でけわれて来たが、五十九年度から環境庁―道生活環境部にバトンタッチされる。所管官庁はこれまでの保護対策、保護事業のあり方を洗い直し、より実り多いものとする機会でもあるはずだ。生活環境部自然保護課では「一斉調査は従来通り十二月五日に行う」としているが、ぜひ再考してもらいたいものである。

（吉岡孝修記者）

今年も十二月五日に行われた一斉調査。飛来数をカウントする阿寒中の生徒たち

昭和五十九年度

1・25　皇太子ご夫妻タンチョウ観察センターご視察

6・1　タンチョウをデザインした七宝焼のタイピンとカフスボタンを作成販売

12・5　生息一斉調査　三二七羽確認

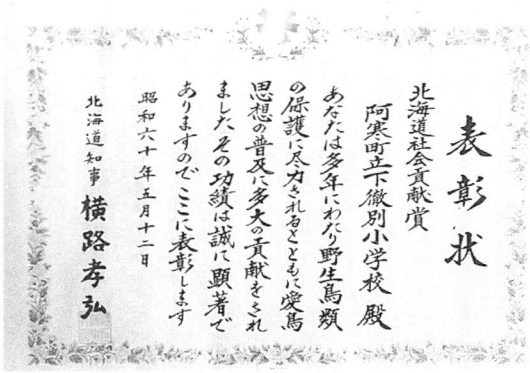
12・24　タンチョウ鶴愛護会で写真集「タンチョウ―美と幻想の世界―」（B四版・百二〇ページ）を刊行

昭和六十年度

5・12　下徹別小学校が北海道社会貢献賞（野生鳥獣保護功労）受賞

5・15　新丹頂鶴音頭の指導者講習会実施

12・5　生息一斉調査　三八四羽確認



表彰状

北海道社会貢献賞
阿寒町立下徹別小学校　殿

あなたは多年にわたり野生鳥類の保護に尽力されるとともに愛鳥思想の普及に多大の貢献をされましたその功績は誠に顕著でありますのでここに表彰します

昭和六十年五月十二日

北海道知事　横路孝弘

昭和59年1月25日（水曜日）

タンチョウで皇太子ご夫妻とお話

下徹別小児童が〝大任〟

資料作成、礼儀作法や服装も

地域挙げて準備

阿寒

皇太子ご夫妻と対面する児童たち（上）とお母さんたちも当日の服選びに余念がない

安藤校長

昭和60年5月16日（木曜日）

タンチョウとお友達！

阿寒町の下徹別小

道社会貢献賞（野生鳥獣保護功労）を受賞

生態などの学習も　一斉調査に毎年参加

昭和六十一年度

6・8	丹頂鶴音頭の普及(ふるさとまつり)
8	タンチョウ絵ハガキ第五集発行 (三千部)
9・14	丹頂鶴音頭の普及 (阿寒神社秋季例大祭)
10・5	丹頂鶴音頭の普及(開基百年記念)
12・5	一斉調査協力
12・15	小魚池水槽増設・上家改築
12・20	タンチョウ保護情報紙第七号の発行 (三百部)
12・25	テレホンカード作成販売 (二種類三百組)
12	給餌活動 (小魚三百kg)
	餌募金活動 (観察センター)
	飛来地の監視活動 (～3月)
	生息環境調査
2・1	会員・賛助会員タンチョウ写真展 (展示三十点) (～3/30)

百羽以上優雅な姿

阿寒町タンチョウ観察センター

テレホンカードを新発売

【阿寒】厳しい寒さの訪れとともに阿寒町上阿寒のタンチョウ観察センターに飛来するタンチョウも数を増し、連日百羽以上が優雅な姿を見せている。入り込み客は、これからが本番だが、今シーズンは阿寒町丹頂鶴愛護会の事業として同センターでタンチョウのオリジナルテレホンカードを作成して販売しているほか、全国のアマチュアカメラマンを対象に公募したタンチョウ写真展も来年二月から開くなど新企画で多くの来場を期待している。

同センターには、ピーク時二百五十羽ほどが飛来するが、十九日にはすでに二百三十四羽を数え真白い姿を雪原に餌をついばんでいる。昨シーズンは、ナベヅルもやってきて人気を呼んだが、この冬も餌付け用の魚をまいて飛来を待っている。

新発売のテレホンカードは、タンチョウの鳴き合いと求愛ポーズの二枚のカラー写真印刷したもので、二枚一組千五百円。普通は、一枚五百円のカードで差額の二百五十円は保護に役立てられる。五百組の限定販売で、二百組は、同愛護会賛助会員用、残る三百組を一般希望者にあてているが、早くも百枚が売れる人気で、申し込みが次々寄せられている。

写真展は、センター内にサロンを開設して二月一日～三月末にかけて開く。同センターには、例年多くのアマチュアカメラマンが訪れていることからこれら自慢の作品を一堂に飾ろうというもの。カラープリント、サイズは半切り、応募数は一人二点以内で、来年一月三十日まで受け付ける。賞は、全員に参加賞が贈られる。

また、この冬は、観光客やカメラマンの姿は少ないが、同センターでは、冬休みに入った年末の二十七日ごろから例年のように賑わうものとみている。

テレホンカード販売、写真展開催と新事業が組まれた同センター

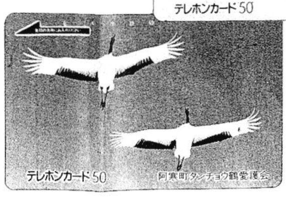
タンチョウの生息地 釧路湿原国立公園指定記念

テレホンカード

限定2,000セット

近日発売!!

阿寒のシンボル
タンチョウが素敵な
テレホンカードに。



●2枚セット
(タンチョウ観察センター台紙つき)
1,600円

阿寒のタンチョウ1羽

ストロボ禍?

アマカメラマンの光で"目つぶし" 電線に衝突

大けがし保護 怒る関係者

重体のタンチョウを抱く観察センターの山崎さん

【阿寒】二十九日夕、釧路管内阿寒町上阿寒のタンチョウ観察センターから、ねぐらへ帰る途中のタンチョウ一羽が電線に衝突、大けがをして、釧路市動物園に保護された。タンチョウ監視人や目撃者の話によると、アマチュアカメラマンが写真撮影に使ったストロボの強力な光に目がくらんだのが原因らしく、保護関係者から「特別天然記念物のタンチョウを被写体としか見ていない姿勢は問題」と怒りの声が出ている。

同観察センターの山崎定作・タンチョウ監視人によると、同日午後四時四十分ごろ、約二十羽のタンチョウが近くの阿寒川のねぐらへ引き揚げる際、センターから約一㌔離れたところで急に一羽がふらふらしだし、そのまま、国道沿いの電線にぶつかった。現場から手前の農道付近では強いストロボが何度もたかれていたという。町教委でも原因を調べている。

このタンチョウは体長約一・五㍍の成鳥(推定四歳以上)。胸を強く打ち内出血がひどいうえに関節を傷めたらしく重体。

同センターはタンチョウの撮影場所として人気が高く、飛来している百羽余りのタンチョウを狙って道内外から大勢のカメラマンがやって来ている。

センター内はタンチョウを驚かすような行為は禁止しており、ストロボの使用は認めていないが、阿寒町タンチョウ鶴愛護会によると、ここ二、三年、日没時にストロボをたいてタンチョウの純白の姿を夜空に浮かびあがらせるような手法がカメラマンの間で流行しており、センター付近でも、ストロボ撮影する光景が見られる。

二十九日の事故は、ストロボが原因とはっきり断定はできないものの、タンチョウの生態に詳しい橋本正雄釧路市博物館学芸員は「タンチョウの視力は人間と同程度で、急に強力な光があてられれば、目がくらみ平衡感覚を失ってしまう。ストロボをたくのは非常識」と話している。

昭和六十二年度

6・8 丹頂鶴音頭の普及
8・15 前田一歩園賞受賞を記念してタンチョウ里帰りクイズ実施
応募総数 一二三二通
里帰り日、9月14日（43通）
ピタリ賞 一名
ラッキー賞 三名
10・5 ふるさとまつり、秋まつり行事の折りにパレード実施
12 給餌活動
小魚二百kg、寄贈トウモロコシ五百kg
トウモロコシ 一五二俵（道教委）
小魚千kg、給餌畑二十アール
（町教委）（～3月）
12 飛来地の監視活動
飛来地の羽数調査
ねぐらの監視活動（～3月）
12・5 一斉調査の協力
町内 一一七羽
全体発見数四二四羽
（成三八一、幼四三羽）
12・25 テレホンカード作成販売
二種二千枚発行、一九六〇枚有料販売
1・30 保護情報の発行
タンチョウ保護情報第八号五〇〇部
替助会員三〇〇名に送付
年間 絵ハガキ作成販売
作成二千部 販売一九〇〇部
2・7 じょ・かてい鶴水墨画展
保護思想普及の一環として実施三五点
会場（公民館・観察センター）
3・1 サイン会開催（～29日）
タンチョウ写真展（観察センター）
賛助会員を中心に募集展示点数二十点（～30日）

タンチョウ記念館誘致へ

期成会が発足

阿寒

【阿寒】道立タンチョウ記念館誘致促進期成会の設立総会がこのほど、役場で開かれ、記念館の早期実現に向け積極的な運動を進めていくことを決めた。

道立タンチョウ「北方圏鶴ネーチャーセンター」（仮称）構想は阿寒町が昨年秋、町タンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）と協力してまとめた。タンチョウを絶滅の危機から救った給餌（じ）活動発祥の地である阿寒に、北方圏に生息する九種のツルを集め、保護増殖を図ろうというもの。

道立としたのは、タンチョウは三十九年に道鳥に指定されており、道が進める北方圏諸国との交流にも意義があると判断したためで、町タンチョウ観察センター周辺約五十㌶の牧草地を湿原に変え、世界のツルの生態を研究する自然博物館をめざす。

期成会は町や愛護会のほか議会、商工会、観光協会、町内会連合会、婦人団体などの二十六人で構成。総会では会長に佐藤八夫町長を選んだ後、六十三年度事業として道や関係機関への陳情を行うほか、資料収集に当たっていくことを確認した。

受賞に決意も新た

前田一歩園賞の授賞式 喜びの阿寒・愛護会

第五回前田一歩園賞の授賞式が十一日午前十一時から釧路支庁で行われた。前田一歩園賞は自然保護などに功績のあった団体と個人に贈られるもので、この日、前田一歩園財団から表彰されたのは阿寒町タンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）＝阿寒町字中央＝と苫前郡羽幌町大字天売字富磯四五の漁業、青塚松寿さん（三九）の一団体一個人。

授賞式では、前田一歩園財団の前田三郎理事長から表彰状と副賞の二十万円が贈られたあと、前田理事長が「前田一歩園賞は財団が発足した五十八年に設け、自然保護に貢献した団体や個人に贈っている。今後も自然保護のために尽力してもらいたい」とあいさつした。

引き続いて環境庁阿寒国立公園管理事務所の八重樫英樹所長、釧路支庁の新覚雄三支庁長が「今後も自然保護普及のために協力して下さい」と来賓あいさつ。受賞者の青塚松寿さんが「立派な賞をもらい感激している。今後もオロロン鳥などの保護に努力したい」。また阿寒町タンチョウ鶴愛護会の吉田勝美会長は「前田一歩園財団の趣旨に沿い、タンチョウヅルの保護のため、会だけでなく町をあげて取り組みたい」と決意を新たにした。

釧路支庁で行われた前田一歩園賞の授賞式

昭和六十三年度

9・19 姉妹都市交流事業（阿蘇町においてタンチョウ写真パネル展二十点）（～20日）

10・6 タンチョウ環境調査（15・16日）

10・21 映画鑑賞会「つる」公民館六六三名

11・1 阿寒国際ツルセンター誘致署名活動（観察センター）一〇七五人（～3月31日）

11・5 ツルセンター誘致事業 アメリカICF調査と協力要請（～19日）

12・5 一斉調査の協力

12 給餌活動 飛来地の監査活動 餌募金活動（観察センター）（～3月）

2・3 タンチョウ環境調査（～5日）

2・15 タンチョウ写真展（観察センター 二十点）（～3月31日）

3・24 ICF理事長アーチボルト博士招聘（～25日）

24日来釧、25日阿寒で講演

世界的に頼れる人

ツル研究で博士号 国際センター誘致に弾み

【阿寒】「お待ちしてます。アーチボルトさん！」―。国際ツル財団（ICF）のジョージ・アーチボルト理事長（四三）が二十五日に阿寒で講演会を開く知らせは、湿原とツルを愛する釧根地方の人々に明るい話題を広げている。特にタンチョウ保護関係者にとって、同理事長は世界的に「頼れる存在」。釧路市には再会を心待ちにする旧知の女性もいる。さて、アーチボルトさんとは、どんな人なのか―。

来釧の日が心待ちされるアーチボルト理事長

米国ウィスコンシン州に本部があるICFは、世界のツル十四種を集めたツルの保護活動のメッカ。十七年前にこの組織をゼロからつくった人が、アーチボルトさんだ。ツル研究で博士号を持つ同氏は「ぜひ北海道のタンチョウを見たい」と、ICFが設立された昭和四十七年に釧路地方を初めて訪れた。

この時、若い理事長を励まし、交流を深めたのが釧路市内の開業医、札木照一朗さんと奥さんの芳枝さん（五九）だった。札木医師は、釧路湿原がラムサール条約指定地域になった際、民間側から強力な運動を進めた功労者だが、四年前に心不全で亡くなった。

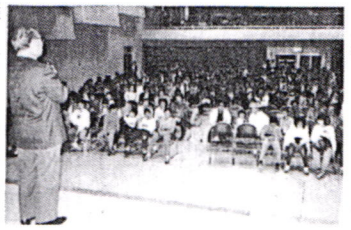
アーチボルト理事長は同夫妻を「日本のパパとママ」と呼び、今回の来日も芳枝夫人らとの再会が大きな目的だ。

ところで、アーチボルト理事長を迎える阿寒町は、ICFの日本支部になる「阿寒国際ツルセンター」（仮称）を道立で誘致する運動を展開中。同町のタンチョウ鶴愛護会にも同理事長の友人がおり、「地元で理事長自身の口から、センター構想を支援してほしい」との本音もあり、「ぜひ阿寒へ」と働きかけた。

同理事長は二十四日に来釧、三日間の日程で滞在し、講演は二十五日午後二時から町公民館（無料）で行われる。

タンチョウ 記念館誘致に弾み

「つる（鶴）」の上映に800人



吉永さんの優雅な演技を阿寒町でも―と二十一日夜阿寒町公民館で話題の邦画「つる（鶴）」が自主上映された。

阿寒町、町教委、商工青年部、タンチョウ鶴愛護会、文化協会らが阿寒タンチョウの里・映画「つる」を鑑賞する会（平間幸代世話人）が十日余りの準備期間で上映にこぎつけたもので、結果は約八百人の観客と立見まで出る大盛況。「映画でこれほどの満席となるとは、新装の公民館が完成して初めて」と実行委を嬉しがらせた。

上映に先立って吉田勝美タンチョウ鶴愛護会会長が「意義深い催し」とあいさつ。実行委では「この熱気で道立タンチョウ記念館誘致運動に結びつけたい。次は吉永さん本人を招いたイベントも」という景気の良い声ももれていた。

63年3月8日

優雅な舞を見せるタンチョウ

タンチョウ解説書 道が初めて作製へ

小中学校の郷土学習に

タンチョウ保護の輪をさらに広げようーと、道は六十三年度、道民向けのタンチョウ解説書を初めて作製する。

絶滅の危機に頼していた国の特別天然記念物タンチョウは、阿寒町や鶴居村などの住民の熱意で少しずつ増加。昨年暮れの一斉調査では過去最高の四百二十四羽の生息を確認した。増加に伴い、保護活動も地元の団体に加え、日本野鳥の会（本部・東京）が鶴居村にネイチャーセンターを開設、聖域づくりをめざすなど、全国的な広がりを見せている。

一方、タンチョウは三十九年に道鳥に指定されているが、生息地が道東に限られていることもあって、道的にはなじみが薄い。このため道は、小、学校などでも郷土学習に用できるかかりやすい解書を編集、市町村に配布して、この道鳥への理解をめてもらうことにした。

道自然保護課によると文献資料の収集を含め、費は三百万円。カラーグをふんだんに配し、生命けでなく、人間との交流保護の歩みの紹介にも入れる。

平成元年度

12	募金活動　観察センター赤いベレー 総額　一五七、一九四円
12	販売事業　絵ハガキ No.五シリーズ五五〇部 No.六シリーズ一二五四部 タイピン七宝九〇個、液晶二九個 鶴レターセット一〇〇セット 図書　十七部
12	給餌活動　小魚　二〇〇kg 寄贈トウモロコシ四五〇kg トウモロコシ一五二俵（道教委） 小魚千kg 給餌畑二〇アール　町教委 （～3月）
12	飛来地の監視活動 飛来地の羽数調査 ねぐらの監視活動　（～3月）
12・5	一斉調査の協力 阿寒町四六羽（成四一羽幼五羽） 全体三五六羽（成三三〇羽幼二六羽）
1・26	補足調査 阿寒町一二三羽（成一一〇羽幼一三羽） 全体四四一羽（成四〇一羽幼四〇羽）
2・15	タンチョウ写真展 アマチュア写真家を対象に募集 （観察センター　二十点） （～3・31）
2・26	道立阿寒国際ツルセンター誘致にかかるタンチョウ総合調査

道立阿寒国際ツルセンター

誘致めざし米国視察

増殖など学び帰国

阿寒の佐藤課長ら　陳情案の作成に活用

タンチョウの研究者、正富宏之・専修大道短大教授と釧路市内の札木ゆりあさん、そして阿寒町タンチョウ鶴愛護会事務局長でもある佐藤さんの三人が六日に出発、十九日に帰国した。国際ツル財団（ICF）は世界に生息する十四種のツルの増殖研究などを進めており、本部は米国ウィスコンシン州バラブーに六十四㌶の敷地と飼育施設などを持つ保護・研究機関。

一行はここで、自然のバランスに成育条件が左右されるツルの保護状況、また一般市民とツルのふれあいなどをじっくりと見学した。また、ワシントン郊外の国立ツル増殖センター、テキサス州の白ツル越冬地も回り、施設概要などについて知識を深めてきた。

米国視察から帰国した佐藤・阿寒町税務課長

【阿寒】仮称・道立阿寒国際ツルセンターの誘致を目指している阿寒町の佐藤照雄・税務課長（四九）が、米国の国際ツル財団本部などを視察、このほど帰国した。米国では、進んだツルの増殖研究など知識を深め、「町が誘致を目指す施設の構想に重要なデータがそろった」としている。

平成二年度

11 販売事業
絵ハガキ　一四〇〇部
タイピン　七宝　二〇個
液晶　十一個
鶴レターセット　六七セット
図書　五五部
写真集　一四五部
（～3月）

11 給餌活動（小魚、トウモロコシ）
飛来地監視活動　飛来地の羽数
調査・ねぐらの監視活動

12・5 一斉調査の協力　全体　三四五羽
阿寒町　四七羽

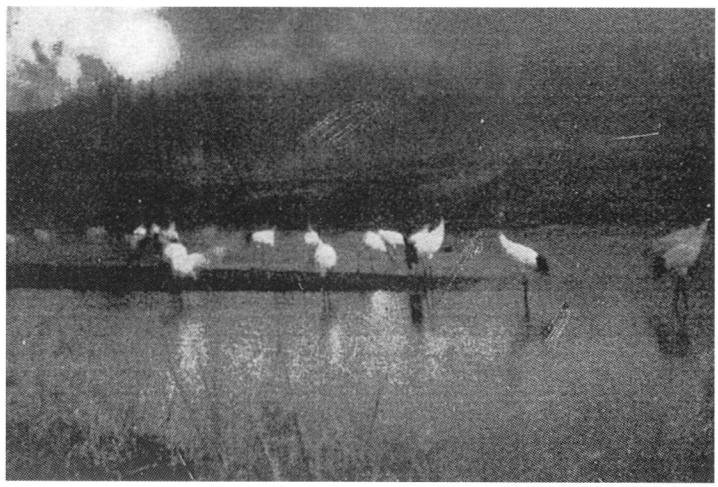
1・16 道陳情
自然保護課（吉田勝美会長）

1・25 補足調査　全体　四九九羽
町内　一〇二羽

2・15 タンチョウ写真展
（アマチュア写真展　十五点）
（～3・31）

年間 学術研究の資料の収集
自然保護に関する学術研究資料
二十点

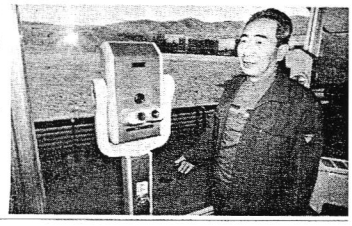
その他 ツルセンター誘致にかかる調査事業
中国ザーロン自然保護、
北京動物園　佐藤昭雄事務局長視察
ふるさと創生基金にかかる
タンチョウプロジェクトへの協力



北海道新聞社　提供　撮影　岩松　健夫

外壁の装いも新たに

阿寒町タンチョウ観察センター　飛来は今月中旬頃



阿寒町のタンチョウ観察センターが一日、オープンした。昭和五十二年開館の同センターは外壁の白い壁も塗り変えられ装いも新たになった。

タンチョウも人も待ち遠しい山崎管理人

一日午前中に八人の来館者があったが、肝心のタンチョウの姿がなく、早々に引き返していった。管理人の山崎定作さんによると「夕方になるとタンチョウが四羽ほど姿を現している。集まりだすのは今月中旬ぐらい」で一番多い時で百五十羽が集まる。

同センターには昨年、二万三千五百人の来館者があり、沖縄、台湾からの観光客が多くなっている。例年、プロ、アマのカメラマンが望遠レンズでタンチョウの優雅な姿を撮影でにぎわうのは一面真白な雪におおわれた一月以降になる。開館は来年三月末まで。

結構いてよかったネ

タンチョウ一斉調査

子供らも満足げ

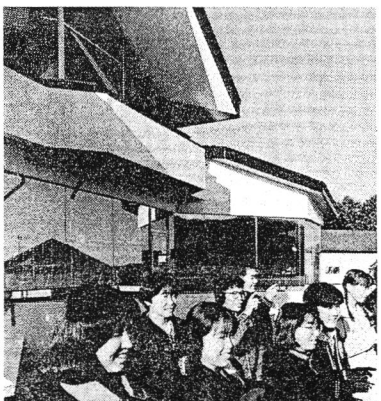
【鶴居、阿寒】タンチョウの一斉調査が行われた五日、阿寒町のタンチョウ観察センター、鶴居村の鶴見台など釧路地方の生息地や飛来地でも、小、中学生らが一羽ずつ確かめるように調査に当たった。確認数の少なかった昨年に比べるとまずまずの数字で、子供たちにもホッとした表情が広がった。

日本野鳥の会の「鶴居・伊藤サンクチュアリ」には午前八時五十分の事前調査に合わせて鶴居小、鶴居中の児童生徒ら三十人が集合。先生の合図に合わせて声を出して数え始めた。昨年の十一羽という確認数を知っている子供もいて「結構いて良かったね」という声も。一昨年の九十羽には及ばなかったものの三十六羽の数字には満足げ。

また米国・ペンシルベニア州のテレビ局が「日本の社会と土地」をテーマに取材に来ており、タンチョウ保護のために子供たちが努力した歴史を聞いて、熱心に子供たちを取材していた。

同サンクチュアリの伊藤良孝さんは「今年も暖冬で、まだタンチョウは散らばっているようだが、今日は風もなかったので全体では確認数もまずまずになるのでは。それに今年はここで幼鳥を九羽確認している。繁殖率もいいと思う」という。

他の給餌（じ）場では鶴見台が二十六羽、タンチョウ観察センターが十八羽で関係者は「良くもないけど悪くもない」とみている。



「今年はどうかな」―。釧路地方でも小、中学生が熱心に数えた＝午前9時、阿寒町タンチョウ観察センター

平成六年度

6・15	定期総会　記念碑建立計画について
7・1	ツルセンター建設にかかる記念碑建立事業 タンチョウ人工給餌発祥の碑 万葉歌碑の建立計画
8・30	第一回役員会　記念碑建立事業について
11・1	給餌活動　小魚　二〇〇kg トウモロコシ二九五袋　道教委 小魚千kg給餌畑20アール 町教委　（〜3・31）
11	絵ハガキ及びテレホンカード作成 愛護啓発用に作成 絵ハガキシリーズ No.五　一五〇〇セット
12・1	タンチョウ保護監視調査事業 飛来地やねぐらの環境保全のための基本調査事業並びに保護監視 監視員　山﨑定義（上阿寒） 調査員　胡　東宇（北海道大学） （〜3・31）
12・5	一斉調査への協力 阿寒町八五羽（成七五・幼十） 全体四五八羽（成三九〇・幼四三　不明二五）
1・25	第二回調査 阿寒町一七二羽（成一五六・幼一六） 全体　六〇七羽（成五四七・幼六〇）
年間	販売事業 絵ハガキ　一〇五〇セット 鶴レターセット三一セット テレホンカード　九八〇枚

日本初 オグロヅル飼育へ
阿寒国際ツルセンター

来年のオープンに合わせ購入
研究用、繁殖にも挑戦

【阿寒】阿寒町は、チベット付近の高原地帯だけに生息する世界的に珍しいオグロヅルを一つがい、米国の国際ツル財団から購入し、来年四月にオープンする同町の阿寒国際ツルセンターで飼育する。オグロヅルを飼育するのは日本では初めて。

オグロヅルは顔、首、風切り羽が黒く、頭上が赤いところはタンチョウに似ているが、体がひと回り小さく淡灰色で、尾羽の黒いところが異なる。中国の青海省からチベットの標高三、〇〇〇㍍以上の高原地帯だけに生息し、繁殖状況など生態は未解明の部分が多い。

ツル専門の研究機関としてタンチョウの飼育・増殖に取り組む国際ツルセンターは、比較研究の対象となる別種のツルを探した結果、タンチョウと近縁種に属しながらも、異なる生息環境を持つオグロヅルが、最適と判断して購入を決めた。将来は世界各地のツルを集めて飼育する構想もある。

ツルの保護・増殖活動で有名な米国の国際ツル財団から三歳のつがいを年末か来年初めごろに購入、来年四月にセンター内のケージで一般公開する。町は新年度、オグロヅル購入も含めセンター建設事業費二億七千三百万円を計上した。

同町教委の古賀公也研究員は「将来はセンター内で繁殖させたい。米国や中国の専門家ともこれをきっかけに交流を深めたい」と張り切っている。

世界的に珍しいオグロヅル＝中国・北京動物園で佐藤照雄阿寒町教委生涯教育課長撮影

北海道新聞社　提供　撮影　岩松　健夫

ツル文献収集着々
96年度オープン 国際センター　論文から伝説まで

阿寒

【阿寒】阿寒町が九六年度オープンを予定している阿寒国際ツルセンターで所蔵する文献の収集作業が、町タンチョウ鶴愛護会（古田勝美会長、会員約二十人）などの協力で着々と進んでいる。同センターは、タンチョウの生態を中心とした研究機能と、来館者がツル類への理解を深める教育機能を併せ持つ総合施設となるため、収集する文献も、学術論文からツルにまつわる伝説集や一般向けの雑誌まで、多岐にわたっている。

ツル類の文献は、同センター調査委員会（代表・正富宏之専修大道短大教授）が、昨年度までに国内の文献約千三百種のリストを作成。協力を買って出た町タンチョウ鶴愛護会が、このリストに基づいて収集し、同センターに寄贈する。

三年前から本格的に取り組んできた同会事務局長の佐藤照雄町教委生涯教育課長は札幌などの古書店などを回り「すでに九割方が集まった」といい、現在は佐藤さん宅で保管している。

一方、同センターで研究に携わるため、今年四月に着任した古賀公也学芸員は、欧米の研究者による学術論文の収集に着手。現在までに三百編のリストを作り、執筆者に手紙を出したり、国内研究者のつてなどで、約七十編を集めた。

古賀さんは「外国の研究者は研究施設を次々と移るので、現住所を突き止めるのが大変」と話しながらも、リスト作成や収集に力を入れている。

町教委は「すべての文献資料は、来館者や研究者が閲覧できるようにしたい」と話し、「充実したライブラリーにするため、お手持ちの資料や情報を提供していただければ」と協力を呼び掛けている。

阿寒国際ツルセンターで所蔵するため、ツル類に関するさまざまな文献を集めている佐藤照雄さん

平成五年度

6・6	丹頂鶴音頭普及事業 ふるさとまつり三十名参加（トレーニングセンター）
	ツルセンター建設にかかわる記念碑建立事業
11・1	タンチョウ保護監視調査事業 飛来地やねぐらの環境保全のため基本調査事業及び保護環視の巡視事業 監視員　山﨑定義 調査員　百瀬邦和　山階鳥研（〜3・31）
11	給餌活動　小魚二〇〇kg トウモロコシ二九四袋　道教委 小魚千kg　給餌畑二〇アール　町教委（〜3月）
12・4	一斉調査の協力 阿寒　一五一羽（成一三七・幼一四） 全体　四七九羽
1・8	丹頂鶴写真展 中国吉林省対外文化交流協会主催による丹頂鶴写真展（観察センター半切版五十点） 写真家　文俊生氏が来町（〜14日）
1・16	後援事業　第十一回丹頂フェスティバル
1・25	第二回調査 町内　一八九羽（成一六九・幼二〇） 全体　六二八羽（成五六六・幼六二）
年間	販売事業 絵ハガキ及びテレホンカード作成販売
年間	愛護実践校助成

北海道新聞（夕刊）

阿寒町タンチョウ鶴愛護会が発行するオリジナルテレホンカード

テレカで協力 タンチョウの里づくり
阿寒町愛護会が作製
収益金は国際ツルセンターの資金に

【阿寒】タンチョウの里のイメージを高め、町が計画中の「阿寒国際ツルセンター」の活動資金集めに協力しようと、阿寒町タンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）は、オリジナルテレホンカードを作製、五日から発売を開始した。

テレホンカードには、越冬地で求愛のダンスを踊る二羽のタンチョウと、そばでたたずむ一羽を写した写真に「鶴のさと 阿寒」の文字をあしらった。写真は同会の佐藤照雄事務局長が五年前に町タンチョウ観察センターで撮影。佐藤さんの写真は、NTT釧路支店が三年前から発行しているテレホンカード「魅せられて―道東 雪原に舞うタンチョウ」にも使われている。

このオリジナルカードは、町タンチョウ観察センターで発売し、五十度数で千円。収益金は、平成八年度オープン予定の「阿寒国際ツルセンター」に所蔵する文献収集などの資金の一部とする。

このほか、阿寒町を象徴するマリモの写真を使ったNTT発行のテレホンカード（五十度数）とオリジナルカードのセットも、一千五百円で販売する。

…聞 釧新 平成6年（1994年）2月26日（土曜日）

国際ツルセンター建設へ
本格的な鶴の研究を
8年度オープン 総事業費は8億8千万円
阿寒町

国際ツルセンターの完成予想図

【阿寒】町では、阿寒国際ツルセンターを、同町二十三線（通称、タンチョウの里）に建設することを決めたが、その計画概要が明らかになった。同センターには、教育展示センターや研究センターなどを備え、ツルの生態学的研究や自然保護に関する研究調査を行う。総事業費は八億八千五百万円でオープンは平成八年度の予定。

同町は、ふるさと創生事業として五つのプロジェクトを策定したが、同センターの建設もそのひとつ。一昨年からは、道や専門家などによる調査委員会も設けられ、どういう施設にするかをハードやソフト面から検討が繰り返され、また、同町でも月舘俊松町長を会長とする建設期成会も設立されていた。

このほどまとまった基本構想によれば、特別天然記念物タンチョウに関する核になる研究機関が今までになく、基本的な研究が遅れているとし、同センターはタンチョウはもとより、ツル類を対象とした研究調査を行い、独特の教育活動を実施したいとしている。

敷地面積は約十万平方㍍の予定だが、今回は約六万七千平方㍍で、将来的には自然の状態を残すサンクチュアリ的な施設となる。建物は大きくツル教育展示センター（千二百平方㍍）とタンチョウ研究センター（二百七十平方㍍）に分かれる。

教育展示センターでは、はじめにレクチャー室で大まかな施設の説明などを行い、そのあとに展示室に移り、タンチョウの誕生から人間とのかかわりまでを映像やはく製を使って表す。ライブラリー室にはツルの文献資料やAVコーナーがあり、研究や調査結果がわかる。

研究センターには、人工ふ化室や育雛室などがあり、マジックミラーなどを使うことにより見学が可能。また、野外展示場は三カ所設けられ、成長にしたがってそれぞれに観察できる。

同センターの外観は、ツルの翼に覆われた雰囲気が出るようにしてあり、さらに、できるだけ窓を少なくするなど野鳥にやさしい設計になっている。

町では「人作り」に主眼を置き、専門研究員のほか、町民によるボランティアガイドも考えており、町ぐるみでタンチョウに対する認識を深める方針だ。

平成四年度

5		記念碑設計調査
5・22		丹頂鶴音頭普及事業
6・7		阿寒町ふるさとまつり
9		タンチョウポスター募集
		小・中・高の児童生徒を対象に広く募集し愛護思想の普及高揚に役立てる
10	（～11月）	
11		絵ハガキ印刷
11	（～3月）	給餌活動
11	（～3月）	タンチョウ保護監視調査事業
11・1	（～3月）	タンチョウ写真展（観察センター）
12	（～3・31）	タンチョウポスターを公民館観察センターに展示する
12・5	（～3月）	一斉調査の協力
年間		ツルセンター建設にかかる調査事業
年間		資料販売事業
		文献、写真等学術研究資料の収集

平成４年２月13日

国際ツルセンター実現へ

期成会が道に陳情

施設の基本計画書を提示

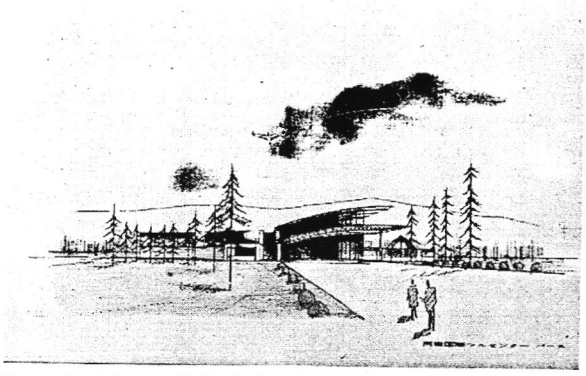
阿　寒

【阿寒】タンチョウをはじめ、世界中のツル十五種を飼育展示するほか、ツルを中心に幅広い自然保護に関する研究機関としての性格を持つ（仮称）阿寒国際ツルセンターの実現に向けて、同センターの計画を策定した期成会（会長・月舘俊松町長）は、このほど道庁を訪れて、陳情を行った。

同センターは、世界中のツルを飼育、展示することで、タンチョウの独自性を知り生息環境維持を考える拠点とするほか、自然保護に関する研究機関の性格を持つ教育活動に力点を置いた施設。

基本計画では、同センターを現在の丹頂観察センターのある同町二三線付近（約六万九千平方㍍）とし、同敷地内にビジターセンター、人工ふ化場、生態野外教育展示場などが設置される。ビジターセンターと人工ふ化場は、内部に保護の歴史やツルの種類などを紹介する展示室、百五十人収容のレクチャールーム、ツルに関する情報を提供する総合案内所、管理部門の各部屋が設けられ、人工ふ化場はヒナの様子を観察できるなどの部屋が設けられる。野外教育展示場は、世界各地のツル十五種を収容する六角ケージ一棟、人工ふ化やケガ、病気などのツルを収容する角形ケージ三棟、さらに自然飼育場一カ所がある。これらの施設の中でも、専門の研究者やインストラクター二人を配置し、来館者への説明を行う。運営方法は町などが出資する新たな財団法人を設立し管理運営に当たるとしている。総事業費は概算で約十五億円で、五年度着工を目指す。

同期成会では、同センターの基本計画がまとまったことを受けて、今月七日に会長の月舘町長、中島守一、吉田勝美両副会長らが道庁を訪れ、若狭道議会議長や担当の保健環境部へ初の陳情を行い、早期実現への協力を求めた。



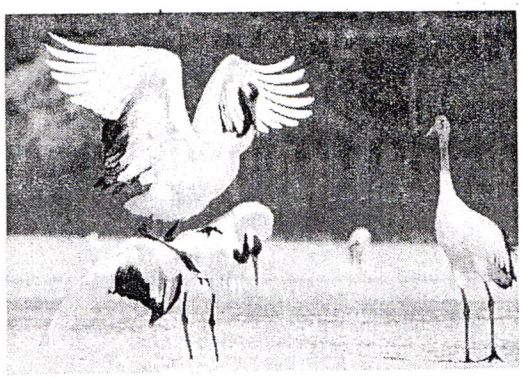
国際ツルセンターの完成予想図

柴田支庁長に要望書を手渡す月舘町長（右）

平成三年度

4　丹頂鶴音頭普及事業
　　音頭保存専門部会々員募集一〇九名
5・8　普及活動
　　ビデオテープ録音テープ配布
　　各幼稚園、小中学校　十二枚
5・13　講習会布伏内小学校　三十五名
6・2　ふるさとまつり中止
9・30　調査　正富教授
10・5　ＩＣＦ釧路
11・1　タンチョウ保護監視調査事業
　　悪質カメラマン等に対する監視活動、飛来地やねぐらの環境保全
　　監視員　佐久間三男
　　調査員　百瀬邦和（山科鳥研）
　　（～3・31）
年間　学術研究資料の収集
　　「タンチョウの生活誌」
　　レーザーディスク鶴の日記　他二六点
11　給餌活動　小魚二〇〇kg
　　寄贈トウモロコシ六〇〇kg美唄市
　　老人クラブ連合会
　　他にトウモロコシ五ヶ所二九四袋
　　@三〇kg道教委
　　小魚干kg　給餌畑二十アール　町教委
　　（～3月）
12・5　一斉調査の協力
　　阿寒町六二羽（成四九・幼十三）
　　全体四二一羽（成三五七・幼六四）
1・24　補足調査
　　阿寒町一四一羽
　　（成一一八・幼二三）
　　全体　五五七羽
　　（成四八〇・幼七七）
　　ツルセンター建設にかかる調査事業
1・30　陳情　釧路支庁
2・1　タンチョウ写真展（観察センター）
　　アマチュア写真一五点
　　販売事業　絵ハガキ
　　No.六　一三三〇部
　　鶴レターセット　五十セット
　　写真集　一〇五部
　　（～3・31）
2・7　道庁（吉田勝美会長）

町民 温かく出迎え　阿寒
タンチョウ観察へ　皇太子さま



美しい愛のしぐさ
＝阿寒町タンチョウ観察センター
会社員　大窪　泉
（恵庭市・34歳）

平成七年度

4・25　第二回役員会　記念碑建立にかかる募金活動について

11　給餌活動
　　テレホンカード作成販売（〜3月）

12　飛来地の監視活動（〜3月）

12・5　一斉調査の協力

3・2　除幕式
　・人工給餌発祥の碑
　・万葉の碑

愛護会活動三十周年を記念してタンチョウの愛護発祥の地に碑と歌碑を建立
平成八年三月二日

見守り、育てて30年

安全な環境確保に全力

「阿寒町ツル愛護会」は、この四月五日に発足したばかりですが、その前身である「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は、食糧難の戦中、戦後を通してタンチョウのエサの確保に努力してきた阿寒町内の人々によって一九六五年に結成された伝統ある愛護団体です。発足以来、会長を務めてきた吉田勝美さんは、約三十年間にわたり、ボランティアでタンチョウの給餌（きゅうじ）や監視活動を中心に、町内のタンチョウ保護の活動を支えています。

同会の活動30年を記念して建てられたタンチョウ愛護発祥の地の石碑と歌碑

四月二十六日にオープンした阿寒国際ツルセンター敷地内に「ボランティアの人々の功績をたたえるとともに、広くタンチョウ保護への理解を深めてほしい」と同会の活動三十年を記念し、「タンチョウ愛護発祥の地」の石碑と歌碑を三月に建てました。今後は従来の活動に加え、一般からもボランティアを募り、同センターでのガイド活動、施設整備なども行います。

一方、タンチョウの営巣地である阿寒川周辺での土地開発の悪影響やアマチュアカメラマンがツルを脅かす危険性などが懸念されており、ツルが安住できる環境確保が今年の大きな課題。また、同会では三十周年記念事業としてタンチョウに関する出版物を発行する予定で、内容の検討と編集作業に取りかかります。

タンチョウ愛護運動

阿寒町ツル愛護会（釧路管内阿寒町）

平成八年度

4・26	阿寒国際ツルセンター開館 愛護会事務局を阿寒国際ツルセンター内に置く
4	阿寒町タンチョウ鶴愛護会賛助会員の募集を開始する
4	ツルセンター内に売店設置、ツルグッズ等の販売を開始
7	阿寒国際ツルセンターの事業活動に伴うボランティアの受け入れと養成を行う
25	愛護会会報（鶴群）を発行開始（第一号～四号） 阿寒町ふるさと祭りに於て、町内会婦人部を中心に丹頂鶴音頭が踊られ親しまれる
10	タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
11～	ツルセンター内に愛護会管理における「清涼飲料自動販売機」を設置する
12	タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（～2月）
12・1	タンチョウ生息状況一斉調査への協力
3・10	タンチョウ「阿寒の里のなかまたち」発行（道新野生生物基金より助成を受ける）
3・8	第一回タンチョウ観察会の実施・十五名参加（展示施設見学・タンチョウ観察のしかた）

〈阿寒国際ツルセンター〉

□愛護会事務局をツルセンター内に平成八年四月二十六日、阿寒国際ツルセンターの開館に伴い、阿寒町タンチョウ鶴愛護会の事務局をセンター内に置き、阿寒国際ツルセンターが行う事業活動に協力すると共に、タンチョウを通して地域の発展への寄与を目指す。

□鶴群の発行

愛護会では、会員を対象に年六回奇数月に発行する。ツルに関わる情報の提供を内容に又、会員からの随想もとり入れ会員相互の交流も図っていく。

たづ　むら

鶴　群

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
会員を広く募集

☆　阿寒町タンチョウ鶴愛護会の歴史

「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」は，昭和４０年に発足して以来長年にわたり保護活動の歩みを続けてきました。これまでに，タンチョウの給餌活動をはじめ飛来地やねぐらの監視活動，丹頂鶴音頭の普及，愛護発祥の碑の建立，ツルに関する資料の発行などタンチョウの保護や保護思想の啓発活動を幅広く行ってきました。おかげで今日，タンチョウの営巣地である湿地の環境が年々悪化する中で，この阿寒町には毎年，およそ３００羽の群れが越冬する一大鶴の楽園となり，全国から訪れる多くの人々に優雅な舞を見せてくれています。

このように，タンチョウが飛び交う平和な郷土をこのまま次の世代に引継ぎ，人と鶴が共存できる環境を保全していく努力が今，私たちに求められています。

☆　阿寒町タンチョウ鶴愛護会は

従来から行ってきたタンチョウの保護活動を発展させながら，更にツルの調査研究と教育活動を主な目的に設置された阿寒国際ツルセンターが行う事業活動に協力して、ツルと共存する地域の発展に寄与することとしています。

① タンチョウ保護のために給餌や監視活動を行います。
② ツルに関する学習会，観察会，展覧会などを開催します。
③ 会報や解説書等の出版物を刊行し頒布します。
④ 国際ツルセンターの事業活動に協力します。
⑤ 国際ツルセンターの活動を支援するボランティアを養成し窓口になります。
⑥ ツルの保護思想を普及するために，グッズを開発し販売します。
⑦ その他，丹頂鶴音頭やタンチョウ愛護発祥の記念碑を保存する活動を行います。

会員になると

★タンチョウ鶴愛護会が発行する会報やツルに関する資料のほか，国際ツルセンターの事業案内など新しい情報を逐次お送りします。
★国際ツルセンターの売店で５％引き（テレカなど一部商品を除く）のサービスが受けられます。

圏感動が羽ばたく鶴の里圏

あなたもタンチョウ鶴愛護会の活動に参加しませんか。

会員と会費

会員は会の目的に賛同し，事業活動に参加，または支援できる方ならだれでも加入できます。
◇一般会員　年・一口　２，０００円
◇法人会員　年・一口　２０，０００円
＊会費は年度毎の会費です。入金をもって会員となります。
＊会員になりますと会員証を発行します

ツル愛護ボランティアも募集

阿寒町タンチョウ鶴愛護会は阿寒国際ツルセンターとともに，ツル保護活動の発展をめざし，ボランティアを養成してサービス活動を行います。

□解説部門

来訪者の希望によりツルセンターの展示施設，研究施設，生体野外展示施設やツルの最新情報について解説しながら案内いたします。

□施設部門

ツルセンター内外の環境整備，タンチョウの飛来地やねぐらの環境整備などに従事します。（ボランティアの詳細についてはご相談いたします。）

タンチョウ鶴愛護会組織の見直し

・阿寒国際ツルセンターの開館に伴い、地元タンチョウ保護関係者の代表をもって組織されていたタンチョウ鶴愛護会の組織を広く町内外に開かれたものにした。
・具体的にはツルセンターの設置目的と連携しながら広く機能を充実・発展させるため町内外からより多くの参加と支援を求める必要から関心を持つ協力者の自主的な会員制度による組織とした。

会則の見直し

これら組織化の見直しに伴い会則を改正する

阿寒町タンチョウ鶴愛護会　会則

（名称及び事務所）

第1条　この会は、阿寒町タンチョウ鶴愛護会と称し事務所を阿寒国際ツルセンター内に置く。

（目　的）

第2条　この会は、タンチョウをはじめとするツル類の保護活動を行うとともに、阿寒国際ツルセンター（以下「ツルセンター」という。）が行う事業活動に協力し、ツルの保護とツルと共存する地域の発展に寄与することを目的とする。

（事　業）

第3条　この会は、前条の目的を達成するため、ツルセンターとの緊密な連携のもとに、次の各号に掲げる事業を行う。

(1)　タンチョウの給餌、監視など保護活動に関すること。
(2)　ツルに関する学習会、展覧会その他の催しを開催するほか、他の行うこれらの催しに協力すること。
(3)　ツルに関する資料を収集するとともに、会報及び解説書等の出版物を刊行、頒布すること。
(4)　ツルセンターの事業に協力すること。
(5)　ボランティアの養成と活用に関すること。
(6)　丹頂鶴音頭の普及およびタンチョウ愛護発祥記念碑の保存に関すること。
(7)　ツルの保護思想を普及するために、オリジナルグッズの開発及び販売活動を行うこと。
(8)　その他、この会の目的達成に必要な事業。

（会　員）

第4条　この会の会員は、一般会員、及び法人会員とし、この会の目的に賛同し、その事業活動に賛同し、その事業活動に参加、支援するもので構成する。

（役　員）

第5条　この会に、次の役員を置く。

(1)　会　長　一　名
(2)　副会長　二　名
(3)　理　事　若干名
(4)　常務理事　一　名
(5)　監　査　二　名
(6)　会　計　一　名

（役員の選出）

第6条　会長、副会長、理事及び監査は総会に於て選出し、事務局長及び会計は会長が委嘱する。

（役員の任期）

第7条　役員の任期は二年とする。ただし再任は妨げない。
2　補欠又は増員により選出された役員の任期は前任者又は現任者の残任期間とする。

（役員の職務）

第8条　会長は、この会を代表し会務を総理する。
2　副会長は、会長を補佐する。
3　常務理事は、会長の職務を代行する。
4　監査は、会計及び業務の執行状況について監査する。
5　理事は、この会の運営及び事業等を推進する。
6　事務局長は、この会の事務を掌る。
7　会計は、この会の経理事務を掌る。

（事務局及び職員）

第9条　この会の事務を処理するため事務局を設け、職員を置くことができる。
2　職員は会長が委嘱し、庶務、会計及び販売活動に従事する。

（顧　問）

第10条　この会に顧問を置くことができる。

2　顧問の委嘱については、役員会にはかり会長が決定する。

（会　議）

第11条　この会の会議は、定期総会、臨時総会、役員会とする。

2　定期総会は、年一回会長が招集し、事業計画、事業報告、予算、決算、役員の選任、会費の額の決定、会則の変更、その他重要事項について審議決定する。

3　臨時総会は、会長が必要と認めたとき、又は会員の三分の一以上の要求があったときに会長が招集する。

4　総会は、一般会員、及び法人会員をもって構成する。

5　役員会は、会長が必要と認めたときは臨時開催することができる。

6　会議は、出席会員により成立する。また議事は出席会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

（会　費）

第12条　この会の年度会費は次のとおりとする。

(1)　一般会員　一口　二〇〇〇円

(2)　法人会員　一口　二〇〇〇〇円

（役員及び職員の報酬）

第13条　この会の職員には報酬は支給しない。ただし費用を弁償することができる。

2　常勤の職員は、有給とすることができる。

3　職員の賃金及び旅費等の支給は別に定める。

（経費及び会計年度）

第14条　この会の経費は、会費収入、寄付金、補助金事業収入その他の収入をもって充てる。

2　この会の会計年度は、毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日、終わる。

（委　任）

第15条　この会に定めるもののほか、本会の運営に必要な事項は、役員会の決議を経て会長が別に定める。

（付　則）

(1)　この会則は、昭和40年11月30日から施行する。

(2)　この会則は、平成3年4月24日から一部改正して施行する。

(3)　この会則は、平成8年4月5日から全部改正して施行する。

(4)　この会則は、平成10年4月22日から一部改正して施行する。

(5)　この会則は、平成11年4月26日から一部改正して施行する。

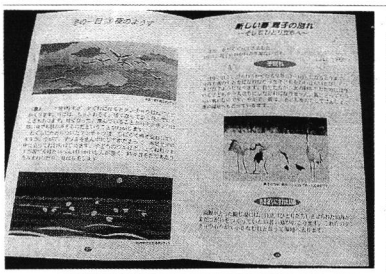
(6)　この会則は、平成14年4月24日から一部改正して施行する。

郷土読本「タンチョウ」

阿寒町ツル愛護会が作製

【阿寒】阿寒町ツル愛護会（吉田勝美会長）はこのほど、郷土読本「タンチョウ」―阿寒の里のなかまたち―を製作。同町の小中学校などに配布した。

読本は子供たちに一年を通したタンチョウの生活を理解し、自然保護の大切さを身をもって知ってもらおうというもの。製作されたのは三千部。児童、生徒約八百人が本を手にした。



美しいちぎり絵が彩り

A5版の小冊子は、全三十六。巣作りと産卵の春からヒナが誕生する夏、秋と冬のタンチョウの生活など、四季折々のタンチョウを描きだしている。このほかにもタンチョウが住んでいる湿原、寿命や生息数、人工給じ、阿寒町とタンチョウとのかかわりなども細かく記されており、タンチョウの生活が詳しく理解できる。

挿し絵に美しい「ちぎり絵」が用いられていることも特徴のひとつ。タンチョウが夕焼け空を飛ぶ姿や羽づくろいしている姿など、ちぎり絵は同読本に彩りを添えている。

本を製作した同愛護会の小林靖之事務局長は「この本でツルの生活を理解してもらえるとともうれしい。これをきっかけに子供たちにも、自然保護の心が芽生えるのではないか」と話している。

同読本は阿寒国際ツルセンターで販売されている。

このほど作製された郷土読本「タンチョウ」

冬の間、なぜ人里にやってくるようになったのでしょう。

阿寒民話――ツルふぶき

タンチョウが人里にやってくるようになったのは、昭和25年のある出来事から始まるのです。

それは、阿寒の民話ツルふぶきの中で語られています。

《ツルふぶき》

昭和25年の冬のこと、農業をしていた山崎定次郎は雪のなかにくちばしを突っ込んだままじっとしているツルを見かけた。

（はておかしいな）と思い雪をこいでツルにちかづいた。ツルをだきかかえると、ふるえがつたわってくる。体はおどろくほどやせていた。

冊子・タンチョウ「阿寒の里のなかまたち」より
（A５版・30ページ）

阿寒町タンチョウ鶴愛護会
平成９年３月発行

平成九年度

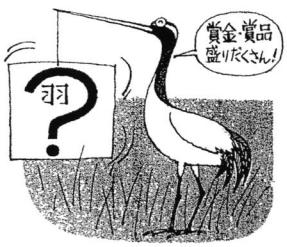
4～	会員の募集に努める
5～10・1	会報（鶴群）の発行（第五～十号） 第一回ツルクイズ応募開始（毎年度実施予定） ・タンチョウの保護思想の普及と阿寒のＰＲ
10	タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
12	タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（～2月）
12・1	タンチョウ生息状況一斉調査への協力
2・14	阿寒丹頂の里写真フェア'98を町教育委員会と共催で開催（～15日）
3・7	第二回タンチョウ観察会の開催（阿寒町教育委員会と共催） ・タンチョウの観察と冬の一日のくらしについて学ぶ

ロ タンチョウの「数あてクイズ」はじまる

「阿寒丹頂の里・鶴クイズ」

阿寒町タンチョウ鶴愛護会では、来年一月一日に阿寒丹頂の里（町上阿寒）に飛来するタンチョウの数を当てる「第一回鶴クイズ」を実施、回答を待っている。

タンチョウの町を全国にアピールするのを狙いとしている。一月一日の午後一時に阿寒国際ツルセンター分館の給餌場にいるタンチョウの数を当てる。正解者には（多数の場合には抽選）「丹頂の里・赤いベレー」の宿泊券（二人分）や、同町の特産品三万円分などの賞品が贈られる。



（第一回目の賞）
丹　賞　一名
頂　賞　五名
ラッキー賞　三〇名

応募リーフレットを作成し来館者にＰＲ、また報道機関を通してＰＲにつとめています。

ロ 会員を広く募集

阿寒町タンチョウ鶴愛護会の事業運営の経費は会員の方々からの会費（個人・法人）、寄付金、補助金事業収入によって賄われています。

会員は、会の目的に賛同し、会の事業活動に参加又は支援できる方なら誰でも入会できます。

会費は年度会費です。入金によって会員となります。

会員になりますと、会の活動に参加できる他、会が発行する会報やツルに関する資料のほか国際ツルセンターの事業案内などの情報をお届けいたします。又、グッズ購入の時５％を割引き販売いたします。

ロ 阿寒丹頂の里写真フェア'98

二月十四・五日にわたって開催された写真フェアは写真関係各社の協賛と多くの報道機関及びタンチョウ撮影関係の方々の協力のもと実施された。

目的、毎年冬期には丹頂撮影のため当地を訪れるカメラマンが他に例を見ない程多数にのぼる。町としてこれを積極的に支援することで今後の広報活動に利用、観光客の誘致につなげる。

両日の内容、カメラ無料診断の実施、機器説明会、講演会の実施、写真展を行った。

（タンチョウ保護監視事業
ねぐらへの立入禁止看板設置）

平成十年度

5～ 会報(鶴群)の発行(第十一～十六号)
7・7 ・阿寒町ふるさと祭りに協力
8・13 ・町内盆踊り大会に協力
8・29 ・よさこいほろろん祭り・協賛
9・25 タンチョウ保護思想及び阿寒丹頂の里のPRをねらいとして、第二回ツルクイズを開始
9・28 第二回ツルクイズ応募開始
10 愛護会吉田勝美会長、賀茂鶴酒造株式会社を表敬訪問される
10 タンチョウ保護増殖事業(給餌事業)を町の委託を受け実施(～3月)
12 タンチョウ監視事業を町からの委託を受け実施(～2月)
12・1 タンチョウ生息状況一斉調査への協力
12・20 タンチョウ観察ガイドを作成発行・どんな行動が見られるかな?〈愛護会・ツルセンター編集〉
2・13 第二回阿寒丹頂の里写真フェア'99実施(～14日)
3・8 第三回タンチョウ観察会を開催〈標識鳥のお話・タンチョウの観察〉丹頂鶴音頭の普及につとめる

ロ丹頂写真フェア'99＝カメラ診断や講演も

「阿寒丹頂の里写真フェア'99」は二月十三～十四日の両日阿寒国際ツルセンターを主会場に開催。今年ははじめてフォトコンテストを実施したほか、無料のカメラ診断、タンチョウの生態などについての講演などが行われた。同フェアはタンチョウの保護に関心をもってもらうとともに、カメラマンなどの来訪者を増加させるため、町タンチョウ鶴愛護会と町教委が実施した。

阿寒が丹頂の里として全国的に有名になったことはアマチュアカメラマンが発表した写真の功績は大きく、この功績を評価するためにも、カメラマンの作品発表の場として新たにフォトコンテストを実施した。

コンテストでは著名な動物写真家・田中光常さんが審査委員長を務め、作品は分館に展示された。又会場では昨年に引き続き協賛メーカー協力を得て無料カメラ診断やタンチョウの生態や撮影技術を学ぶ「丹頂セミナー」が開かれたほか、プロ写真家の和田正宏さんが「湿原の四季―撮影のポイント」をテーマに技術指導も行われた。

フォトコンテストの最優秀賞には滝沢芳宣さんが、優秀賞には竹林修さんが受賞された。

(審査委員長　田中光常さんからの講評)

(愛護会・吉田勝美会長から受賞を受ける入賞者)

ロ第三回タンチョウ観察会(参加者十名)

三月八日好天に恵まれ絶好の観察日和になる。今回は標識をつけたタンチョウをテーマにし、センターの松本研究員からスライドを使ってお話を聞く。

そのあと、分館で標識鳥の観察をし、保護についての理解を深めた。

給餌場(野生のタンチョウを観察する参加者)

平成十一年度

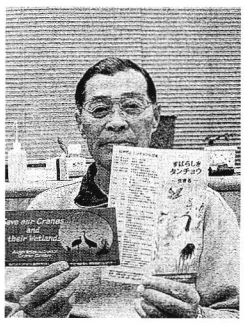
4～5 阿寒国際ツルセンター館長に正富宏之氏就任
5～7・7 会報（鶴群）発行（第十七～二十二号）
7・7 よさこいほろろん祭り・阿寒町ふるさと祭りに於て丹頂鶴音頭を披露（～8日）
10・1 第三回ツルクイズの応募開始
・タンチョウの保護思想と阿寒町のPR
10 タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
10・25 タンチョウリーフレット作製配布・五〇〇〇部
・すばらしきタンチョウ＝生きるツルステッカー作製配布・販売
・私たちのタンチョウと自然を守りましょう
12・1 タンチョウ生息状況一斉調査協力
12 タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（～2月）
2・12 阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇〇実施（～13日）
3・11 第四回タンチョウ観察会の開催

□タンチョウリーフレット発行

タンチョウをよりわかり易く－好評

阿寒町タンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）は、タンチョウの保護や生態などをコンパクトにまとめたリーフレットを製作した。A4版の4つ折りで「すばらしきタンチョウ～生きる」を製作し来館者に配布しタンチョウへの認識を新たにしてもらうことを強調した。

又「タンチョウと湿原を守る」ステッカーも製作し販売をしてタンチョウ保護のために役立てる。



北海道に生息するタンチョウをわかり易くまとめたリーフレットとステッカー

□阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇〇

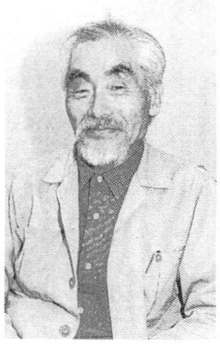
阿寒町教育委員会、阿寒町タンチョウ鶴愛護会、古きよき仲間たちの会（丹頂撮影グループ）の三者において、写真フェア実行委員会を構成し、阿寒町をはじめ多くの後援とカメラメーカーなどの協賛をいただき二日間にわたり盛大に実施できた。

①丹頂フォトコンテスト
・応募者三九名　応募数一一五点
・審査委員長　田中光常氏　他委員五名
・最優秀賞　滝沢芳宣さん
・優秀賞　佐藤冨喜雄さん
他入選五点、佳作八点を観察センターに展示

②丹頂セミナー
・講師　正富宏之氏＝タンチョウの保護と未来
・講師　林田恒夫氏＝四季のタンチョウを撮る

③丹頂撮影体験
・写真協賛メーカーによる機材・フィルムの提供

④入館者へのサービス
・二日間にわたり甘酒とお汁粉の無料提供



名誉館長に就任した正富教授

□正富教授が名誉館長に就任

国の特別天然記念物タンチョウの生態を調査研究し保護に役立てるため、三年前にオープンした阿寒国際ツルセンターの名誉館長に、今年四月から専修大学北海道短期大学の正富宏之教授が就任。

このツルセンターを、タンチョウ、自然、人間の関わりを考える拠点にしていきたいと抱負を語る。（北海道新聞記事より）

撮影体験コーナー

入賞者表彰
会長（右）より滝沢氏（左）へ

平成十二年度

5～7　会報（鶴群）発行（第二十三～二十八号）
ツルセンターとの連携事業としてボランティア募集、受け入れる
・ヒナの誕生に伴いコスチューム飼育に携わる。多くの学生が参加する
8　センターの協力を得てTシャツ作製販売
9・1　よさこいほろろん祭りに協賛
2　PRの一環として丹頂鶴音頭を披露
・コスチューム姿でヒナの誕生を祝う
9・25　第四回ツルクイズの応募開始
10　タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
12・1　タンチョウ生息状況一斉調査への協力
12　タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（～2月）
12　タンチョウリーフレット、観察ガイドを増刷
1・21　タンチョウフェスティバル実行委員会による丹頂結婚式が行われる－分館にて
2・18　阿寒丹頂の里写真フェア二〇〇一実施（応募数六十一点）
2・25　第五回タンチョウ観察会の実施
・ゲーム、クイズ、観察を内容とした祭りの原点となっている丹頂鶴音頭にタンチョウのコスチュームを着た職員が披露した。

□初の人工ふ化に成功

阿寒国際ツルセンターに於て人工ふ化によって二羽のタンチョウが誕生する。
一羽目　十二年五月二十一日・十六時四十分誕生♂　カンタ
二羽目　十二年六月二十三日・十六時三十五分誕生♂　クルル
命名は広く募集した中から付けられた。

〈コスチューム飼育〉
コスチュームの親から、自然界の危険をいろいろと教わる　カンタ（左）とクルル（右）
12.11. 1

□コスチュームで披露＝よさこいほろろん祭り

「丹頂鶴音頭」をアレンジした踊りやよさこいを通して鶴の愛護や自然保護、地域の和を大切にしようという阿寒ほろろん祭りが九月一～二日の両日多目的運動公園で開かれた。五回目となる今年はひなの誕生に合わせ、

〝14回目・ツルを見習いずっと仲良く道内外の３組愛誓う〟
〈タンチョウフェスティバル実行委員会主催〉
2001. 1 .21　観察センターにて
－北海道新聞より－

□阿寒丹頂の里写真フェアニ〇〇一

丹頂フォトコンテストの表彰式が二月十八日観察センターで行われた。

応募者－28名
応募数－61点
最優秀賞
菊田吉紘さん
優秀賞
伊藤秀雄さん
入選　三名
佳作　五名
（写真コンテスト審査のようす）

平成十三年度

5～7	会報（鶴群）発行（第二十九～三十四号） 阿寒ふるさと祭りに於て丹頂鶴音頭で楽しむ 阿寒ほろろん祭りに於て丹頂鶴音頭披露・協賛 ・今年度から「阿寒ほろろん祭り」と改める
8・26	第六回タンチョウ観察会を開催（二十三名参加） ・ビオトープに於て湿原でくらすタンチョウの生活を模擬体験する
9～10	第五回ツルクイズ実施（応募数一一一〇通） タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
11・11	第七回タンチョウ観察会を開催（二十名参加） ・給餌場で見られるツルの行動他
12	タンチョウ保護監視事業を町の委託を受け実施（～2月）
12・1	タンチョウ生息状況一斉調査協力 第一回タンチョウイラスト展開催（～3月）
2・24	第八回タンチョウ観察会を開催（十八名参加） ・来て見て発見、タンチョウのヒミツ 学校におけるタンチョウについての学習活動にツルセンターと連携のもと支援

□第六回親子自然観察会実施（8月26日）

タンチョウの生態を学ぶ、親子自然観察会には町内や釧路市から集まった二十四人がビオトープにおいて夏のタンチョウの生活をゲーム形式で学んだ。

「タンチョウの成鳥は二年に一度羽が生えかわり約二カ月間は飛べなくなる」と紙芝居で説明。ゲームでは胴長をはいたタンチョウ役と靴のキツネ・カラス役に分かれ鬼ごっこ。池に入れば飛べなくても外敵から身を守ることを実感した。又自然界での食べものについても説明をうけた。

「トンボ食べるの？」

おやこ自然観察会に24人

ゲームで学んだタンチョウの生態

遊びながら、
タンチョウの生態を学ぶ参加者

□阿寒のコスチューム飼育国内一号・カンタ死亡

昨年五月二十一日生まれた雄のカンタ。七月七日ケージの中でキツネに襲われ死亡しているのを確認された。

カンタはキツネの警戒法を習っていなかったためとか…残念なこと。大きな課題を残してくれました。

□初のタンチョウイラスト展開く（12月～3月）

―阿寒国際ツルセンターで

タンチョウ鶴愛護会と教育委員会の共催で「阿寒タンチョウの里イラスト展」を開催。阿寒のシンボル的存在のタンチョウを身近に感じながら観察し、愛護の気持ちを持ってもらおうと企画し、町内や同愛護会の会員、センターを訪れた人々から応募した。

□阿寒ふるさと祭りで「丹頂鶴音頭」披露

恒例の阿寒町のイベントである「ふるさと祭り」の会場に於て、来場した多くの人々が愛護会の半てんを着て楽しく踊りイベントを盛り上げた。

にぎわいをみせたふるさと祭り
丹頂鶴音頭を踊る参加者

□「丹頂鶴音頭」を現代風にアレンジ、踊る

阿寒ほろろん祭り二〇〇一（8月24～25日）昨年までの「阿寒よさこいほろろん祭り」から「阿寒ほろろん祭り」とし、四一チーム二千人が集まり阿寒最大のイベントとして開催され、特別企画のプログラムの中に「丹頂鶴音頭」が位置づけされ披露された。

平成十四年度

4・2	タンチョウリーフレットの作製、配布
5～	〈すばらしきタンチョウ＝育てる〉会報（鶴群）発行（第三十五～四十号）
7～	ボランティアの募集とその受け入れ・コスチューム飼育をツルセンターと連携し実施（八名受け入れ）
8・31	第九回タンチョウ観察会開催・湿原でのタンチョウの子育てとそのくらし紙芝居
9～	第六回ツルクイズ実施（応募数一一六一通）
10	タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託を受け実施（～3月）
12・1	タンチョウ生息数一斉調査への協力
12	タンチョウ保護監視事業を町の委託をうけ実施（～2月）
12	第二回タンチョウイラスト展開催（～3月）
12・15	第十回タンチョウ観察会の開催（十八名参加）・幼鳥の給餌場での生活とその観察・紙芝居
3・23	第十一回タンチョウ観察会（二十六名参加）・子別れのお話と自立した幼鳥の観察及び紙芝居

ロボランティアとしてコスチューム飼育

愛護会ではひなの誕生によりボランティア（ツルセンターとの連携事業）を八名受け入れコスチューム飼育に携わってもらう。

ロ体験文　愛護会々員　福田晋治さん（大阪府）

私は今夏コスチューム飼育のボランティアに参加させていただき貴重なそして楽しい経験をさせて頂きました。タンチョウとの出会いは学生時代に旅行で訪れた十数年前のこと。釧路湿原をブラブラ歩いていた時一羽の丹頂が頭の上を飛んでくれました。青空を背景に悠々と飛んでいたタンチョウの姿が印象的で、以来毎冬ごとに釧路を訪れ、写真の対象はタンチョウそのものになり深く興味を持ちはじめました。そんな中愛護会の会報、TV番組でコスチューム飼育にボランティアとして参加できることを知り是非参加したいと思いました。大阪でサラリーマン生活をする私にとって参加できるのは十日程度。不安がありましたが夏期休暇を利用して参加することになりました。参加して最初に驚いたのはヒナに携わる仕事をする都度行う手や靴の消毒、エサや糞の計量、その他にもヒナを人に慣らさない為の気配りなど、こまごました作業が多いことでした。初日からコスチュームを着てヒナと一緒に過ごさせていただいた事も驚きでした。短期間のボランティアに来て直接ヒナと関わる仕事は嬉しい反面、緊張の連続でした。しかし、歩く自分の後ろをトコトコとついて来たり、パペットの先をつついてエサをねだるヒナの姿を見るとすべてを忘れてしまうようでした。やがてヒナの様子を観察できる余裕をもてるようになりました。そうすると、二羽のヒナの個性も見えるようになり、より愛着がわくと同時にヒナの行動に対する疑問や、自分の動作についての不安も感じます。本当に奥の深い、難しい仕事だと思いました。

十日間、スタッフの方々や他のボランティアの方たちに感謝いたします。二羽のヒナが元気に成長し野生生活に順応できる日を楽しみにしています。（八月十八日）

ロ見て、聞いて、体験して

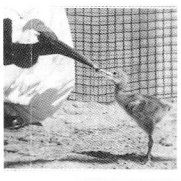
タンチョウの子育てを知る＝観察会「ゲームなどを通して、タンチョウの子育てを知り、タンチョウとそのくらしに関心を持たせる」を目的に八月三十一日、子どもから大人まで十八名の参加者は、観察会に携わるボランティアやセンターの職員の指導のもと元気に活動する。

キツネからヒナを守るゲーム
楽しく元気に活動する

〈内容〉①紙芝居を見る　②コスチュームを着て親のしぐさを似る　③ヒナの成長（身長の伸び、エサの一日の量等）　④ゲーム（キツネに気をつけろ）　⑤タンチョウの子育ての様子をビデオで見る　（八月三十一日）

ロタンチョウリーフレット発行

すばらしきタンチョウ・生きるに引き続き今年度は「育てる」を発行した。コスチューム飼育の様子がおりこまれています。



平成十五年度

5～8・22	会報（鶴群）の発行（第四十一～四十六号） 阿寒ほろろん祭りに於て、丹頂鶴音頭を披露・協賛 ・今年も町内会婦人部各位の協力を得て、盛大に踊られた（～23日）
9～10	第七回ツルクイズ実施（応募数一二八六通） タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託をうけ実施（～3月）
12・1	タンチョウ生息状況一斉調査への協力 ※阿寒町で今冬最大三百羽の越冬数を確認
12	タンチョウ写真交流展開催（～3月） ・それぞれが撮影したタンチョウの写真を通して、交流し合うと共に来館者へタンチョウの姿を鑑賞してもらう
12	タンチョウ保護監視事業を町の委託をうけ実施（～2月）
12	第三回タンチョウイラスト展開催（～3月） 〈応募数九十四点〉
12・15	第十二回タンチョウ観察会開催（三十三名参加） ・給餌場へ集まるまでの旅の様子（疑似体験を通して学ぶ）
3・23	第十三回タンチョウ観察会開催 ・春、湿原へ戻る頃のタンチョウの様子を紙芝居、ゲーム、観察を通して学ぶ

□ **給餌事業　タンチョウの元気の源は魚**

阿寒丹頂の里で越冬するタンチョウの数は年々増加中で、現在最大三百羽を数えるまでに至っている。

越冬中の十月から三月までトウモロコシ（デントコーン）と十二月から二月まで活魚（ウグイ）を与えている。

給餌人は現在も「タンチョウが可愛くて」という山崎定作さんが毎日続けている。

タンチョウが飛来する前の早朝にデントコーンを、午後二時にはウグイを与えている。

活魚（ウグイ）を与える山崎定作さん

魚を給餌しているのは阿寒の給餌場のみで広く知られている。ウグイを横取りするオジロワシ、時にはオオワシやキツネもやってくるため、この時刻給餌場の光景を求めて多くのカメラマンで賑わっている。

□ **タンチョウ親子観察会（16年3月7日）**

〝ツルのダンスを見て大喜び〟参加者19名

今年度第2回目の観察会を開催。今回のテーマは、「もてもてのツルはどんなツル?」春、繁殖期にはいるタンチョウの様子を自作の紙芝居、ゲーム、給餌場での実際の観察を通して理解を深めることができた。

この時期、多くのタンチョウがダンスを盛んに披露し観察した参加者を喜ばせる。タンチョウの理解とこれからの保護にむけて更めて考えることができた有意義な観察会であった。

□ 阿寒町などの給餌場に飛来する国の特別天然記念物のタンチョウの約三割が、寄生虫のコクシジウムに感染していることが環境省の調べでわかった。タンチョウは、コクシジウムの卵が付着した餌を食べることで感染し、弱った成鳥やヒナの場合は気管支炎などで死ぬことがある。東京の上野動物園など飼育下にあるタンチョウの感染例はあるが、野生での感染が確認されたのは全国で初めて。人間には感染しない。昨年五月阿寒国際ツルセンターで生まれた三羽のヒナが気管支炎を発症。同センターの獣医師らが調べた結果コクシジウムに感染していることが判明。ヒナは抗生物質などの投与で回復している。給餌場は過密化しており一羽が感染することで一気に拡大するおそれがあり、事態を重く見た環境省は専門家で協議する。

（北海道新聞・15年3月報道より）

野生タンチョウに寄生虫

阿寒町など飛来の3割

ヒナが死ぬ可能性

□ **過密解消へ分散地必要**

生息域拡大で電線接触、列車衝突が多発

釧路市動物園にけがや死がいで保護、収容されたタンチョウは10月22日までに23羽、昨年同期の2倍近くに。電線接触、列車や自動車に衝突するケースが多い。

タンチョウ生息数は、人工給餌などで年々増加、一月の調査では過去最多の九〇八羽、●この半世紀で約27倍に急増。このことにより生息地が過密になり、国道など人間の生活環境付近に生息域が拡大。事故に遭う確率が高まったとみられる。動物園ではタンチョウの数が増え人里に生息域が拡大しているのが大きな原因と分析している。

（北海道新聞・15年10月報道より）

平成十六年度

5～ 会報（鶴群）の発行（第四十七～五十二号）

9～ 第八回阿寒丹頂の里ツルクイズ実施・応募総数一〇三七通　阿寒丹頂の里で越冬するタンチョウのPRと保護思想をねらいとして行う

10 タンチョウ保護増殖事業（給餌事業）を町の委託をうけ実施（～3月）

12 タンチョウ保護監視事業を町の委託をうけ実施（～2月）

12・1 タンチョウ生息状況一斉調査への協力

12 第四回タンチョウイラスト展開催・応募数一八六点（～3月）

12・3 タンチョウの塒への「立入禁止」看板の設置（新規・補修を行う）

12 タンチョウ写真交流展（作品点数二十五）観察センターに於て、タンチョウを愛する人々の写真を持ち寄り展示し交流を行う（～3月）

12・26 第十四回タンチョウ観察会の実施・タンチョウカルタ及びゲームを通してタンチョウの体や生態を学ぶ

華やかに阿寒ほろろん祭り

合併記念で3首長も

ステージには50チーム参加

阿寒ほろろん祭り2005（実行委主催）が26、27の両日、阿寒町総合運動公園特設会場で開催された。10周年の節目となった今年は、3市町合併記念の冠もつき、それぞれの首長が駆けつける中、華やかなステージが繰り広げられた。

正調丹頂鶴音頭を披露する地元女性たち

阿寒町に古くから伝わる丹頂鶴音頭に改良を加えた楽曲で「ほろろん演舞」を披露しあう、恒例の祭り。初日の27日は、台風11号の影響であいにくの霧雨模様となったが、音と光があふれるステージには2日間で約50チームが参加した。

初参加の伊東良孝釧路市長は「歴史と伝統を大事にした新しい市を築きましょう」と呼び掛け、高野武音別町長は「合併が決してバラ色ではないが、新市と地域の発展にともに汗を流しましょう」と話し、地元の中島守一町長は「合併は足し算ではなくかけ算。良いところを掛け合わせ、力を合わせて発展していこう」と10月11日に迫った合併を祈念していた。

10周年の節目を迎えた実行委員会の早坂勝則委員長は「新市になってもさらに祭りを盛り上げて行きたい」とアピールしていた。

郷土芸能 丹頂鶴音頭 踊りの輪、広げよう

釧路市阿寒

丹頂ほろろん会発足

多くの参加を呼び掛け

40年の歴史が詰まった丹頂鶴音頭の浴衣を手に、丹頂ほろろん会への入会を呼び掛ける会員

【釧路市阿寒】阿寒地区の郷土芸能として、長年踊りや運動会などで親しまれてきた「丹頂鶴音頭」の保存会「丹頂ほろろん会」がこのほど発足した。合併効果をねらって旧釧路市内でも普及させ、今後は定期的に踊りのけいこも始める予定。来年の制定40周年を前に、タンチョウ同様、愛好者らが郷土芸能の本格的な「保護」に乗り出した。（古川路子）

丹頂鶴音頭は、阿寒町タンチョウ鶴愛護会（現釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会）が1967年に制定。踊りは優雅に舞うタンチョウの姿をイメージしたもので、音頭は「ホロロン　ホロロン　イヤコーコ」とツルの鳴き声を表現している。現在は、丹頂鶴音頭を現代風にアレンジした音楽と踊りの祭典「阿寒ほろろん祭り」が行われており、中高生をはじめ若者にも親しまれている。

郷土芸能は保存会が中心となって活動している地域がほとんどだが、丹頂鶴音頭には保存会がないため、以前から各種イベントへの参加や愛好者らを練習で集めることに苦慮していた。また合併により、旧釧路市内の町内会から「丹頂鶴音頭を教えてほしい」との要望もあったことから、踊りの輪を広げようと愛好者らが保存会を立ち上げた。

現在の会員は、阿寒地区で40人ほど。丹頂鶴音頭に約20年間携わってきた鶴田眞智子さん（71）は「これからは、格好良い丹頂鶴音頭を自指します。男性や初心者の方でも大歓迎。若い人にもどんどん踊りの輪に加わってほしい」と参加を呼び掛けている。

1次募集の締め切りは12月31日まで。申し込みや問い合わせは、阿寒国際ツルセンター内の釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会の小林靖之事務局長（86－4011）か、同会副会長の鶴田さん（86－3161）へ。

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会として再出発

新会長に吉田守人氏

【釧路市阿寒】1965年からタンチョウの保護・啓発活動を行ってきた「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」が、2006年度から旧釧路市からも役員を選出して、「釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会」として新たなスタートを切った。新会長には吉田守人氏、名誉会長に前会長の吉田勝美氏を選任した。

今年度は、例年通り給餌やタンチョウ一斉調査への協力をするほか、設立時にタンチョウの愛護精神普及のために作られた「丹頂鶴音頭」を、くしろ港まつりで初披露する。

新役員は次の通り。

▽名誉会長　吉田勝美▽顧問　金子信治▽会長　吉田守人▽副会長　鶴田眞智子、早坂勝則、髙橋良治

（古川路子）

18.7.8（釧）

平成十七年度

5～8	会報の発行
10・1	丹頂鶴音頭の普及・ほろろん祭り
	阿寒町タンチョウ鶴愛護会設立四十周年記念事業実施
	一、四十年の歩み「記念誌の発行」
	二、四十周年記念式典・祝賀会（於・阿寒町公民館）
10	タンチョウ保殖事業（給餌）（～3月）
10～11	第九回ツルクイズの実施
	タンチョウ観察会及びイラスト展の開催（～3月）
11	第三回タンチョウ写真交流展（～3月）
12・1	タンチョウ一斉調査への協力
12	タンチョウ監視事業（～2月）
通年	ボランティアの募集と養成
通年	リーフレット作成配布
通年	学校教育活動への支援
通年	他団体の催しへの協力
5	タンチョウ調査保護連盟によるタンチョウ生息調査の結果を発表
	〈一〇〇三羽確認〉
	――17年1月調査から――

釧路新聞掲載

さらなる飛躍を誓う

阿寒町タンチョウ鶴愛護会 設立40周年を祝う

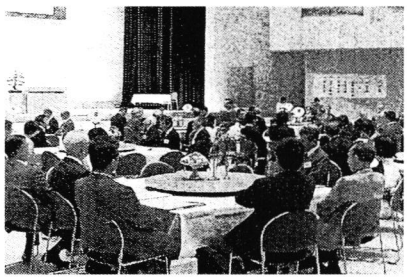
「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」（吉田勝美会長）の設立40周年記念式典・祝賀会が1日、同町公民館で行われ、関係者らのこれまでの労をねぎらうとともに、今後の発展を期した。

式典には中島守一同町長をはじめ関係者ら約100人が出席し、吉田会長のあいさつに次いで、タンチョウの保護活動などに尽力した11人に感謝状を贈呈した。

吉田会長は「11日には釧路市と合併するが、愛護会としてもこれまでの歴史と伝統をしっかり引き継ぎながら大きな観光都市として羽ばたけるよう活動していきたい」と決意も新たにしていた。（木村啓司）

感謝状贈呈者は次の通り（敬称略）

石井泰行賀茂鶴酒造会長、金村敦夫同副会長、河本清同元専務、白髪良一日本清酒社長、加藤秋霜（書道家）、岩松健夫（写真家）、正富宏之専修大名誉教授、早坂勝則阿寒ほろろん祭り実行委員長、坂本淳元丹頂フェスティバル実行委員長、吉田勝美阿寒町タンチョウ鶴愛護会会長、金子信治同副会長



式典の後、祝賀会で旧交を温めた

北海道新聞掲載

タンチョウ保護「感無量」の40年

愛護会が記念式典

【阿寒】国の特別天然記念物タンチョウの保護活動に地域ぐるみで取り組んでいる釧路管内阿寒町のタンチョウ鶴愛護会（吉田勝美会長）の設立四十周年記念式典が一日、町公民館で開かれた。

愛護会は生息数減少が懸念されていた一九六五年、有志で結成した。給餌や飛来地の監視のほか「丹頂鶴音頭」のレコード化などタンチョウ保護運動にも力を入れている。会員は現在約百五十人。

式典には約百人が参加。吉田会長が「節目の年に生息数が千羽を超え、感無量。今までの知識や経験を生かし、保護活動にさらに邁進していきたい」とあいさつ。祝賀会では地元の高校生によるツルとカメの長寿を祝う謡曲や阿寒町女性の会の優雅な「丹頂鶴音頭」の踊りも披露され、節目の年を祝った。

「丹頂鶴音頭」も披露された記念祝賀会

平成十八年度

5・12	初代会長吉田勝美氏退任 新会長に吉田守人氏就任
5・12	会の名称変更 阿寒タンチョウ鶴愛護会を釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会とする
8・6	第一回タンチョウ学習会 （タンチョウの食べ物）
8・11	賀茂鶴酒造㈱表敬訪問 （吉田守人会長）
8・26	阿寒ふるさとほろろん祭りに丹頂鶴音頭披露
10・1	タンチョウ保護増殖事業（委託） 給餌事業―給餌人・山崎定作氏
10・1	第十回ツルクイズ実施 応募総数八〇六通（～12末）
11・11	丹頂講演会・講師　高橋良治氏 テーマ「タンチョウの子育て」
11・19	第二回タンチョウ学習会 （タンチョウの冬のくらし）
11・19	「丹頂ほろろん会」発足 初代会長・鶴田眞智子氏
11・20	タンチョウイラスト展開催 （展示12・26～2・28）
12・1	タンチョウ保護監視事業（委託） 塒他巡視―監視人・西川精作氏
12・5	タンチョウ一斉調査への協力
12・9	初代会長・吉田勝美氏逝去
奇数月	会報「鶴群」の発行（59～64号）

阿寒タンチョウ鶴愛好会

市全体の組織に

"釧路市"の冠を付け再スタート

会長に吉田守人さん

「阿寒タンチョウ鶴愛好会」はこのほど、新たに"釧路市"の冠を付けて再スタートを切った。40年にわたって阿寒のタンチョウ保護活動をけん引してきた団体で、市町村合併で釧路市となったのを機に市全体の組織とするため規約を改正した。設立以来、40年間、会の先頭に立ってきた吉田勝美会長は名誉会長、新会長には会員の吉田守人さんが就任した。（山本繁寿）

吉田守人新会長

同会は1965年11月、町教委の教育委員会が中心となって発足。以来40年間、「全町民挙げて」を合言葉にタンチョウの保護活動を重ね、昨年には節目の式典を行った。

新組織には新たに釧路市から矢野忠治連合町内会長、平間育子女性団体連絡協議会長、大西英一武佐の会会長、同会が普及に努めている「丹頂鶴音頭」の振り付け指導者でもある花柳寿登芳師らが名を連ねている。

絶滅が伝えられていたタンチョウは、1935年に天然記念物、52年に特別天然記念物に指定されている。阿寒の里に姿を現すようになったのは1949年。翌年、町民の一人がトウモロコシを給餌しようになり、これがタンチョウ保護の第一歩とされている。

57年には阿寒中学校も保護活動に加わり、生徒たちによる観察日記や給餌を行ってきた。こうした町民の活動の結果、釧路地域で確認されるタンチョウは57年の63羽が、5年後には倍の120羽、そして今年1081羽が確認されるまでになった。

新会長で市議会議員でもある吉田さんは「これまでの保護活動を引き継ぎ、また保護活動の啓蒙と観光振興にもつながる『丹頂鶴音頭』を普及させたい」と抱負を語っている。

新組織となり40年間務めた会長を退いた吉田勝美さん（右から2人目、写真は昨年のおろろん祭り）

新役員は次の通り。

▽名誉会長　吉田勝美▽顧問　金子信治▽会長　吉田守人▽副会長　鶴田眞智子、早坂勝則（新）、高橋良治（新）▽常務理事兼事務局長　小林靖之▽理事　山崎定作、安藤弘子、柴田雅男、大山昇、橋本貴子、水野晃、坂本淳（新）、松橋圭幸（新）、網野貞則（新）、曽我部不二子（新）、竹本和彦（新）、松実寛（新）、矢野忠治（新）、平間育子（新）、大西英一（新）、花柳寿登芳（新）▽監査　小林正昭、中山三雄

平成十九年度

7・21	第三回タンチョウ学習会（親子）
9・22	阿寒川環境調査（ラフティングによる川下り）
9・29	親と子の学習会・丹頂アート作り
10・1	タンチョウ保護増殖事業（委託）給餌事業開始（～3月末）
10・11	第十一回ツルクイズ実施
10・13	親と子の学習会・ネイチャーゲーム
11・11	ツル笛づくり・タンチョウ学習会
11・11	日本野鳥の会より感謝状拝受
11・12	タンチョウ愛護標語募集（～12月）（応募点数一二七）
11・20	タンチョウイラスト展開催 展示（12・26～2月末日）
12・1	タンチョウ保護監視事業（委託）
12・5	タンチョウ一斉調査への協力
12・22	親と子のタンチョウ学習会「食物連鎖について」
1・20	阿寒川・舌辛川の環境浄化のための植樹計画研修会 講師・新庄久志氏（湿地保全主幹）
通年	「丹頂鶴音頭」の普及 丹頂ほろろん会による普及と保存を目的とした積極的活動
奇数月	会報（鶴群）の発行（65～70号）

釧路新聞　平成19年（2007年）5月22日（火曜日）　第2

市タンチョウ鶴愛護会

環境省の真意を求める

餌付け事業見直しで

新年度事業 意見交換会を据え

釧路市タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は、タンチョウの保護増殖活動の原動力となってきた餌付け事業の見直しを環境省が示唆していることから、その真意をただすため同省との意見交換の場を求めることを決めた。タンチョウ愛護発祥の地に誕生した同会は、いわば給餌活動の最前線活動してきただけに「現場の声を届けたい」と、環境省釧路自然環境事務所との意見交換会を新年度事業に据えた。21日開いた総会で承認した。（山本繁寿）

「給餌活動の声を届けたい」

吉田会長

同会が環境省との意見交換を新規事業に位置付けたのは、今年3月に釧路市で開かれた環境省タンチョウ保護増殖分科会（座長・藤巻裕蔵帯広畜産大学名誉教授）で、同省側が給餌を中心とした保護増殖事業の見直しを示唆したため。

保護増殖事業が功を奏し、今年生息数で初めて1000羽の大台が確認されたこと、国の財政難から給餌を続けることが難しくなってきたことから、協議のテーブルにのぼった。国が野鳥に給餌をしているのはタンチョウだけだ。

吉田会長は「環境省の分科会にはわれわれが参加できていない。現場の声を届ける場がないことから、意見交換の場を求めていくことにした」と話す。同会では猟友会なども交えた意見交換を申し込むことにしており、現場と行政の立場から、今後の保護増殖事業の方向性を見出したい考えだ。

財政難から見直しが迫られているタンチョウの給餌

同会は1965年の発足。タンチョウ保護のため、給餌や監視活動、保護増殖思想の普及などを担っており、現在全国の有志158個人、10法人、1団体で構成されている。50年、阿寒町の酪農家が人工給餌に成功し、タンチョウ保護の先駆けとなったことからタンチョウ愛護発祥の地とされている。

平成二十年度

6・5	河川浄化植樹プロジェクトの推進・苗圃として、紀の丘堀氏より三十アール借用
6・11	植樹プロジェクト委員会設立　委員長　小野寺　靖氏
7・9	タンチョウ学習会サマースクール　石アート　バタバタ鶴　9日
7・10	タンチョウアート（石粘土）10日
7・11	タンチョウ凧・紙飛行機　11日
10・1	第十二回ツルクイズ実施　応募総数一〇四八通
10・1	タンチョウ保護監視事業（委託）給餌・丸キビ、ウグイ（～3月）
11・9	苗圃への幼木の移植作業　ミズナラ等二〇〇本
11・12	タンチョウ愛護標語募集（応募　一〇九点）
11・20	タンチョウイラスト展開催（応募　一六〇点）
12・1	タンチョウ保護監視事業（～2月）飛来地及び塒の巡視
12・5	タンチョウ一斉調査への協力
1	タンチョウフォトコンテストへの協賛
奇数月	会報（鶴群）の発行（71～76号）
通年	丹頂ほろろん会による「丹頂鶴音頭」の普及・各種イベントへの参加

阿寒の鶴 愛護会が汗

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は9日、阿寒町上阿寒でドングリ（ミズナラ）の苗畑を作った。苗は2、3年後をめどに阿寒川周辺に移植し、川の浄化を図る。

同会はタンチョウの保護と理解を目的に1965年に設立。今年5月に行った総会で「タンチョウのねぐら河川浄化植樹プロジェクト」（小野寺靖委員長）として、苗作りや植樹を計画している。この日は会員ら10人が1―3年ほどの若木200本とドングリの実500個を採取して苗畑に移植した。同会では数年にわたり苗を育てた後、川周辺に移す方針だ。吉田会長は「苗作りは今後も継続して進めたい。植樹で川を浄化し、タンチョウにとって住みやすい自然の状態に戻したい」と話していた。（河辺由記子）

採取した苗を丁寧に植え替える会員たち（阿寒タンチョウ鶴愛護会提供）

ツルが取り持つ友情

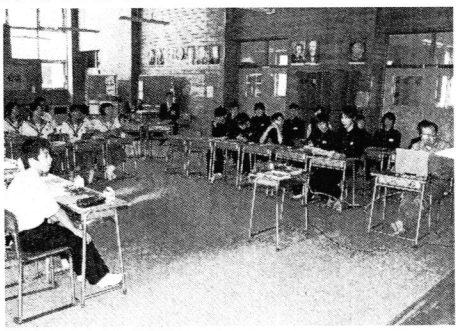
出水市の中学生が訪問

阿寒中学校

ツルを縁に釧路市と友好都市提携を結ぶ鹿児島県出水市の荘中学校と高尾野中学校ツルクラブの生徒16人が22日、来釧し釧路市立阿寒中学校（須藤厚志校長・生徒数121人）生徒と交流した。

出水市の中学生訪問は19年目で、3校の交流は4回目を迎えた。阿寒中は1957年にタンチョウの保護を目的にツルクラブを設立。以来、冬期間はグラウンドに餌場〝ニオ〟を作ったり、環境整備に努めている。現在は、各学年から4人ずつ選ばれる鶴特別委員を中心に活動を続けている。出水市の2校はナベヅルとクロヅル、マナヅルが飛来し生息数調査や保護活動を実施。高尾野中は日本鳥類保護連盟の功労団体として、2007年5月に文部科学大臣奨励賞を受賞した。

阿寒中音楽室で行われた交流会は、互いの自己紹介に続き、それぞれがツルの保護活動や生息数、特徴などを解説。生徒たちはツルが取り持つ友情を深め合っていた。（河辺由記子）



スライドを見ながら互いの活動を紹介する生徒たち

平成二十一年度

5・13	総会・講演会（講師　高橋良治氏） 日本鳥類保護連盟総裁賞受賞記念講演（68名参加）
7・7	苗圃除草作業（植樹実行委員）
10・1	第十三回ツルクイズ実施
10・17	釧路市・岡山友好親善表敬訪問団来釧。交流会に吉田会長出席
11・1	タンチョウ保護増殖事業（委託） 給餌開始（～3月）
11・1	タンチョウイラスト・愛護標語募集開始（～12月）
11・1	苗圃の除草及びミズナラ等の幼木の植樹作業 ミズナラ・桜（約三〇〇本）
12・1	給餌場への飛来オオハクチョウの追い払い開始（紙雷管の音）
12・1	タンチョウ保護監視事業 飛来地・塒の巡視（～2月）
12・5	タンチョウ一斉調査への協力
12・26	第四回タンチョウ学習会 テーマ・タンチョウモビール作り
奇数月	会報（鶴群）の発行（77～82号）
通年	タンチョウリーフレットの配布 すばらしきタンチョウ（三種） 生きる・育てる・一年のくらし 「丹頂鶴音頭の普及」計画的練習とイベントに於ける披露

タンチョウの親子 姿見せる

前後を親に守られ敷地内をゆっくりと進むタンチョウの幼鳥（28日午前11時ごろ）

幼鳥すくすく成長 「静かに見守って」

阿寒・酪農家の敷地に

釧路市阿寒町の酪農家の敷地内に、今春生まれた幼鳥を連れたタンチョウの親子が姿を見せるようになり、そのほほえましい光景がひそかな話題となっている。出現場所の近くには民家が点在しているが、こうした場所での子育てはあまり例がなく、この酪農家の一家は「元気に育ってほしい」と願いながら静かに見守っている。

タンチョウの親子が現れたのは、町内で酪農業を営む50代男性宅の敷地内。この家の次男によると、最初に目撃したのは5月上旬ぐらいで「体長30㌢ぐらいのひなが3羽ヨチヨチ歩き、親がぴったりと寄り添っていた」という。その後親子は毎日のように現れるようになり、「トラクターが近づいてもあまりよけない。こちらが近づくと親が翼を広げて威嚇する」（次男）と、人慣れはしているものの、危険を察知すると体を呈してひなの命を守ろうとするという。

こうして、小さかったひなも約一カ月半たってかなり大きくなり、周囲を警戒するつがいを尻目に、周囲を元気に歩き回っている。家人によると、敷地のすぐ脇には森に囲まれた小川があり、巣はこの近辺にあるらしい。「デントコーンの畑があるので餌には困らない。人もいるし、かえって巣を作るには都合が良かったんじゃないですか」と。

阿寒町の片隅で息づく野生の命。一家は「このまま元気に育って親離れしてほしい」と、幼鳥のすこやかな成長を願っている。（高田薫）

タンチョウ1065羽確認

生息状況一斉調査 総数増、幼鳥は減

釧路支庁

釧路支庁は13日、1月23日に実施した2008年度2回目となるタンチョウの生息状況一斉調査の結果をまとめ、成鳥と幼鳥合わせて1065羽を確認したと発表した。

タンチョウの生息状況一斉調査は、1952年度から毎年同時期に全道各地で一斉に実施され、89年度からは12月と1月の年2回実施している。総数は前年同期に比べ266羽多く、最多だった05年の1081羽に次ぐ過去2番目の記録となったが、幼鳥の割合は8・67％と89年に開始した1月の調査では過去最低だった。

阿寒国際ツルセンターの古賀公也氏は「昨年に比べ天候は不順だったが、主要給餌場では多くの個体が集結し動かなかったという良好な条件だった」と増加の原因を分析。全体的な傾向としては「近年と比較しても幼鳥の割合が低いので、何らかの要因で繁殖状況が悪くなっているのでは」と説明した。（花城護）

平成二十二年度

5・28	河川浄化植樹プロジェクト推進二十二年度事業計画会議
7・11	苗圃の除草
8・19	タンチョウ愛護の碑の清掃・除草
10・1	第十四回ツルクイズの実施（応募数　二一四一通）
10・1	タンチョウ保護増殖事業（委託）給餌（丸キビ・ウグイ（12月～））
10・1	タンチョウ愛護標語募集（応募数　二四一点）
10・24	草刈、除草、幼木の移植
11・1	丹頂イラスト展開催
12・1	タンチョウ保護監視事業（委託）巡視・気象観測（～2月）
11・25	苗圃整備作業協力の二社へ感謝状贈呈 ・K.K.吉岡組様　K.K.小野寺組様
12・5	タンチョウ一斉調査への協力
12・6	鳥インフルエンザ予防対策として空砲によるオオハクチョウの追い（～3月）山﨑一彦氏に依頼 ～環境省からの助成～
奇数月	会報（鶴群）の発行（83～88号）
通年	「丹頂鶴音頭」の普及・保存 ・丹頂ほろろん会による活動
通年	リーフレットの配布（三種） ・来館者への丹頂のPR

阿寒で「タンチョウ感謝祭」

給餌60周年 盛大に祝う

国の特別天然記念物タンチョウへの給餌開始60周年を記念したイベント「タンチョウ感謝祭」（実行委主催）が5日、釧路市阿寒町の阿寒国際ツルセンターで開かれ、給餌の歴史や保護活動の取り組みを学んだ。（谷本雄也）

功労者　山﨑さんに感謝状

タンチョウへの給餌60周年イベントを盛り上げた丹頂鶴音頭

給餌は1950年に町内の故山﨑定次郎さんが、大雪で食べ物を失ったタンチョウのためにトウモロコシを畑にまいたのが始まりとされ、節目の年を祝おうと企画。阿寒ほろろん会が阿寒町の伝統芸能である丹頂鶴音頭を披露、来場者を交えて踊るなど会場を盛り上げた。

定次郎さんから引き継いで、1973年から給餌を続ける長男の定作さん(80)に、釧路市から感謝状が贈られた。定作さんは「これからも体が動く限り続けていきたい」と話した。

トークショーでは釧路市丹頂鶴自然公園名誉園長の髙橋良治さんらが定次郎さんとの思い出を話した。髙橋さんは「人が食べられそうなトウモロコシでも、惜しむことなく餌として与えるなど素晴らしい人だった」と振り返った。

実行委員長で阿寒町タンチョウ鶴愛護会の吉田守人会長は「今後ともタンチョウとのかかわりを強めながら、地域の活性化にもつなげていきたい」と話していた。

ねぐらの整備とハクチョウ対策

阿寒タンチョウ愛護会が総会

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は23日、市阿寒町阿寒国際ツルセンターで2010年度定期総会を開き、今年度はタンチョウのねぐら環境対策事業の一環で、阿寒川と舌辛川の清掃を行うことなどを決めた。

同会はタンチョウ保護の関心と理解を深めようと1965年に設立した。総会では前年度の活動報告に続き、今年度の事業計画について審議。タンチョウのねぐら環境の整備と河川浄化に向けて新たに倒木やごみなど水中の清掃を重点的に行うほか、河川周辺の植樹用の苗木づくりを進めることを確認した。

また、保護増殖活動として、冬期間は引き続き同センターで給餌を実施するほか、生息地の安全確保のため巡回監視を行う。前年度は給餌場に一日150羽を超えるオオハクチョウが飛来し、餌を食べてしまう被害が増大。鳥インフルエンザ感染などの懸念もあるため、環境省や関係機関と協議して対策会議を立ち上げたいとの方針を示した。

さらに、ツルクイズやタンチョウイラスト展、標語募集といった啓発事業や郷土芸能「丹頂鶴音頭」の保存、普及に努める。吉田会長は「ハクチョウ対策やねぐら整備など、関係機関と協議しながら保護活動をしていきたい」と述べた。

（河辺由記子）

タンチョウのねぐら浄化など今年度の事業計画を説明した吉田会長

平成二十三年度

7・17　河川浄化植樹プロジェクト
　除草・苗の手入れ　会員14名
　（三輪建設工業㈱の協力）
11・1　丸キビ給餌（～3・19）
　国立公園等民間活用特定自然環境保全活動（グリーンワーカー）事業（～3・20）
12・1　タンチョウ給餌台検討業務
12・1　活魚給餌（～2・29）
12・1　保護監視（～2・29）
12・5　北海道タンチョウ一斉調査
　第一次調査への協力
12・20　タンチョウ愛護標語募集
　入賞作品決定、展示
12・20　タンチョウイラスト展開催
1・1　ツルクイズの実施
　丹頂の里で羽数確認（十三時）
1・24　タンチョウ感謝祭
　イベントへの協力（～29日）
1・25　北海道タンチョウ一斉調査
　第二次調査への協力

ツルセンター視察

エゾシカステーションも

高橋知事、釧路入り

高橋はるみ知事が15日、釧路市の阿寒国際ツルセンターとエゾシカステーションを視察した。14日に根室市で開かれた北方領土対話集会に出席した後、釧路入りしていた。同センターは、タンチョウの実物大の模型などが屋内に展示されており、ツルの習性や生態などを学ぶことのできる施設で、釧路市動物園の担当者が旧阿寒町とタンチョウの歴史やツルの分布地域などについて説明。高橋知事は担当者からタンチョウが一時絶滅の危機にひんし、現在は1300羽程度まで回復している現状などを聞き、理解を深めた。また、隣接する野外飼育場では、オジロヅルを見学したほか、台湾に無償貸与したタンチョウ「ビッグ」の妹「ムック」と対面した。

阿寒町にあるエゾシカステーションを視察する高橋知事

道がエゾシカの個体数削減を促すために、ハンターを支援しようと設置したシカステーションでは、小松茂道議らが応対。ハンター向けに、エゾシカの出没情報や林道の除雪情報などを集約したり、捕獲個体の搬出支援などを行っている同ステーションについて、高橋知事は「シカとの戦いは知恵の出し合いだが、ハンターの労力軽減を図り、捕獲数の増加につなげたい」と、改めてエゾシカ対策の必要性を述べた。

（三坂郁夫）

ご当地グルメ楽しむ

阿寒町で丹頂の里千年祭

釧路市阿寒町の新しい冬のイベント、第1回丹頂の里千年祭が28日、阿寒国際ツルセンターと道の駅丹頂の里の広場を中心に開催された。ご当地グルメの出店や、鶴の名がつく全国の銘酒を楽しめる特産市などでにぎわいを見せた。

同祭はタンチョウに愛されて千年続きますように一という思いをのせて企画され、昨年3月12、13日に実施される予定だったが、開催予定日の前日に東日本大震災が起きたためやむなく、イベントを中止した。約10カ月ぶりに実施にこぎ着けたこの日は、ご当地グルメのコンテストで上位入賞を続けている北見塩焼きそばも登場。特産のタマネギをたっぷりと入れて特製の塩だれで仕上げる、天然ホタテの風味いっぱいの焼きそばが訪れた人たちの食欲を誘っていた。

地元、阿寒のそば粉〝鶴粉〟で作った十割そば、シカ肉のソーセージや串カツ、ザンギが人気を集めていた。鶴の名のついた銘酒コーナーでは被災地福島県の「奥州鶴」、宮城県の「萩の鶴」、青森県の「八鶴」をはじめ遠くは九州、四国からの日本酒15種類がそろった。

ご当地グルメで人気の北見塩やきそばも登場

29日はタンチョウ感謝祭としてご当地グルメと特産市をはじめ、午前10時30分から釧路市丹頂鶴自然公園の高橋良治名誉園長のタンチョウトークショー、午後1時からはタンチョウの写真家、林田恒夫氏のフォトセッションを行う。

（伊東義晃）

平成二十四年度

7・8	河川浄化植樹プロジェクト　除草、苗木の手入れ（白崎・東星渡部経常建設共同体6名、会員10名）
11・1	丸キビ給餌（～3・15）
11・1	国立公園等民間活用特定自然環境保全活動事業（～3・20）
11・1	ハクチョウ追い払い（～3・20）
11・3	タンチョウ特別天然記念物指定60周年記念事業（会長、顧問、丹頂ほろろん会参加）
11・10	丹頂ほろろん会　民踊指導者研究会への参加
12・1	活魚給餌（～2・28）ウグイ
12・1	保護監視（～2・28）
12・5	タンチョウ給餌台設置
12・20	北海道タンチョウ一斉調査協力
12・20	タンチョウ愛護標語募集
12・20	タンチョウイラスト展開催
1・1	第十六回ツルクイズ羽数確認
1・21	トウモロコシほぐしイベント（於・阿寒中学校）
1・25	北海道タンチョウ一斉調査協力（第二次）
2・16～17	タンチョウ千年祭　感謝祭
3・9	小中学校による丹頂の保護発表会
	阿寒川・舌辛川の水質検査

上阿寒でほ場整備

阿寒タンチョウ鶴愛護会 越冬環境浄化

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は、タンチョウが越冬時に訪れる阿寒川と舌辛川の環境浄化植樹プロジェクトの今年度1回目の活動として、8日に除草などを行った。

同プロジェクトは、ねぐらとして重要な役割を果たしている2河川の良好な自然環境を保全しようと、2008年に立ち上げ、毎年夏と秋に作業している。今回は同会と阿寒地区で草地整備を行っている佐々木・白崎・東星渡部共同企業体、小野寺組、阿寒町商工会青年部から合計16人が参加した。好天となった今回の作業では、上阿寒で草刈りやほ場整備などを行い、参加者は額に汗しながら環境保全のため作業に取り組んでいた。

（堀口義彦）

除草などの作業を行う参加者（阿寒タンチョウ鶴愛護会提供）

平成二十五年度

8・24　河川浄化植樹プロジェクト　除草、苗の手入れ（作業員4名）
11・1　丸キビ給餌（3～16）
11・23　ボランティアガイド育成講座（11・23、24、12・7）
11・29　丹頂ほろろん会　台北市立動物園訪問（～12・3）
12・1　活魚給餌（～2・27）
12・1　保護監視（～2・28）
12・5　北海道タンチョウ一斉調査協力（第一次）
12・10　タンチョウ愛護標語　入賞作品決定、展示
12・20　タンチョウイラスト展開催
1・1　第十七回ツルクイズ飛来数確認（募集期間　10～12月）
1・24　北海道タンチョウ一斉調査協力（第二次）
2・16　丹頂の里　千年祭　感謝祭・結婚式

“タンチョウガイド”養成へ

阿寒愛護会 講座スタート

観光振興に一役

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は、タンチョウの専門知識を持ったボランティアガイドを初めて養成することとなり、23日から阿寒国際ツルセンター（同市阿寒町）で養成講座をスタートした。釧路近郊から15人が受講し計3回の座学を実施。現場研修を経て同会の認定ガイドとなり、同センターで今冬シーズンから案内役として活躍する予定。国内外の観光客を温かくもてなすことでリピーターを増やすなど、阿寒地域の観光振興に一役買う。（高田薫）

同センターでは、特に給餌の様子を見ることができる分館の来場者が冬場に集中。団体客は河瀬幸主任解説員ら3人のスタッフで対応できるが、個人客への案内が十分ではないため、民間ガイドの養成を以前から検討していた。

受講したのは同会会員のほか、地元阿寒を含む釧路市と釧路町に在住する20代から70代までの一般男女。

初日の講座で髙橋氏の講演に熱心に聞き入る受講生たち

タンチョウに特化した一般のガイドはこれまでおらず、同会では現在の講座に引き続き今年度中に、新たな受講者を募集した2度目の講座を行ってさらに人数を増やす方針。

また、同センター周辺には釧路湿原美術館や天然温泉宿泊施設サークルハウス・赤いベレー、道の駅があるため、これら施設の情報も知ってもらい、将来は「この地域（通称・丹頂の里）全体の案内を担ってもらうことも検討している。吉田会長は「一度来た方が再び阿寒に訪ねてもらえるような温かいおもてなしになれば」と語る。

この日は開講式では、同市丹頂鶴自然公園名誉園長の髙橋良治氏が講演し、「冬場の寝ぐらになる川が凍結した時は地域住民たちが重機を使って氷割りをして守った」、「ひと声で鳴くのが雄、ふた声で返すのが雌」などのエピソードや豆知識を披露。自らも関わった人工ふ化・飼育事業について振り返りながら、タンチョウに関わる心構えを伝授した。

次に同市動物園園長補佐の松本文雄氏はタンチョウの生態や研究などについての専門知識を説明し、受講生たちは真剣な様子でメモをとるなど、“タンチョウガイド”への道を歩きだした。

講座は、2日目の24日は、同会の吉田会長と大山昇事務局長がタンチョウ保護や同会の歴史を説明。最終日の12月7日は同センターの河瀬解説員の実践講座と給餌の見学。阿寒ほろろん会（鶴田眞智子会長）による郷土芸能「丹頂鶴音頭」を学ぶ。

平成二十六年度

5・13 ほろろん会阿寒小学校普及指導
5・19 平成二十六年度総会
6・6 ほろろん会清風荘慰問
7・17 ほろろん会町内会婦人部出前講座
7・27 阿寒ふるさと祭り協力参加
8・3 河川浄化植樹プロジェクト実施
8・18 会報「鶴群」一〇四号発行
9・14 丹頂の里まつり協力参加
10・16 愛護会設立五十周年事業へ向けて実行委員会開催
10・19 ほろろん会郷土芸能芸術祭参加
11・1 丸キビの給餌開始（～三月中旬）
11・2 ほろろん会阿寒町総合文化祭参加
11・10 設立五十周年記念誌編集部会開催
11・25 設立五十周年助成金要望書提出
12・1 活魚の給餌開始（～二月末日）
12・1 塒の巡視開始（～二月末日）
12・5 タンチョウ生息数一斉調査協力
12・8 会報「鶴群」一〇五号発行
12・28 第十二回タンチョウイラスト展開催
1・1 第十八回ツルクイズ飛来数確認
1・20 タンチョウ愛護標語展
1・26 タンチョウ生息数調査・第二回
2・14 第四回丹頂の里「千年祭」協力参加
3・9 生放送ＮＨＫ「ひるブラ」で紹介
3・30 会報「鶴群」一〇六号発行

新聞　平成２７年(2015年)１月７日（水曜日）

来年度50周年 名称変更へ

「釧路市タンチョウ鶴愛護会」に

「阿寒」抜き組織認知を

国の特別天然記念物タンチョウを保護する取り組みを続けている釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）が、２０１５年度に創立50周年を迎える。記念式典や記念誌編さん、植樹などの記念事業を計画し、市全体の組織として認知されるよう、名称から「阿寒」の文字を抜く方針も決めた。半世紀の節目を機に、より多くの市民に保護活動に参画してもらうことを願っている。（髙田薫）

同愛護会の誕生は、当時地元で給餌や観察などを熱心に行っていた阿寒中学校ツルクラブの取り組みがテレビ番組で紹介されたことがきっかけ。冷夏のため餌不足で困っていることが報じられると、全国各地から餌や寄付金が殺到。同校のみでの受け入れが限界に達したため、当時の教育委員会や学校・ＰＴＡの関係者、給餌人らが中心となり、１９６５年11月30日に「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」が発足した。

市町村合併を機に現在の名称に変更したが、発足以来、餌や寄付の窓口のほか給餌のための畑を整備したり、冬場の餌の確保のためドジョウの養殖池を作ったり、飛来状況を調査。「丹頂鶴音頭」を作って普及するなど、愛護思想の高揚にも取り組んだ。これらが認められ、81年には市街地や農地を含む飛来地一帯が鳥獣保護区に指定され、保護環境の保全が図られた。

現在は、法人・個人合わせて約１４０会員が所属し、道などからの補助金の足りない部分の餌代に充てるほか、生息環境保全のための植樹活動、ツルクイズやイラスト・標語の募集、写真コンテストを実施。ガイドボランティアの養成にも着手している。

同会では昨年10月、50周年記念事業実行委員会を立ち上げ、坂本淳副会長が委員長に就任。これまでに数回の会合を重ねて事業内容について協議している。記念式典は２０１６年３月に市内で開催し、50年の歩みを紹介した記念誌の作製を予定。また、インターネットのホームページの中で保護活動が学べる環境を整えて人材育成を図るほか、観察センターにカメラを設置してライブ中継するなどの情報発信も検討している。

名称から「阿寒」を除くことについては、現在の会員の多くが阿寒町民で釧路市民が少ないことや、市内唯一のタンチョウ愛護組織であることなどを考慮した。名称変更や記念事業については、15年度の総会で正式に決まる見通し。吉田会長は「ねぐらなどの生息環境保全・浄化のための植樹にも取り組みたい。より多くの方に愛護会の活動を知ってもらえる機会になれば」と話している。

平成二十七年度

5・23 平成二十七年度定期総会
総会に於て「釧路市タンチョウ鶴愛護会」に名称変更
6・13 設立五十周年記念植樹祭
7・18 河川浄化植樹プロジェクト苗畑として借用地の草刈
7・30 会報「鶴群」一〇七号発行
9・12 丹頂の里まつり
9・30 ホームページ開設
10・29 給餌量調整連絡会議（環境省）
11・7 高橋良治氏講演会
（釧路市民文化会館）
11・27 広島賀茂鶴酒造会社表敬訪問
（会長・事務局長）
11・28 東京明治神宮参集殿にて日本善行会日本善行賞受賞表彰式に出席
（会長・事務局長）
12・1 日本善行会受賞報告会
（市長・教育長）
12・12 釧路市にて善行表彰受賞祝賀会
12・12 会報「鶴群」一〇八号発行
12・27 鶴のイラスト展（～2月28日）
1・1 つるクイズ
1・24 つる標語コンテスト
3・6 釧路市タンチョウ鶴愛護会設立五十周年記念式典

釧路新聞 平成27年(2015年)6月5日（金曜日）

「阿寒」削除、釧路市タンチョウ鶴愛護会

名称変更で会員増強へ

創立50周年 多彩な事業

国の特別天然記念物タンチョウの保護に取り組む釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長）は、創立50周年に当たる今年度、式典をはじめ、学校教育にも活用できるホームページの作成、生息環境保全のための植樹など、さまざまな記念事業を計画している。また名称から「阿寒」を削除し釧路市唯一の保護団体として会員の増強に励むこととなり、新規会員にはさまざまな特典を用意している。（高田薫）

組織名変更や今年度事業計画は、5月下旬に阿寒国際ツルセンターで開いた定期総会で正式に決めた。新たな名称は「釧路市タンチョウ鶴愛護会」。

記念事業は、今月13日に阿寒町内の阿寒川上流で実施する植樹活動が最初となる。タンチョウの寝ぐらとなっている川の環境浄化を目的に、苗畑で育ててきたものも含めて、ハシドイなど広葉樹の苗木を植える。

11月には、丹頂鶴自然公園の高橋良治名誉園長を講師に記念講演会を開催。高橋氏が親鳥役となってひなを育てた経験にちなみ、参加対象を親子にしたい考えている。

記念式典は来年の3月6日に釧路市内で予定。感謝状贈呈や祝賀会のほか、タンチョウと自然との共生をテーマに基調講演とパネルディスカッションを予定している。

また、学校の授業でも活用できるように保護の歴史などを資料にまとめ、今年度一新するホームページに引になる特典が付く。吉田掲載。記念誌の発刊も行う。会長は「阿寒のではなく、釧路市の団体であるというらの会費を収入源に、タンことをもっと理解していたチョウの飛来数を当てるクいただけるよう努力していイズやイラスト展、河川浄化、寝ぐら観察ポイントの整備などの事業を行い、保護意識の高揚に励んでいるが、高齢化などで会員が減少。会費収入が最盛期の7割ほどに落ち込んでいるという。

そこで50周年を契機に、団体の認知度を高めて会員増につなげようと名称の変更に踏み切り、今後呼び掛けを強める方針。新規会員は、ツルセンターの本館と観察センターの入館が無料になったり、隣接する温浴施設・赤いベレーのレストラン料金や釧路湿原美術館の入館料がそれぞれ10%割引になる特典が付く。吉田会長は「阿寒のではなく、釧路市の団体であるということをもっと理解していただけるよう努力していきたい」と話している。

<6月13日> 50周年記念植樹

五十周年を記念し苗木六十本植樹

タンチョウの保護に取り組むタンチョウ鶴愛護会（吉田守人会長は十三日、設立五十周年を記念して釧路市阿寒町飽別の阿寒川沿いの原野に広葉樹の苗木を植樹した。

同会はタンチョウのねぐらとなっている河川の環境をよくするため、七年前から植樹活動に取り組んでおり、記念植樹もその一環。

会員や活動に賛同する釧路市民約三十人が参加し、エゾヤマザクラとハルニレ、ナナカマドの苗木六十本を次々と植えていった。

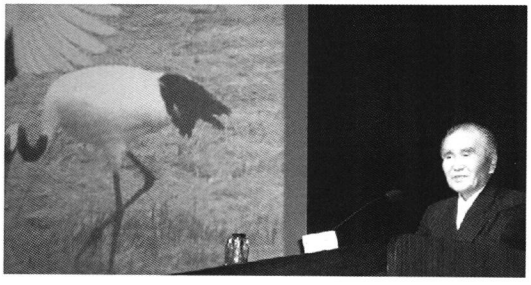
吉田会長は「川がきれいになり、小魚も増えてくれれば」と期待を込めていた。

平成二七年六月十五日　北海道新聞に掲載

―設立50周年記念事業―

親子で聞ける講演会「鶴になったおじさん」

11月7日釧路市民文化会館 小ホールにて

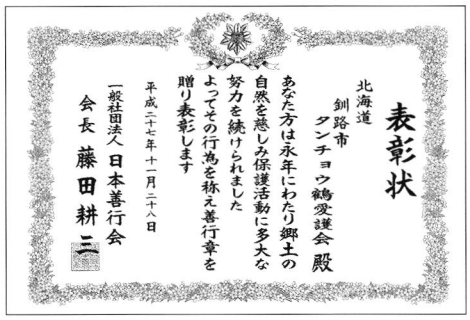


平成27年度 秋季日本善行賞受賞

平成27年11月28日 東京明治神宮参集殿にて

<善行表彰式会場>

<明治神宮参集殿前にて>


表彰状

北海道
釧路市
タンチョウ鶴愛護会 殿

あなた方は永年にわたり郷土の自然を慈しみ保護活動に多大な努力を続けられましたよってその行為を称え善行章を贈り表彰します

平成二十七年十一月二十八日

一般社団法人 日本善行会
会長 藤田耕三

<表彰状>

自然と文化財愛護への貢献

釧路市タンチョウ鶴愛護会は昭和40年に発足し、以来、タンチョウと人とが共存する地域の発展に寄与することを基本理念とし、給餌、飛来地やねぐらの監視活動、資料の発行、丹頂鶴音頭創作及び普及、園児・児童に愛鳥啓発作品展、鶴クイズ、千年祭などタンチョウの保護や保護思想の啓発活動等を行ってきました。

今日、その保護活動の努力で、一時は絶滅の危機に瀕したタンチョウが、阿寒町において、およそ200羽以上の群れが越冬する状況に至っております。

50年の地道な活動は地域住民からの信望も厚く、国内外においても高く評価されており、今回の受賞となりました。

釧路新聞　平成２７年(2015年)１２月３日（木曜日）

高橋さんらに善行賞

釧路 ２個人１団体が市長報告

日本善行会の秋季善行表彰を受賞した釧路市在住の2個人1団体が1日、同会釧根支部の小西功圃支部長はじめ役員とともに釧路市役所を表敬訪問し、蝦名大也市長に受賞報告を行った。

今回の受賞者は、長年にわたり町内会長や地区連合会長、市連町副会長として活動している高橋利一さん(78)、自閉症児など障害児への水泳教室の支援と釧路更生保護女性会の会長として活動を続けている佐藤満里子さん(74)の2個人。さらに50年間にわたりタンチョウと人が共存する地域の発展を基本理念に、地域ぐるみでタンチョウの保護活動などを実践している「釧路市タンチョウ鶴愛護会」（吉田守人会長）が表彰を受けた。

小西支部長は「地域の中で昼夜を問わず活動している姿は住民の範とするところ。今後も釧根管内で善行活動を続けている人を表彰するようにしていきたい」と、善行精神をさらに広める取り組みを継続する考えを示した。今回の表彰で釧路管内からは鶴居村で交通指導員として児童生徒の登下校の見守り活動、地域の障害者の相談員としての取り組みや町内会活動を実践している松井啓市さん(79)も表彰された。（伊東義晃）

蝦名市長に受賞報告をする（左から）高橋さん、佐藤さん、吉田会長

日本善行会の紹介

昭和12年５月に発足、戦前戦後を通じて、青少年問題に取り組む一方、町をきれいにする運動、親切運動、花いっぱい運動を実践するとともに、昭和26年からは善行の実践者として推薦された青少年及び国際貢献活動・緊急時貢献者と外国人、一般人社会人を春と秋に表彰し善行精神の普及と高揚に努めています。

この善行表彰は、これまでにそれぞれ64回にわたり実施し、受賞された方々は約４万3000人に達しています。

また、機関紙「明るいニュース」を発行し、善行運動の推進と啓発、明るい住みよい社会環境づくりに努めています。

給餌に尽くした人々

○ 山崎 定次郎 やまざき さだじろう 1889～1974 ○

昭和初期釧路湿原に生息する丹頂は三十羽が確認されていますが、今では多くの方々の協力のお陰で千五百羽を超える数が確認されていますが、昭和初期丹頂は絶滅の危機にさらされていました。それを救ったのが、阿寒の一農民であった、山崎定次郎です。昭和二十五年、彼は腹をすかせた丹頂の給餌に成功し、それをきっかけに丹頂を保護する動きが高まっていったのです。

「サルルン・カムイ」古くからアイヌ民族はこの鳥のことを「湿原の神様」と呼び、尊んできました。明治以前、北海道の大地には手付かずの自然があり、各地に広大な湿原が広がっていました。丹頂はそこで悠々自適に暮らし繁殖を繰り返し、北の大地の空を羽ばたいていたのです。しかし、明治以後、多くの和人が入植し、湿原はことごとくその姿を畑や水田に変えていきました。住みかを追われた丹頂は、次第に北の大地からその優雅な姿を消していきました。ただ一箇所、あまりの低温で入植者達が水田にできなかった釧路湿原だけが丹頂が生きていく最後の場所となったのです。しかしその数は激しく減り、人の目にふれることはなくなっていきました。

「絶滅したかもしれない」

関係者の中にはそうつぶやく人もでてきました。大正十三年、地元猟師が釧路湿原の奥地で偶然にも丹頂の姿をみかけます。北海道が調査に乗り出し、十数羽の生息数を確認しました。

「丹頂が生きていた！」このニュースは道内を駆け巡りました。そしてその保護のため、昭和十年丹頂は天然記念物に指定されました。地元有志達はエサがとれない厳寒期にトウモロコシやドジョウを放流するなど地道な努力を続けますが、最初の頃は人間への警戒心が強い丹頂はそのエサに近寄ってもくれません。結局、生息数は一向にふえませんでした。釧路湿原の丹頂は、昭和二十年代まで、厳寒期の食糧不足と心無いハンターの手によって絶滅の危機にさらされていたのです。それを救うきっかけとなったのが阿寒町に住む山崎定次郎でした。

昭和二十五年一月、ある雪の朝、定次郎が裏の畑に出てみると、トウモロコシのニオに数羽の鶴が近寄ってきて、枯れた茎をついばんでいました。あまりの美しさにしばらく呆然と見とれていましたが、近寄ろうとすると鶴はすぐ飛び去ってしまいます。

「間違いない、丹頂だ！　そうか腹が減ってるんだな」

なんとか丹頂にエサを与えてあげたい。そこで朝、丹頂が飛んでくる時間を見計らって、トウモロコシを抱えながら畑で待っていました。間もなく釧路湿原の方向から数羽の丹頂が飛んできましたが、定次郎に警戒したのか、畑に撒いたトウモロコシには見向きもしません。

「臆病な鳥だ、わしが怖いのか」

仕方なく家に戻り、窓から畑の様子を見ることにしました。すると、丹頂は恐る恐る雪原に舞い降り、定次郎のまいたトウモロコシをついばみはじめたのです。

「やった！丹頂がわしのエサを食べた！」

これが丹頂の給餌に成功した瞬間でした。この年釧路地方は寒波と猛吹雪で丹頂の餓死が相次いでおり、猛吹雪をやっと逃れて阿寒に降り立った七～八羽の丹頂が、定次郎の給餌によって命を救われたのです。山崎定次郎、六十歳の冬でした。

山崎定次郎は明治二十二年、富山県で農家を営む小作人の末っ子として生まれました。地主から与えられた畑を必死に耕す家族、どんなに一生懸命働いても決して自分のものにならない畑。そして末っ子の自分。息がつまりそうな毎日を過ごしながら、定次郎はいつも広々とした大地での生活に憧れを感じていました。

十九歳になった時、旭川に住む親戚を頼りに、定次郎は北海道に渡る決意をします。

「いつか絶対自分の田んぼを持って米作りをしよう」

憧れだった北海道の広大な土地で、定次郎は米作りを手伝い始めました。

寒い北国での米作りを体で覚えた頃、阿寒町に住む姉から「自分で田んぼを持ちたいなら阿寒に来なさい」と誘われます。大正十二年、飛びつくように阿寒にやって来た定次郎は二十五歳でした。姉からわずかばかりの畑をわけてもらい、夢が実現した彼は無我夢中で米作りに取り組みました。

「こんなところで米作りなんかできるはずがない」周囲の批判も跳ね除け、定次郎は米作りに挑戦、そして成功します。

「やればできるのだぁ、我々もやってみるべか」。この頃から阿寒の農家達は定次郎の米作りに触発され、水田経営を始めます。そして地域の青年団を組織し、団結するようになっていきました。しかしこの地域の夏の低温は、水田の稲穂にとって越えようもない壁であり、その少なすぎる収穫量ではみんな食べていくことができませんでした。

「この土地ではやはり米よりも畑作の方が収入になる。」青年会でこう結論がでると、定次郎をはじめ住民は、馬鈴薯やトウモロコシを中心に畑作でいくことに決めました。こうして収入も安定した頃、定次郎は生涯の伴侶を得、子供も生まれ、この地にどっしりと腰を落ち着けたのです。

「富山から出てきて本当に良かった。生涯この阿寒の地を自分のふるさととして精一杯がんばろう。」

昭和に入り戦争に突入すると、食糧難で家庭が火の車にもかかわらず、定次郎は戦争で亡くなった家族の面倒を見たり、畑の手伝いをしたり、子供達の教育問題にも相談に乗るなどして、辛い時期を住民皆で乗り越えました。定次郎はいつも物腰柔かく笑顔を絶やすことのない温厚な人柄と、住民への思いやりを持ち合わせていました。そんな定次郎に住民達は絶大な信頼を寄せていくようになっていったのです。

昭和二十五年一月、丹頂の給餌に成功した定次郎は、翌朝、また翌朝もトウモロコシをまき続けました。まだ食糧事情も悪く人間が食糧に不自由する時代でしたが、自分の畑にエサを求めてやってくる丹頂を見捨ててはおけなかったのです。しかし他の住人たちは「丹頂なんて畑のものを食い荒らすだけではないか」と言い、妻も「鶴に食わせるのはいいけれど売る分までなくなってしまう」とこぼしました。厳しい農業の暮らしの中でエサ代だけでも大変でしたが、定次郎は聞きませんでした。

「鶴よぉ、おまえたちはほんとうにきれいだなぁ。死んだらだめだぞぉ　ほぅら一杯食べろよ」

丹頂もそんな定次郎の愛情に応えて飛んで来るようになり、こうして彼の五ヘクタールの畑は、丹頂たちの安息の地となりました。近所の人々もそれを真似てエサまきを始めましたが、根気のいるこの作業は続くものではありません。いつのまにか一軒また一軒と数は減り、結局は定次郎一人が毎日欠かさずトウモロコシを撒き続けたのです。

この暖かい招きに、丹頂たちは一日一日、定次郎との距離を縮め、三年目、ついに五メートルの距離まで近寄ってくるようになったのです。

「鶴は賢いんじゃ。三日坊主の給餌をしてたんでは、もうそこには降りてこなくなる。わしは毎日毎日欠かさずエサを与えたから、わしの声や姿、そして撒き方やしぐさまで覚えたんじゃ。そうなったら、もう離れないもんじゃ」

ふるさと富山に夢を見つけられず、四十年前そこを捨てて出てきてしまった定次郎にとって、阿寒に降り立つ丹頂鶴にエサをやり続ける作業は、自分の心への償の行為だったのかもしれません。

丹頂は昭和二十七年、特別天然記念物に指定されました。定次郎はその時まで自費で給餌を行っていました。雪の多い時は、撒いたエサが埋もれて拾えないため、トウモロコシを茎ごと雪の上に差したり、木箱に入れてやったりと、丹頂が発見しやすいように、いろいろ工夫を凝らしました。その苦労は並大抵のものではありませんでした。この頃から町の人々は定次郎のことを「山崎の鶴じい」と呼ぶようになり、この名は道内外で広く知られるようになっていくのです。

そのうち、すっかり慣れてきた丹頂は、定次郎の姿を見つけると近寄ってきてエサをねだったり、朝になると「クワッ、クワッ」と声をあげて定次郎に催促するようになりました。

「こうなったらかわいくてたまらない。まるで子供や孫のようだ」

昭和二十七年、定次郎は丹頂にエサを与える給餌人として役所から正式に委嘱されました。

昭和三十二年、三十三年と北海道は全道的な冷害に見舞われ、エサにありつけない丹頂はバタバタと餓死していきました。この冷害を機に「鶴を救おう」と、阿寒町内をはじめ全国各地で呼びかけが始まり、たくさんのトウモロコシが各地から送られてくるようになりました。

こうして丹頂保護の気運が高まるにつれて、北海道は丹頂を「北海道の鳥」に指定、保護体制を一段と強化しました。しかし開発によって生息地が狭められてきたことから「これでは今に丹頂が全滅してしまう。なんとかしなくては」と町が一丸となって丹頂を保護することを訴え、定次郎も組織づくりに奔走しました。彼は給餌事業や生息観察などの意識を高めるための「丹頂祭り」や、郷土芸能としての

「丹頂鶴音頭」の制定に尽力し、さらに丹頂の好物、ドジョウの養殖地も設置し、冬のエサ不足を補いました。

彼の努力の甲斐もあって、昭和二十七年にわずか三十羽足らずだった丹頂の生息数も昭和三十年には一九〇羽、四十四年には二〇〇羽を超えるようになりました。エサを与え始めて二十数年、丹頂は定次郎にとって、いつしか家族のような存在になっていました。

「鶴が百羽近くも来てくれるわしの庭は世界一素晴らしい」

定次郎がこう豪語するように、彼の庭には丹頂見たさに連日のように見物客が訪れました。多い日には一〇〇人を超え、中には外国から来る者もおり、冬の阿寒の観光の目玉となっていったのです。

昭和三十四年、定次郎は北海道文化財保護委員会から正式に「丹頂鶴監視員」に任命されました。昭和三十九年には、長年にわたる丹頂の保護に尽した功労者として、北海道でただ一人「農林大臣表彰」を受け、さらに昭和四十七年には勲五等瑞宝章を拝受、重なる名誉が、定次郎の穏やかな顔に刻み込まれていきました。

「鶴はなんといっても自然のままの姿に限る。真っ白な雪原の上を、自由に飛び、自由に遊ぶ、それが一番美しい。丹頂が舞い降りるこの風景は阿寒の里の宝だ、決してなくしてはいけないんじゃ。」

昭和四十八年、鶴じい八十三歳の時、鶴の世話係を長男の定作（ていさく）氏に譲りました。それから二年後、頑丈だった体も寄る年波には勝てず、その年の冬、とうとう入院しました。病床で鶴じいは毎日「鶴は大丈夫か」と口癖のように言っていましたが、具合が急におかしくなったその夜、今まで星が見えていた北の空から雪混じりの風が急に吹いてきました。その音に混じってかすかに「クルッ、クルッ」と鶴の鳴き声が聞こえてきたと言います。その時、鶴じいはグッと頭を持ち上げ「鶴だ、鶴が鳴いている」とはっきりした声で言いました。付き添っていた家族は皆窓の外を見ました。眼に映ったものは冷たい雪の原っぱだけでした。皆がベットを振り返った時、鶴じいはしずかに息を引き取っていました。

山崎定次郎、享年八十五歳。

現在息子の定作氏は八十三歳になったが給餌の方は三代目の一彦氏に譲り「丹頂とマリモを守り続けるのが、阿寒に生きる私達の責任」と語ります。

一時は絶滅の危機にさらされた丹頂。しかし明治時代から開墾を厳しく拒んできた釧路湿原と、山崎定次郎をはじめとする地元の人々の献身的な給餌活動が、世界にもまれな例として丹頂の生息数を復活させたのです。

昭和五十二年、山崎定次郎の裏庭は丹頂観察センターとして新たに設立、そして平成八年にはその横に阿寒国際鶴センターと丹頂愛護発祥の碑が建てられました。

鶴と老人

鹿島栄一
（元 阿寒中学校教諭）

二月も末になると、丹頂鶴の頭は紅色を帯びてくる。鶴にとって三月は愛のシーズンなのだ。「クルル・クルル・・・・」と鳴きかわしながら雄と雌は美しい舞をする。その背景に雄阿寒岳が白妙の姿を見せている。

山崎老人は、阿寒岳を望む阿寒川中流に沿って古くから農業をやってきた人だ。老人は冬はもっぱら鶴たちの給餌に余生を楽しんでいる。老人には双生児の孫がある。彼らも老人といっしょに餌をまいている。真っ白い頭の老人と、揃いの紺のセーターと帽子の双生児の子供を、この辺で知らぬ者はいない。「ホー、ホー」と静かに透る声でトウモロコシをまいて行く。鶴たちも「クルル・クルー」と安心して老人たちの側に来て餌を拾う。老人一家以外の人では鶴は逃げてしまう。

二月末の日曜日に私が行った時は十三羽しかいなかったが、多い時は六十羽ほどもいる。老人の部屋には鶴のカメラマンたちが写した、いろいろな写真が飾ってある。表彰状もある。老人は訪れる人々に目を細めて静かに鶴の話をする。それは自分の子供の話をするように愛情がこもっている。「近ごろは、車や人が多くくるのでおびえてまさあ。前にはもっと家の近くまできたんだけどね」

鶴を可愛がる山崎さんは葦で塀をつくり、あまり人を近づけないようにしている。私は望遠鏡でそっとのぞいてみた。十三羽の中、家族連れが二組ある。首の黄色いひな鶴を中に三羽いるのがそうである。手前の方に鳩が二羽、今まいたトウモロコシのおこぼれにあずかっている。あ、きたきた、望遠鏡では大きく見えすぎて私の頭をこしたかと思ったら前方五十メートルぐらいの所にフワッと舞い降りた。五羽だ。降り方がまた、大変優雅である。かぐや姫昇天の時の情景に似ている。地上二メートルぐらいでフワッと浮いて花びらが落ちるように、ほんとうにそっと降りるのである。

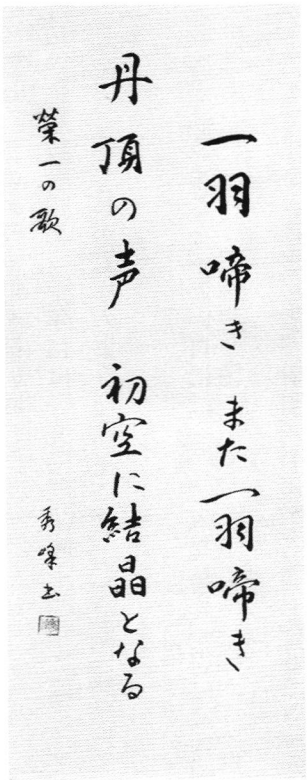
私の近くで、バズーカ砲のような長い望遠カメラで地上の鶴を撮影していたカメラマンは、あわをくって高射砲のように中空にカメラをむけたが失敗したらしい。

「鶴からはカメラが見えるんですか」

「ああ、見えるとも、人が二、三人たっていても用心しているよ」

なるほど武器のない鶴は敏感なものだ。ねぐらも葦の茂る川の浅瀬で一本足でねむる。卵を抱く以外は年中たっているわけだ。本当に山崎老人の家族のようなものだ。優雅で神経質な鶴たちを、老人は長年手がけてきただけに、鶴を声一つ歩き方一つですべてがわかるという。

この鶴たちといっしょに暮らしたら老人もきっと長生きすることだろう。この近辺に老人ホームでも。・・・とすぐ俗な考えを抱く私だが、本当に全国の老人にこの群れ集う鶴の姿をみせてやりたいものだと思う。「クルル・クルル」一組の家族連れは川辺に向って鳴いている。



平成9年1月1日釧路新聞
新春文藝　短歌の部　天位　鹿島榮一
（釧路歌人会長　嵯峨美津江選）
書は釧路短大講師　渋谷薫先生
（30×75cm）

●タンチョウ給餌人二代目●

山崎定作

阿寒国際鶴センターの分館「タンチョウ観察センター」前には、二百羽以上のタンチョウが飛来する。山崎さんはここで昭和四十八年から平成二十三年迄初代定次郎さんの後を継いで三十八年間給餌を行っていたが、体調の関係で平成二十二年、息子の一彦さんにその仕事を引き継がせている。

山崎一家の給餌活動は親子三代にわたるもので、初代の定次郎さんは昭和二十五年にエサを与え始めた。同センターの敷地内には給餌発祥の記念碑も設けられている。

「タンチョウの給餌は父が始めたもの。畑にトウモロコシをまくようになると、ツルが集まり始めた。給餌の成果で数が増えるようになったのは、昭和三十年くらいのことだった」と当時を振り返る。

父の定次郎さんについては「タンチョウの給餌は父にとって、子育てのようなものだったのではないか」と語る。親子二代にわたる活動が評価され、昭和五十七年には愛鳥週間にちなんだ「鳥類保護総裁賞」を受賞した。

また同センターには、タンチョウ撮影を行うカメラマンが数多く訪れた。「顔なじみになった人と毎年、会えることはとてもうれしい。中には二十年以上通い続けている人もいて、顔を合わせると〝元気だったか〟などと言葉を交わす人もいて、大変なつかしい思いがする。」

給餌を行っているこの間には、天皇陛下が同センターを訪れたこともあった。山崎さんにとっては一番の思い出。「昭和五十八年当時、現在の天皇陛下は皇太子だった。タンチョウについて説明したがとても緊張したことを覚えている」。

三代にわたって行ってきた給餌はもう六十年近い。現在は息子の一彦さんが給餌を行っているが、「タンチョウの持つ美しさは、何物にもかえがたい。山崎家にとってタンチョウは家族の一員のような存在になっている。」と語っている。

●タンチョウ給餌人三代目●
山﨑一彦

春から釧路湿原各地で過ごしてきたタンチョウが今年も「三大給餌場」に集まってきた。阿寒国際ツルセンター（釧路市阿寒町）隣にある七ヘクタールの自宅の畑もその一つ。三十八年間給餌人を務めた父定作（八十六）の腰痛が悪化し、六年前にその後を継いだ。

給餌は環境省の委託を受けて行っている。「アマチュア写真家が押し寄せる中、早朝にデントコーン、午後は生きたウグイをまく。このウグイは塘路湖のもので、毎週自宅のいけすに届けてくれる。」普段の農作業と同様、あまり服装は変えない。これは、この格好を見慣れているツルを驚かせてはいけないという、やさしい彼の配慮からである。

絶滅の危機にひんしたタンチョウを救おうと、祖父の故定次郎さんが、昭和二十五年に給餌を始めて六十年余り。祖父と一緒にエサやりしていたころは三十羽ぐらいだったが、今では多い日で二百羽を超える。親子三代でタンチョウと付き合った成果だ。

夏場は、ツルが集まっている畑に、トウモロコシなどを作る。「給餌人の家族はタンチョウにも顔なじみ。農作業の時に近寄ってくることもある。」と目を細めつつ「鳥インフルエンザなどが心配」と給餌場で群れを成す特別天然記念物に気をもんでいる。

釧路市阿寒町生まれ。妻、息子、定作夫妻と五人暮らし。趣味はタンチョウ撮影だが、「給餌が始まると撮られるばかりで、撮る機会が少なくなる」と苦笑い。

親、子、孫と三代目の給餌人として、「体がもつ限りツルのために給餌を続ける」と決めている。

山﨑さんの給餌場は、親子三代にわたる給餌のおかげで、数多くのタンチョウが自然の姿で集まる場所として、多くの人に知られるばかりでなく、自然の生物と人間が、長い間好ましい関係を持続させていることに、人々に感動を与え、道内はもちろんのこと日本全国、世界の国々まで知られている。

今後の地球自然環境の中で生物と人間との望ましい姿を考えるのに一石を投じている。

上阿寒の人々と鶴
―この地に生きる子々孫々へ―

元愛護会副会長
金子信治

はじめに

上阿寒が丹頂の里といわれ、タンチョウ鶴の飛来地として、毎年、初秋にこの地に訪れるようになったことは、厳しい冬季に餌が与えられ、安心して、原野で育った子鶴と共に生きられる土地であることを知り、子別れの時期まで過ごすようになった。

しかし、その間、上阿寒の畑作農家は生産物であるトウモロコシ等の鶴による食害の被害は、それぞれ大変であった。でも特別天然記念物でもある、タンチョウは美しく、飛来してくる鶴との愛情のある交流があったればこそと思う。

次の方々は、山崎定次郎氏と共に飛来初期からタンチョウを守った方である。すでに故人となられたがその善行を讃えたい。

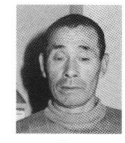
川田二良様

石橋門盛様

坂本与作様

宮坂定雄様

原　博様


松橋弘義様

中屋繁松様

木村七郎様

髙橋　稔様

山﨑定義様

この上阿寒に最初に入植された方々は、明治三十二年に菅野定吉氏とそのご家族で、私の祖父金子亀蔵は大正七年に入植した。現在、私達は二代目、三代目の時代である。

昭和三十五年までは水田を開き米作もして、雑穀、野菜で生計を立てていた。時代の流れと共に昭和三十七年、上阿寒部落農事組合ができて、野菜の早出し作付にビニール利用等をして、市場に安定供給ができるよう野菜組合の設立によって、部落一丸となって野菜生産に力を注いでいた。

トウモロコシは収穫も多いし、市場価格もよかった。ところが、収穫時期になる頃に鶴が飛来して、よく実のなったものを餌としてついばみ、商品として売り物にならないことで、生産農家は共通の悩みを抱えていた。

特に農地の少ない家では、生活に影響することが大きかった。

原　博氏は鶴と共存を考えて、阿寒川の川岸近くにトウキビ畑をつくり、収穫した後、まだ実が多少ついているものを残して、鶴の餌として与えていた。

石橋門盛氏はかなりの被害があったようで、よく奥さんと交代で畑に飛来してきた鶴から生産物を守るために追いたてもしたが、やがて、鶴もひもじかろうと鶴への愛情に目ざめて、収穫を早目にして、トウモロコシを与えるようになった。

川田二良氏も鶴との共存を考えて、被害を最小限度にとどめるよう作付けを工夫していた。不幸なことに三女の京子さんが阿寒高校に入学して一ヶ月後に、帰宅中にまりも国道で交通事故に逢い、短い生涯を閉じた。私はその葬儀委員長として葬儀を執行した。京子さんが阿寒中学校在学中に書いた詩をここに伝えたい。

タンチョウ

阿寒中学校ツルクラブ　川田　京子

雪の中に－
凍りつく吹雪の中に
声をたがいに確かめあって
タンチョウは生きている
雪の中に－
キラキラ光る雪野原に
その姿　ほこらしげに
タンチョウは踊っている
雪の中に－
夕やけにそまる地平線に　明日の希望に
声をあげて　タンチョウは歌っている
春はちかい　けがれない雪原をタンチョウは
歌う　踊る　はねる　鳴く　走る
今日という日を生きて……
明日という日を喜んで……
生命ある躍動を
歌う　踊る　はねる　鳴く　走る
雪の中に－

この詩は、阿寒高校入学の希望に燃えていた四月六日、ＮＨＫテレビの全国放送の「明日は君達のもの」の第一回目の放送であった。

阿寒中学校と山口県八代中学校、鹿児島県野田中学校のツルクラブ員の交流を描いた放送で朗読されて、番組を観ていた多くの人々に感動を与えた。本人は短い生涯であったが、この詩によって川田京子さんは忘れられない。又、上阿寒に飛来する鶴達への未来へ向けてのメッセージともなった。

この様に親も生活に懸命に生きながら、飛来する鶴達に愛情をもって接してきた。

親の姿を観て育った子ども達が、小中学校で鶴の愛護を教育を通して学び、実践してきたことを、私は上阿寒部落の誇りに思っており、子々孫々まで伝え、いつまでも鶴を守ってほしいと願っている。

山崎定次郎氏や定作氏、一彦氏と親子三代にわたって鶴の愛護で有名になった方もあれば、四十年代、野菜出荷の会合で鶴の被害について話し合い、当時、私は阿寒町議会議員でもあったので生産者の立場から、鶴の愛護と上阿寒の農家の生活の安定について議会に提案したこともあった。鶴が飛来することが地域の繁栄になり、部落の人々の生活の安定になればと念願し、努力していた。

心ないカメラマンが許可も受けないで畑に入り、鶴を追いかけ撮影する様子を松橋弘義氏「俺のところの鶴を追いかけるな」と注意される方も多かった。

鶴友会という小さな会をつくり、その頃できたレストラン「鶴」のオーナー池田久治氏や従業員の鐙谷氏などが、たびたび鶴のために使って下さいと寄付をいただいたこともあった。

中屋繁松氏は野鳥の会で表彰を受けた方であるが、本当に農民としても真面目な人柄で心から鶴を愛された方であった。

もっと個々について書いておきたいのだが資料に、阿寒町野菜組合設立二十周年記念誌の中から阿寒町野菜組合入植者一覧を掲載していただいた。この中の多くの人々が鶴を愛して、鶴の飛来地として安心して毎年、飛来できる環境をつくってきた人々である。

現在、丹頂の里として、赤いベレー、道の駅、国際ツルセンターなどの施設ができて、鶴にとっては環境の変化があるが、かわらず飛来してきている。

釧路市と合併しても、この上阿寒に住む、私達の子や孫達、新しく住人となられる方々が、いつまでも、この地を安住の地として、飛来する鶴達に変わらぬ愛情をそそぎ、受け継いで守っていただきたいと切に念願し、後世に伝える言葉としたい。

加地政富（阿寒仁々志別）

加地さんの自宅は、阿寒町の仁々志別にある。給餌は父親の良次さんが、昭和四十年に始めたもので、親子二代にわたる。今年は、一組二羽のタンチョウが、飛来している。

加地さんが給餌を引き継いだのは、昭和六十一年のことだった。「父親はタンチョウのため、わざわざトウモロコシを作るほど熱心だった。私は父が亡くなる少し前から給餌を行っているが、引き継ぐという強い気持はなかった。ツルの話をすることはなく、アドバイスも受けなかった、と思い出を語る。

過去、飛来していたのは、二組の六羽。それぞれがつがいで、幼鳥を連れている。「なわばり意識がとても強いので、力の強い方が弱い方を追っ払ってしまうこともある。一緒にエサをついばむ姿を見ることはない」という。

また、給餌を行っているこの間には、ケガをしてしまったタンチョウもいた。今から二十五年も前のこと。「ケガをしたため、片方の羽が下がってしまったツルがいた。とても弱っていたので、キツネが後を付け食べようと狙っていた。支庁に連絡すると動物園の職員が訪れ、保護してくれた」と振り返る。

こうした中、給餌場となる牧草地周辺の環境も変わった。「周りにはヨシが群生し、以前はヤチという状態。タンチョウにとっていいことかは分からないが、山もはっきり見えるようになった。」

給餌を始めてから三十年以上になるが、飛来するタンチョウは警戒心が強く、あまり近くに寄ることはできない。加地さんはそれでも毎年タンチョウを待ち続けてしまうという。「冬のタンチョウは特に美しく感じる。自分の所に戻ってきてくれることが何よりもうれしい」と笑顔で話している。

高橋愛子（阿寒上舌辛）

阿寒町の市街地から約三キロ離れた上舌辛にある牧場。高橋さんはここでタンチョウの給餌をしている。三十年前に隣の農家から正式に引き継いだが、以前から給餌を行っており、その期間は五十年を超える。

高橋さんは六十年前から、この地で酪農を営んでいる。「はじめは牛のエサでもあるデントコーンを与えた。昔は十羽ほどのタンチョウが来たが、今年はつがいの二羽だけ。数が減ってとても寂しい」と振り返る。

また、タンチョウの飛来は家族の楽しみにもなっており、「十一月になると、毎年待ち遠しい気持になる。家族もツルを見て喜んでいる」と微笑んでいる。

高橋さんが給餌を始めたころのタンチョウは、農家にとって害鳥ともいえる存在だった。しかし、生息数が減少し、給餌が定着するようになると、農家の間でも存在が見直されるようになった。

当時を振り返り「私も最初のころはツルに対して、それほど興味を持っていなかった。家畜の飼料を食べてしまうので、害鳥というイメージがあった。しかし、給餌を続けるうちに、段々愛情がわくようになっていた」と語る。

十羽以上飛来していたタンチョウも、現在はつがいの二羽だけになった。周囲の環境も大きく変化し、生息に与える影響も危惧している。「付近の道路も舗装され、この辺りもすっかり明るくなった。舌辛川も水位が下がるなど、大きく変貌した。環境の変化が飛来数の減少と関係があるのかもしれない。」

給餌場の牧草地では、三月いっぱいまでタンチョウの姿を見ることができる。何気なく始めた給餌も、五十年を超えるようになった。「給餌は私の楽しみになっている。数が減っているのはとても残念だが、タンチョウが飛来する限りエサを与えていきたい」と話していた。しかしその高橋さんも十数年前に亡くなり、現在は奥さんがその後を継いで給餌を行っている。

鈴木浪夫

鈴木さんが給餌を始めたのは、今から十四年前。昭和三十三年父親の義雄さんがエサを与えていたが、高齢のため後を継ぐことになった。現在は三羽が飛来しており、下徹別の自宅の窓からはタンチョウの美しい姿を眺めることができる。

親子二代にわたる給餌活動は五十七年間続けたことになる。「父親は郵便局に勤務する傍ら、エサを与え続けた。十二年前に故人となったが、それ以前に体が弱くなっていたので、私も自然に給餌をするようになった」と振り返る。

飛来している三羽は、自宅のすぐ側でエサをついばんでいる。もっと身近にタンチョウと接したいと思い、段々とエサを家に近づけるようになった。初めは百メートルほど離れたところに降り立っていたが、今では玄関近くに足跡も見られる。

「初めのうちは自宅の裏側でエサを食べていたので、居間からその姿を眺めることはできなかった。現在では家でくつろぎながらタンチョウを見ることができるようになった。毎日接していると、自分の身内のようにも感じる。

また、毎年子別れの季節になると親が子供をつき始めるようになる。自然の摂理といえるものだが、幼鳥の鳴き声を聞くととても悲しい気分になる」と語る。

鈴木さんは以前からタンチョウを観察し、記録をとっている。今ではカメラを手に、写真撮影も本格的に始めた。今後も写真を撮り続け、アルバムなども制作してみたいという。シカとタンチョウが一緒にエサを食べている写真も撮った。居間から眺めていると珍しい場面に出くわすこともあるので、カメラを常に準備している。

しかしこの頃はシカも増えて、タンチョウのエサを横取りするような場面が多くなってきているので、その対策に頭を悩めている。

及川　シマ子（阿寒上舌辛）

阿寒町の市街地から約五キロ離れた上舌辛の一角に、及川さんの自宅がある。飛来しているのは、つがいの二羽、給餌人になったのは、昭和五十年のことだった。今年、訪れているタンチョウは特に警戒心が強いという。

及川さんは昭和三十年、この地に移住した。同四十年から酪農を営むようになり、同五十年に給餌を始めた。「酪農を始めたころに、牛のエサでもあるトウモロコシをタンチョウに与えた。昭和五十年代には四十羽以上が飛来していたが、最近は一つがいだけ。数がめっきり減ってしまい、とても寂しい気がする。」

今年飛来しているのは、例年訪れていたタンチョウではなく、新しいつがい。これまでは、かなり近くまで寄ることができたが、ある程度の距離になると飛び去ってしまう。「今年のタンチョウはとても警戒心が強い。しかし、自宅の窓からは優雅なダンスを眺めることができるので、毎日楽しい思いをしている」と語る。

給餌を行っている間には、缶ジュースのプルトップにくちばしを突っ込んだため、エサを食べることができなくなってしまったタンチョウもいた。「町教委や鶴公園、動物園の関係者がワナを仕掛け、プルトップを外そうとしたが、警戒心が強くだめだった。十日ほど経つと自然に外れ、ほっとしたことも思い出のひとつ」と当時を振り返る。

十一月中旬に姿を現すタンチョウも、三月中旬になると飛び立っていく。親と子が別れる際に発する幼鳥の鳴き声は、悲しい声に感じられる時もあるという。「タンチョウが姿を見せると一年の仕事が終わり、帰っていく時には仕事が始まるという気がする。給餌は日常生活のリズムと言えるもの」と笑顔を見せている。

高橋洋一（音別町上音別）

高橋さんの家は、音別市街から北へ十キロ、周囲は広く道路の右側にあり、反対側には音別川が流れ、人家も少なく、ツルのねぐらも近くにあるようで、給餌場としては恵まれた環境にある。

最初の頃は二羽で、その頃は酪農をしていたので、牛のえさをやったりしたが、人の姿を見ると警戒して逃げていった。そのうちにだんだんと慣れて来るようになった。道の委嘱を受けて正式に給餌人となったのは平成九年からで、早いもので十八年経過したことになる。

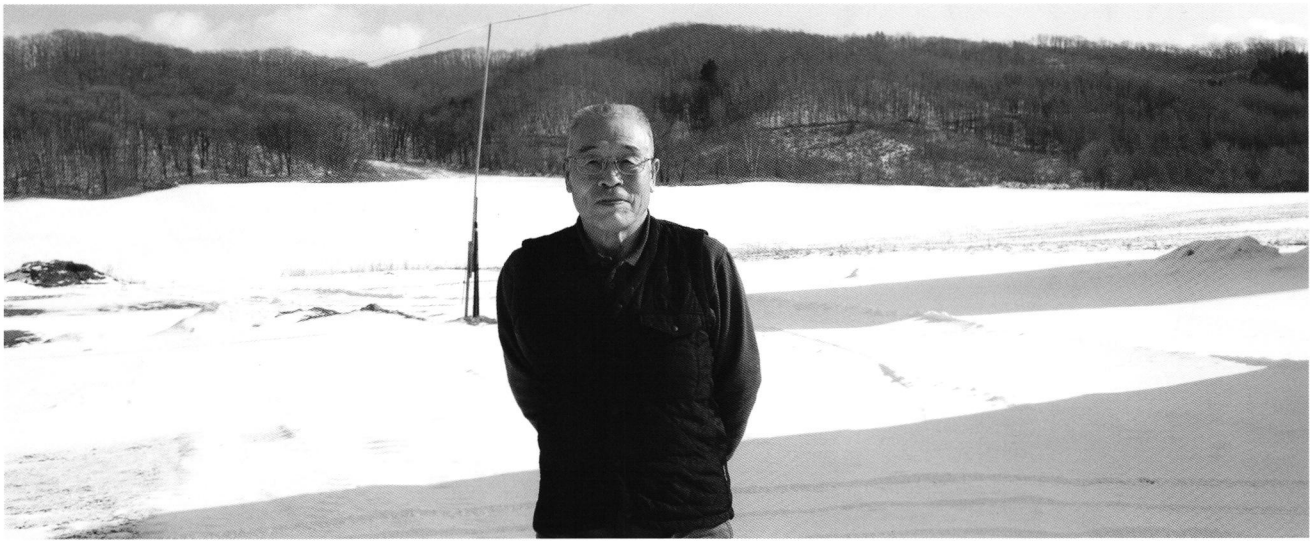
この頃は給餌に飛来するツルの数も増えて、多いときで百羽近くになる。それとともにそのツルを見ようとする人々やカメラマンの数も増えており、余りツルを驚かさないよう、そっとして置いて欲しいという願いがある。

餌をまく時も余り無駄にしないようにと、雪の降る前にはまかないようにして、雪が降ってからまくようにしている。

餌は毎日与えており、朝、日の出と共に餌をやるようにしており、現在行政センターから必要な量が来ており、不足することはない。

給餌がはじまりツルが集まって来るとツルのことが心配になって家を留守にすることができなくなる。それでもこのツルの群れを見ていると心にあんどを感じるとのことである。

それから今迄は音別でツルの孵化がなかったのに、この頃は何組か孵化しているとのこと。この給餌のお陰だと思い、健康で元気な限りこの仕事を続けていきたいと語っていた。



●タンチョウ監視人●
西川精作

西川さんの家は阿寒市街からまりも国道を北上し二十五線の橋を渡ってから更に右折した牧草畑の中になる。以前は酪農をしていたが後継者の問題で酪農をやめている。

監視人の仕事を引き受けるようになったのは平成十三年のころで、もう十四年程経過したことになる。最初の頃は仕事のことも良くわからずに、自分なりに考えて、ツルが安心して生活できるように、マナーの悪いカメラマンに注意したり、特にねぐらには気を使い人を近づけないよう看板をつけたりもした。

この頃はタンチョウ監視記録も整備されて、監視場所や時間等も記録しやすくなっている。朝は早い時は六時四十分頃からねぐらの様子を見に行ったりしているが、それ以前にいるカメラマンには注意のしようがないので困ったこともあった。

現在は毎日日報に記録しているが、平均すると午前は十ヶ所、午後は六ヶ所ぐらいまわっている。

毎日仕事を続けるということは、つらい面もあるが、ツルのために外に出て監視を続けているお陰で、七十歳過ぎても健康でいられると感謝している。

参考迄にタンチョウ監視記録用紙の一部を掲載しておく。

タンチョウ監視記録				
年　月　日	曜日	天候・晴　曇　雪		
巡視時間	巡　視　地　点		幼鳥	成長
:	丹頂の里　最大飛来数			
:	〃　　地上			
:	〃　　地上			
:				
:	28線ねぐら　川・地上			
:				
:	25線ねぐら　川・地上			
:	23線ねぐら　川・地上			
:	22線山下建材　川・地上			
:	線ねぐら　川・地上			
:				
:	舌辛川ねぐら　（上）			
:	舌辛川ねぐら　（下）			
:				
:	高橋宅付近　　地上			
:	及川宅付近　　地上			
:				
:	線　　川・地上			
:	25線ねぐら　川・地上			
:	23線ねぐら　川・地上			
:	舌辛川ねぐら　（上）			
:	舌辛川ねぐら　（下）			
:	高橋宅付近　　地上			
:	及川宅付近　　地上			
:	宅付近			
:				
:				
:				
:				

市内愛鳥校紹介

釧路市立阿寒小学校

校長　佐藤　浩

阿寒小学校は、明治三十四年に設置された舌辛簡易教育所をその始まりとし、今年度で開校百十四周年を迎えた。その間、校舎も幾度となく建て替えられ、現在は、平成十二年にそれまでの校舎があった位置から国道を挟んで反対側に建築されたものを使っている。

その前庭には、「タンチョウ」をあしらったモニュメントの「カリオンの鐘」があり、体育館アリーナの外壁にはタンチョウが大空に舞い上がる姿とタンチョウの親子の姿が描かれている。

現校舎は建てられてから十五年という年月が経ち、アリーナ外壁やモニュメントには多少の汚れや色あせが見られるようになってきてはいるが、安らぎを与えてくれるカリオンから流れる鐘の音と子供たちに寄せる想いを描いたタンチョウの姿は、正に阿寒小学校の象徴であり、学校を訪れる多くの方々から一様に感嘆の声が聞かれるのである。

阿寒小学校は、これまで様々な形でタンチョウとの関わりを持ってきた。

その一つとして、「タンチョウの里」の学校でもある本校は、釧路市（阿寒町）タンチョウ鶴愛護会の愛護活動協力校として、十二月に行われるタンチョウ一斉調査に長く関わり、保護のための一役を担ったり、二月に行われる「丹頂の里千年祭」に児童代表が参加して、主に冬季の給餌活動について発表したりするなどの活動を行っている。

また、子供たちが郷土の誇りである特別天然記念物のタンチョウのことを調べたい時に役立つようにと、図書室にタンチョウに関する学習資料を一か所にまとめたコーナーを設置し、いつでもすぐに学習に活用できるようにしている。

これらのことを通し、タンチョウを取り巻く環境や保護に対する意識の啓発を図ってきたのである。

このことはタンチョウだけにとどまらず、昭和四十三年、本校が「北海道愛鳥モデル校」として指定を受けたことをきっかけに、校庭に小鳥の村を作り、巣箱掛けをするなど、野鳥の保護活動にも力を注いできた。

これら一連の活動によって、子供たちのタンチョウや野鳥などに対する愛鳥思想が高まり、普及啓発の模範校となったのである。

こうした歩みの中、平成六年には「ツル」が取り持つ縁で、ナベヅルの越冬地として知られる山口県の八代小学校と姉妹校にな

り、お互いにツルの保護活動などの情報交換を進めることになった。

その後数年間は交流活動が続いたが、残念ながらいつの間にか八代小学校からの情報が途絶えてしまい、現在交流活動は行われておらず、そのまま今日に至っている。

さて、阿寒小学校の子供たちとタンチョウとの直接の関わりは、阿寒中学校と違って、割と最近になってからのことである。

それは、平成十四年に「生活科」や「総合的な学習の時間」などを使った学習活動の一環として誕生したものであった。つまり、「目的を持って自然体験や社会体験、生産体験などを行い、阿寒町の自然や社会、文化を愛する心情を育てる」ことをねらいとする生活科や総合的な学習の時間の中でタンチョウを取り上げたのである。

子供たち自らの体験を通してタンチョウや自然に対する自分との関わりについて考えさせるために、自分たちの手でデントコーンを育てる活動を春から秋にかけて取り組むようにしたのである。そして、冬には「にお」をグラウンドに作り、タンチョウと共に生活をしようと試みたのである。

その結果、子供たちの努力が実り、それほど数は多くないが、タンチョウが子供たちの作った「にお」に舞い降り、餌を啄む姿が毎年見られるようになったのである。

特に、平成十五年、阿寒小学校で文部科学省の地域指定による「児童生徒の心に響く道徳教育」の研究会が開催された時、タンチョウがグラウンドに舞い降り、子供たちの歓声とともに自然に溶け込むタンチョウの姿を見た参観者は皆感動し、「豊かな心を育む」道徳教育の研究会に花を添えてくれたのであった。

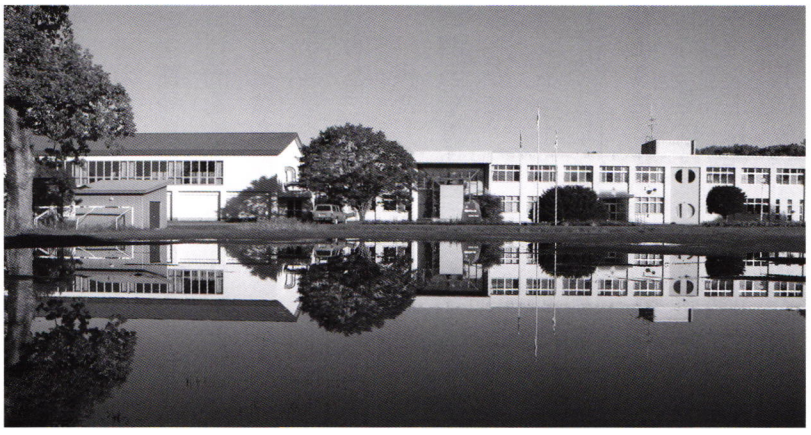
また、平成十六年の学研『二年の学習』一月号では、えさ作りや「にお」作りなど、タンチョウをめぐる子供たちの活動の様子が紹介された。

さらに、平成十八年度から使われた中学校の英語の教科書には、本校の子供たちとタンチョウの写真が掲載された。

現在、タンチョウのえさ作りや「にお」作りは二年生の生活科の学習の一環として行っており、冬の餌やりも二年生が行っている。他の学年は学習等で直接タンチョウと関わることは少ないが、これからもタンチョウを地域の宝として、そして誇りとして大切に見守り、我々人間がタンチョウや阿寒の自然との共生を図っていくために、今後も子供たちの活動を続けていきたいと思っている。

釧路市立中徹別小学校

校長　工藤　泰



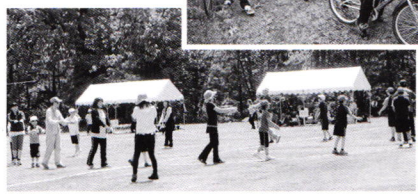
明治四十年に舌辛村立徹別教育所として開校して今年で百九年を迎える中徹別小学校。本校は、入植当時の厳しい地域環境の中で、次代を担う子弟の教育を何よりも大切に考えた先人たちの献身的な努力により開校しました。以来、明治、大正、昭和、平成と激動する社会にあって地域と一体となり、教育活動が推進されてきましたが、今年度をもって閉校することとなりました。

二十八年度からは、卒業する三名は阿寒中学校へ、六名の在校生は統合する阿寒小学校児童として慣れ親しんだ校舎を後に、新たな一歩を進めることになります。徹別で学んだ様々な事を胸に、誇りと自信を持ち巣立ってほしいと思います。

今年は徹別での最後の一年を、心に残る思い出いっぱいの学校生活となるよう、取り組んでいます。

＜閉校式典に集まった新旧同窓生と９人の児童たち＞　平成27年11月８日

中徹別小学校は、平成の初めから始まる学校ボランティア、さらに平成九年から、当年設立の徹別ボランティアサークルと連携した活動に取り組んできました。また恵まれた自然環境や酪農等地域産業によるキャリア教育を軸とする体験活動を特色としています。今年も丹頂や白鳥が押し寄せる雪どけの春、ボランティア総会を皮切りに中徹別小学校ボランティア活動が始まります。さらにPTAの奉仕作業、地域全戸対象の古紙空瓶回収活動、徹別サイクリングと五月は地域の方々に触れ合う活動が目白押しです。



六月は、地域と共に閉校記念徹別地域連合大運動会を行ないました。毎年、地域に飛来する丹頂鶴の踊り「丹頂鶴音頭」からプログラムが始まります。例年にない活気あふれる中、児童が大活躍する運動会となりました。下旬には東京から八名のプロのオーケストラを招いた「閉校記念コンサート」を開き、地域の方七十人ほどが集まりクラシック音楽を楽しみました。

また地域の方に田んぼを作っていただき田植え・稲刈り・脱穀等米作りも行います。（とれた餅米を、冬のふれあい活動で餅つきをしてみんなで食べます。）七月はボランティアふれあい活動として、飽別にある阿寒シェル鉱業で化石発掘体験をしました。子供たちは、五百万年前のホタテ貝の三十センチもある化石を掘り大喜びでした。

七～九月は阿寒小学校と交流学習を行いました。仲良く勉強をしたり給食を食べたりと交流を深める中、阿寒小学校マラソン大会にも参加し、最後まで走り抜きトップテンに三名の児童が入る結果となりました。

十月は閉校記念学芸会として、児童の音楽・劇・阿寒太鼓の他に中学生や高校生・大人の卒業生も参加して器楽やゴスペルを演奏してくれました。百名近くの地域や同窓生が集い最後の学芸会を大変盛況で終えることができました。

十月末には最後の古紙空瓶回収を行い、児童は地域の方々に今までのお礼と感謝を伝えました。十一月には二百四十名の同窓生が一堂に会して、閉校式典が行われました。全国各地から集まった同窓生の語らいの中に、児童の演奏する阿寒太鼓が花を添えました。児童たちはまもなく牧草地等に飛来する丹頂鶴の分布調査を行い冬支度に入ります。

中徹別小での生活も残すところ四か月となり、名残を惜しみながらも様々な世代の地域の方々や、たくさんの同窓生と触れ合う中で今日も、頼もしく成長を続けています。

釧路市立仁々志別小学校

校長　大坪勝治

「緑の山脈つらなりて清き小川の　せせらぎは　平和の象徴　仁々志別…」と、全校児童十名の子どもたちは、元気に登校し、校歌を熱唱してくれます。校歌には、仁々志別の自然の豊かさ、先人の開拓魂が受け継がれんことへの強い願いが込められています。

仁々志別小学校は、今年度をもって閉校となり、来年度からは、阿寒小学校に統合されます。慣れ親しんだ学舎を去る子どもたちには、ふるさと仁々志別で学んだことに誇りを持ち、自信を持って巣立っていって欲しいと思います。ふるさと仁々志別のことをもっともっと知って、最高の一年にして欲しいと願っています。そこで、今年は「ふるさと発見　仁々志別！」と、スローガンを掲げて取り組んでいます。

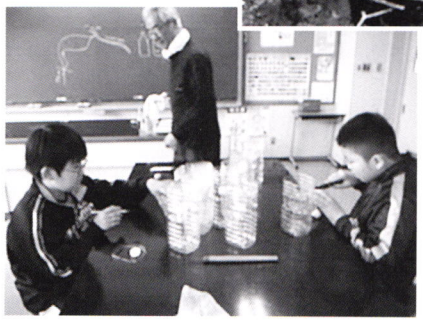
阿寒中学校のツルクラブの話は聞きますが、阿寒町地域の小中学校はツルの環境保護に関心は寄せています。今年も地域連合大運動会では、皆で「丹頂鶴音頭」を踊りました。近年、児童による活動は行っていませんが、毎年職員による「丹頂越冬分布調査」が行われ、自然豊かな仁々志別では、丹頂鶴はよく見かけます。

今年は、「ふるさと発見」のスローガンのもと、各学年で仁々志別での自然体験が多く行われています。低学年は、生活科で学校周辺を歩き、春・夏・秋と季節の変化を感じ取っています。

中学年になると、活動の幅が広がり、山の奥まで入り込み、清流を見つけては、季節の動植物への理解を広げています。地域ボランティアによるガイドで自分で採った山菜を天ぷらにして舌鼓を打つなどの楽しい活動もありました。

高学年（今年は六年生二名）になると、総合の活動を通して自然体験活動を行ってきました。地域ボランティアに協力を依頼して、年間の活動計画を立てて、探検・制作・飼育と、「ふるさと発見」の活動が充実しています。五月の始めには、鳥の巣箱作りをしました。何回かの練習を経て完成したドイツ式の巣箱は校舎前の木に設置されて、今も観察が続いています。

五月終わりころには、魚を捕るしかけ作りが始まりました。地域ボランティアから教えてもらった手作りのしかけは大成功。仁々志別の清流で捕った魚は教室で飼育されています。その後、清流での魚釣りも予想以上に釣れて笑顔で帰校しました。また、探索の中では、通常は難しいと考えられる「丹頂鶴のヒナ」の観察もできて、仁々志別の自然の豊かさを感じられます。



春から秋にかけ、全校児童が学年に応じてたくさんの体験活動をしてきましたが、「ふるさと発見」の活動は、まだまだ続きます。

山花小中学校

校長　中嶋治代

山花小中学校は明治三十四年、オンネビラ簡易教育所として開校し今年度で開校百十四年を迎えます。学校は酪農地帯に位置し、周囲には釧路市動物園や山花温泉リフレなどの施設があり、夏場には家族連れの多くの観光客で賑わっています。

このような豊かな自然に囲まれた環境と小規模校であることのよさを生かし、平成三年から学区外通学が認められた特認校となりました。

小学校は複式学級が三クラス、中学校は単式学級が三クラス、全校児童生徒数は二十四名です。その半数以上が校区外から保護者の送迎によって毎日通学しています。

朝、車で走っていると山花に近づくにつれ、牧草地にはタンチョウが優雅な姿で歩いていたり、大空を南から北へと飛翔している姿を見かけます。校舎周辺の木々にはアカゲラなどの野鳥やエゾリス、時にはエゾシカも迷い込んできて、石碑のあたりで膝を折って休んでいます。ここは野生動物にとっても癒しの空間なのでしょう。

山花小中学校は小規模ではありますが、だからこそできる特色ある教育活動が三つあります。

①小中一貫したきめ細かな指導

②栽培活動や動物飼育などの様々な体験活動

③夏の持久走や冬の歩くスキー等の体力づくり活動

この特色は特認校になってから二十四年経った今も大切に受け継がれています。

本校の特色の二つめに、作物を育て、収穫し、調理して試食するまで一連の栽培学習があります。

小中別に縦割り班を作り、収穫祭をイメージしてそれぞれに作物を育てます。小学生はまだ自分たちで畑に畝を作ったり苗を植えるのもうまくいきません。そこで地域の方や保護者の方が畑に来て子ども達のお手伝いをしてくれます。

地域のおじいちゃん、おばあちゃんは作物のプロですから、コツを伝授してくれます。若いお母さんは子どもと一緒に活動することで作物のことを改めて学んだり、共に働く楽しさを味わっていました。中学生ともなると育てる作物の栽培方法を調べることもしますが、地域の方の的確なアドバイスを受けています。

夏の暑い日も雑草取りや水やりの世話を継続することを通して勤労や責任を学び、収穫した作物を調理し、お世話になった地域や保護者に振る舞うことを通して、感謝や仲間との協力することの大切さを学んでいます。

また、小学校だけの活動ですが、本校

は動物園の協力のもとに、動物飼育体験学習を行っています。春、夏、冬の年三回訪問します。飼育員の指導のもと、飼育舎の中に入って清掃したり、果物や魚、ひな鳥などの餌やりを通して、生きることは命をいただくことを小さい頃から実感できる学びをしているのです。

動物園との関わりとして、四月になりますと、園内にある花壇に花の苗を植えに行きます。多くの来訪者を楽しませてくれるようにと願いながら小中学生全員が活動に参加しています。

平成二十三年、釧路市動物園は台北動物園との交流のため、タンチョウ「ビック」と「キカ」を寄贈することになりました。本校と動物園とのご縁から、その式典に本校の子も達も招かれ、「釧路市と台北との架け橋としていつまでも元気でいて下さい」と、タンチョウへの呼びかけを行うという貴重な体験をすることができました。

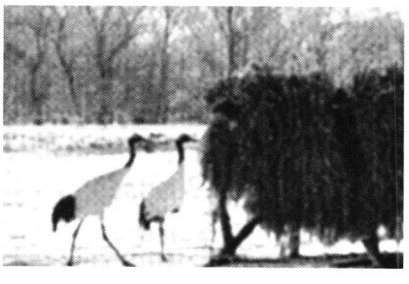
タンチョウといえば、本校も毎年行われる十二月のタンチョウ越冬分布調査に参加しています。調査場所は、山花神社前と二カ所の牧場付近です。小学一年生も先生と共に数を数えようと歩いていきますが、調査時間にタンチョウが観測できる機会に、なかなか恵まれません。

そのタンチョウを学校のグラウンドに飛来させたいと考えた校長先生がおり、平成二十一年から二年間、グランドににおを作りました。毎日デントコーンを蒔いたおかげで三羽の親子タンチョウが舞い降りたそうです。

しかし鳥インフルエンザの流行とその校長先生の退職によりにおが作られなくなっていきました。

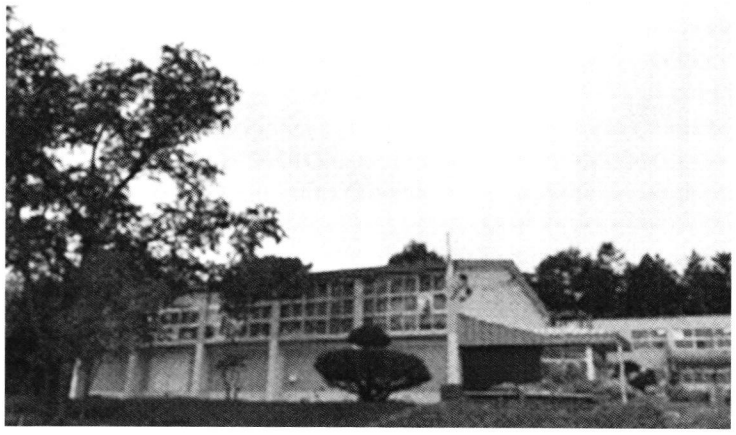
今でも休日や早朝など、時折一羽のタンチョウがグランドに下りて、南の草原へと歩いて行く姿を見かけます。

多くの野生動物たちが憩う山花の地にある学校として、これからも自然環境を守り育てる教育活動をしていきたいと思います。



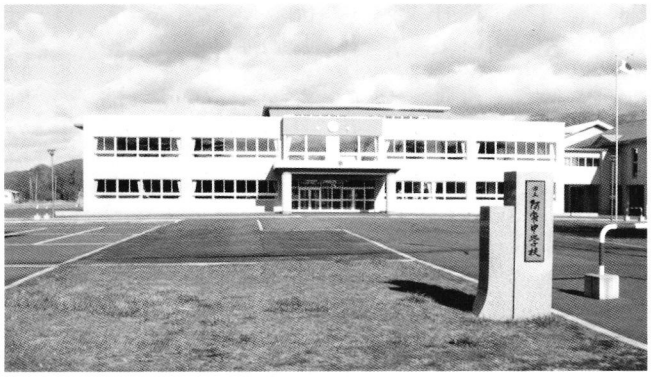
桜・ひまわりの花
にれの木・さえずる小鳥
輝く光を受けて
すくすくのびていく
優しく育て
きらめく瞳
豊かな自然の恵みをうけて
私たち生きている

＊開校百周年讃歌
「未来へ」より



阿寒町立阿寒中学校

校長　横田昌美



◇本校の教育指針

「鶴翔青雲」とは、昭和四十年に制定された阿寒中学校の校訓であり、学校教育目標でもあります。当時の鎌田　勉校長は、学校教育目標を、地域に密着する鶴の姿態や生活に表象して校訓を設定、これの具体化を目標とするとされました。

現在も教室に、この学校教育目標を掲示し、大空を天高く、そして、力強く飛んでいく一群のツルのように、大きな夢と希望と志をもち、現在・未来へ向かって羽ばたいていく生徒を育てることを目指しております。

・青雲の大志を抱こう
　青雲に向かって誇り高く翔く一群の鶴のように
・不屈の情魂を燃やそう
　厳寒の夜も不屈の情魂を燃やして、仲間の安全を警戒する鶴のように
・磨かれた教養を身につけよう
　果敢な活動をうちに秘め、しかも容姿端麗、挙動優美な鶴のように
・たくましい体をつくろう
　広原を疾駆し冬の河中に眠り、飢餓に耐えて王者の権威を守る鶴のように

また今年度、教育目標を日常の学校生活でより生かしていこうと、学校スローガンを制定しました。

「はばたこう！　ツルのように
ひとつになろう！　マリモのように」

鶴翔青雲にあるように、阿寒の象徴であるタンチョウツルのように、大空へ向かって羽ばたき、将来への可能性を追求しよう。そして、マリモのように、人と人のつながりを大切にし、一人一人が生き生きとするような集団を目指し阿中生がひとつになろうと、想いを込めました。

◇阿寒中学校と鶴のかかわり

昭和二十五年に阿寒町の山崎定次郎さんが給餌をはじめて以来、中学校周辺にもツルが姿を見せるようになっていました。

昭和三十二年春に赴任してきた大井健次校長は、市街地を飛ぶツルを見て、この美しい鳥を何とか生徒の教育に生かせないものかと考え、早速「ツルクラブ」を発足させました。

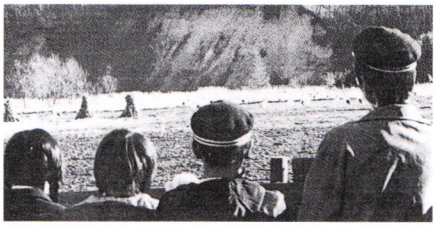
大井校長は「教育は空想や理想ではなく、じかに身にふれるものと取り組んでこそ」という信念であったと、「教師のツル日記」に綴っています。

ツルクラブはその十月に三十六名で編成、校下を十三地区に分けて持ち寄りのエサで給餌を開始し、同時に観察結果をツル日記として記録を続けました。生徒たちは観察や調査だけにとどまらず、トウモロコシ畑やドジョウ池まで造ってツルのエサの確保に取り組みました。その成果は昭和三十五年の「鶴の日記」や昭和三十九年の「日本の鶴」にまとめ、貴重な資料は全国から寄せられた善意の協力者にも送られました。

この実績は北海道知事表彰などの多くの賞をはじめ、昭和四十五年には名誉ある吉川英治賞に輝きました。

鶴と共に

栄ある吉川英治賞（S45・4）



一斉調査

鶴と阿寒中学校のあゆみ

鶴の歴史

かっては我が国にも多数見られたものと思われる。古来霊鳥として保護され歌にうたわれ絵画に描かれているところからも想像される。

一方長寿の瑞鳥として江戸時代には朝廷でも幕府でも年始の嘉例としてその料理に用いられている。この料理は「鶴の庖丁」として秘伝にされたものとして年中行事大成に載っている。鶴のめでたき鳥であることが鎌倉時代の歌謡に最も歌われ今様のめでたき舞に祝された。

源頼朝は鶴を高潔なる仙驥として天下のためにまた自らのために千羽の鶴を放って祝ったという。これが千羽鶴のはじめであると云われている。

これらのことから推しても建文の頃には我が国にも多くの鶴が棲息したと思われる。「和訓栞」に宝永の主上東山天皇新内裏へ還幸ならせたまう折鳳輩の上はるかに鶴の舞いかけたるを見て諸臣千年のためとして賀し物し奉ったという記事が見える。いろいろの点から相当数の存在が考えられるけれど維新当時濫獲された結果著しくその数を減じ現在では鹿児島県と山口県と北海道の釧路地方のみに見ることが出来るだけである。

釧路地方と鶴

北海道にも往時はたくさんの鶴が住んでいたものと思われる。この根釧原野にも住んでいたことがアイヌの伝説にもとりあげられている。

アイヌの人たちは丹頂鶴を湿原の神様と呼んでいる。昔手負いの熊が湿原に逃げこんでツルの長い首を下敷きにして死んでしまった。ツルは苦しさのあまりに悲鳴をあげた。それをききつけて集り熊を発見した。熊の居場所を知らせてくれたので神様として祭りあげたという。

またこのツルは飼われていたという伝説もある。いまの遠矢駅の近くに砦があってここに釧路アイヌの始祖キラウコロエカシが一対のツルを飼っていた。そしてその孫のカネキラウコロエカシの頃には相当にふえていた。

ところがクルンセと云う一族が攻めて来て国後根室をおとしいれて釧路へもせまって来たので厚岸北見十勝のコタンから援軍を求めて迎えうったが味方のなかに裏切者がいてエカシが部下の大部

◇停滞を余儀なくした保護活動

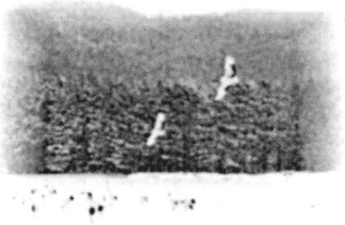
しかし、盛んだったタンチョウの保護活動も、昭和四十九年にはトウキビ畑が宅地造成の関係で栽培不可能になったことや、送電線によるタンチョウの事故死の増加により給餌が困難になったり、昭和二十七年から続いている十二月の恒例のツルの一斉確認調査への協力以外は活動が停滞しました。

◇新教育課程の中で

平成十一年総合的な学習の時間の取り組みの中で生徒からグラウンドに鶴を呼んでみたいという発想から鶴の保護活動が再開されました。

それ以降、タンチョウの給餌は、生徒会の委員会活動として行われ、「鶴特別委員会」として、担当は各学級より選出された十二名の生徒から構成され、一年間を通して活動しています。

春は、前年度の「にお」の撤去作業、保護者の方の協力でトラクターで畑を耕していただきデントコーン（トウモロコシ）の種まき、夏は間引き、雑草取りと追肥作業を行い、秋から冬にかけてはデントコーンの実の取り入れ、殻の刈り取り、「にお」作り、給餌活動を行います。十一月から二月にかけツルの家族が飛んできています。



タンチョウの一斉調査

◇鶴の阿寒中学校として

タンチョウが人里近くに舞い降り飛び立つ姿を頻繁に見ることができ、阿寒の山々を背景にしたその姿は、ひときわ美しく目に映ります。この光景があたりまえのように見えるそのことが阿寒中学校生徒をはじめ阿寒町の多くの人々にとって喜びなのだと感じます。今、社会は大きく変わろうとしております。今までのように経済優先、利便性を重視した都市型社会構成から、地球環境の大切さ、そして、すべての生物と共生できる優しい心を持った生き方が重視されています。その先取りともいえる、タンチョウの給餌保護活動が、六十五年近くも前に阿寒中学校と阿寒町の人々の心と行動で示されたことが、今日の阿寒中学校の教育の大きな礎石となっています。

今、阿寒中学校の生徒は落ち着いた学校生活の中でさまざまな学習に取り組んでいます。特に「鶴の保護活動」などを通して育った伝統ある校風を受けつぎ、地域の方々の協力のもと、故紙空瓶回収活動やボランティア活動など広い視野の中で自らの「生き方を」つかんでいってもらいたいという指導理念ですすめています。

分を引きつれて砦をはなれて戦っている間に敵の手に砦がおちてしまった。その時地上にそんな変事あるともわからず遊びに出ていたツルの群れがもどってくるとクルンセ族のために矢をいられて殺された。

この時釧路軍は引きかえし砦を取りかえしたが戦いが長びいたためツルは恐れをなして近よらなくなり遂いには野生にもどってしまったと云う。

◇こうした伝説をもちながらも明瞭な記録もなく或は絶滅したのではないかと思われていたのが大正八年頃の三月、堅雪の上で十羽位の丹頂鶴が舞をしているところを見た人があり残存していることが認められた。その後大正十二年に北海道庁の狩猟取締官だった斉藤春治さんが実際に調査され丹頂鶴のいることを確認して発表した。このことから再び丹頂鶴は世人の注目を集めるようになった。

◇渡り鳥と思われていたものが釧路地方に留鳥として定住し営巣していることも次々と発見されてきた。前に記したように日本の鶴の在所は全国で三カ所であるが鹿児島県と山口県の場合は完全な渡りである。従って日本で定住しているのは釧路を中心とした地帯だけであり、しかもそれが丹頂鶴である点から釧路地方の丹頂鶴は日本の鶴と称して過言ではない。やがて昭和十年八月二十七日に天然記念物の指定をうけ人々から保護されることになったが満洲事変を契機として日本が戦時に移行してからは、かえりみられず次第にその数が減少し山野にひそんでしまい人の目から遠ざかっていった。それが終戦と共に又里の方へ姿をみせるようになり人々の関心を集め昭和二十七年三月二十九日に特別天然記念物に指定された。保護の手も次第に密度を高めていった。

阿寒の鶴

◇雌阿寒岳や雄阿寒岳の頂きがうっすらと白くなる頃、真白な鶴の姿が青空に浮いて見えるようになる。

この鶴の飛ぶ姿をみてはああ今年も冬の訪れがやってくるのかと独り言が出る。どこからか今日は二羽あすは三羽とふえていく。あの三羽のうち一羽は幼鳥なのだろう。どこで生れたのか父なる鶴、母なる鶴にともなわれて阿寒の里へやってきたのだなあと、つくづく空を仰いでみる。

これからしばらくの間は鶴が私たちの友達になるのです。たくさん集るところと何羽かやってくるところとあり、たくさん集るところは四、五十羽もやってくる。親子だけでやってくるところもある。毎日同じようにやってくる。

日中はどこかへ飛んでいってたり、又途中で戻って来たりして夕方になると一斉に林の方へ飛んでいく。川辺や浅瀬の水の中に長い脚を立ててねむっている。朝になるとまたとんでくる。

こうして冬の間をすごした鶴は川の水もぬくもりを持ち雪も消えていく三月から四月の始めにかけて阿寒の里を去っていく。行く手は根釧原野の大湿原地帯である。容易に人も獣も近づくことの出来ない湿原のなかで水につからないところへ葦

の茎などを（主として葦である）折って巣を作りそこへ産卵する。卵は普通二箇の由。やがて雛が生れ親子の生活が始まる。水草や小魚や湿地の小動物を食べて生活し、やがて木の葉が散り湿原の水が氷に閉ざされ出すと阿寒の人里近くに飛んでくるのである。この生活をくりかえしているのである。

即ち、根釧原野を中心にその周辺の地域が生活圏なのである。やはり冬一番飛んでくるのが阿寒町である。だから私達は鶴は阿寒の里のものと思っている。

◇阿寒町丹頂鶴愛護会について

特別天然記念物に指定され又道鳥に指定された丹頂鶴の大多数が生息する阿寒町として、あくまでも鶴は私共のものと云う心の発露から生徒にのみその保護をまかせておくべきではない、町民の一人一人が保護し維持していかねばならないと、ここに阿寒町丹頂鶴愛護会が発足して活動している。

◇阿寒の鶴の一日　－生徒の記録から－

(イ)　朝

「タンチョウツルは宵っぱりの朝寝坊だ。だから僕たちが野ウサギを捕えるためにかけたワナを朝早く見まわりに出かける頃にツルはまだ寝っている。首はどこにあるかわからないように羽の下に入れているが、必ず見張りの鶴が何羽かいる。」と先輩の記録したツルの日記に書いてあるがツルのねぐらは川の中州を中心に凍らない場所に片方の脚をおりまげて胴につけ一本脚で浅い流れに立って寝ており日の出とともに家族単位で移動を始める。時には午前六時すぎまでいることもある。「起きろー」という合図のように朝のかん高い声が市街地までも聞える。

ねぐらを飛び立った二羽ないし三羽、時には四羽の親子づれが自分たちのなわ張りにしている土地へいくのもあるが多くは上阿寒の山崎定次郎さんの裏畑の給餌場へ集ってくる。だからここでは多い時には五十羽以上のツルの群れを見ることもある。

こうして七時頃から九時頃まで給餌場のトウキビをついばんで（ドジョウを貰うこともある）腹ごしらえをして自分たちのなわ張りへとんでいく。

(ロ)　昼

阿寒町では十月から翌年の三月まで日中に見るツルの群れで時に二家族三家族とより合っている群れもあるが、それでいてそのなわ張りの土地へ家族以外のはぐれた一羽ツルなど飛びこんでこようものなら、たちまち追い出されてしまう。

親子三羽でいる時には子ヅルを中心に畑に落ちている餌をひろって食べているが、いつも警戒心の強いのは雄のようで警戒しはじめるとまず雄が首をすっと立ててあたりを見渡し、次に雌が首をあげて人が近づくと反対の方向へ子ヅルをうながして遠のいていく。そして何かの拍子に危険を感ずると二、三歩大またに歩き出すようにして飛び上る。よほど驚くとその場から飛び上るがなにしろ四キロもある体重であるから普通は走ってから

飛び上る。あわててバランスのとれないまま飛び上る時、急に傾いてたりしておかしな飛び方をするときもある。

夕方になると家族そろって給餌場へもどり腹をふくらませる。この給餌場でみられる風景ではボスツルに気がねしてたべているものや、満腹で胃の運動をたすけるのか、ひくくはね上り、首の上下運動をさかんにしているものもある。

これを見てツルが感謝のためにお礼に舞っているのだなどという人もいる。

(ハ) 夜

午後四時すぎ頃、早い冬の夕暮れがたちこめるとツル達は阿寒川と舌辛川のねぐらへ移動をはじめるが、その移動時刻は天候や、その日の食物の量などによってかなりおそくなる時もあり暗くなってから飛んでいくこともある。これを見るとツルは鳥目でないようである。

ねぐらへたどりついたツルは、しばらくカン高くなきかわし、やがて静かになる頃ねむりにつくようだが、この時はもとの渡り鳥であった頃の習性にもどるようだ。何羽かのツルが見張りについて、あとはたたんだ翼の間に首をつっこんで片脚で浅瀬に立ち川の流れに静かにほんのりと白さを夜目に浮きあがらせている。これが月明かりでくっきりとその姿をあらわしているところは本当に神秘的である。

こうして外敵から身を守る最適の場所に、しかもおたがいに助け合っている。

私たちと鶴とのあゆみ

(1)**昭和三十二年** －大井校長－

◇ 大井校長が青空を飛ぶ鶴の姿を見上げて、いまにして愛護の手をさしのべねばと思いツルクラブを作る。クラブ員は給餌と観察を始める。

◇ 十月から校下を十三区にわけて観察日誌をつける。

◇ 十二月の一斉調査で六十三羽をみとめる。

(2)**昭和三十三年**二月大正以来の大雪のため餌に困ってたおれる鶴がでてきたのでクラブ員はスキーによる給餌に追われた。

◇ 四月これまでの観察記録をもとに丹頂鶴の作文をかく。

◇ 五月丹頂鶴の愛護校として道知事の表彰を受ける。

◇ 十月神戸市で開催された全国中学校長大会に大井校長が出席、ツルの日記を発表する。

◇ 十一月ツルの日記が野鳥観察記録として入賞する。

◇ 十二月の一斉調査で確認七十羽。

(3)**昭和三十四年** －一戸校長－

◇ 四月一戸校長着任して仕事を引継ぐ。

◇ 十二月の一斉調査で確認八十九羽。

(4)**昭和三十五年**一月鶴の習性研究の結果、給餌場所を二ヵ所にする。

◇ 二月「ツルの日記」の出版にとりかかる。

◇ 三月鹿児島県野田中学校とツルの研究姉妹校となる。

◇ 五月「ツルの日記」を発刊する。

◇　十月標本によるツルの研究、給餌場所造り観察場所つくりを行う。
◇　十二月の一斉調査で確認百一羽。
(5)**昭和三十六年**三月野田中学校と資料の交換並びに特産物の交換を行う。
◇　十二月の一斉調査で校下確認八十二羽。
(6)**昭和三十七年**二月スウェーデンの探検家ベルクマン氏来校、ニューギニヤの風俗スライド上映、ツルクラブ員と懇談する。
◇　三月キューポラのある街の原作者早船ちよさん来校、ツルクラブ員と話合う。
◇　五月ベルクマン氏にツルの生活画を送る。
◇　十月自然公園の餌不足を知り、小魚をとっておくり、管理人の高橋さんと共同研究する。
◇　十月山口県八代中学校（現在熊毛中学校）と姉妹校となる。
◇　十二月野田中学校、熊毛中学校へツルの資料を送る。
◇　十二月の一斉調査で確認百二十羽。
(7)**昭和三十八年**十月給餌場所を町の給餌場所に限定し観察に重点をおく。
◇　十二月の一斉調査で確認七十四羽。
◇　十二月札幌医大に入院中の大井先生をツルクラブ員が見舞いツル便りを送る。
(8)**昭和三十九年**一月ツルクラブの活動がＮＨＫこちらワンパクテレビ局の電波にのって全国に放送され、それによってツルの餌が続々と届き、給餌活動が活発となる。
◇　二月礼状にタンチョウツルの里というパンフレットを送る。
◇　三月タンチョウツルの校内展を開く。
(9)**昭和三十九年**四月　－鎌田校長－
◇　四月鎌田校長着任、引継ぐ。
◇　五月ツル基金を基にドジョウの養殖池を作りツルクラブ員がドジョウを放流する。
◇　八月標茶町シラルトロ湖でツルの生息調査を行う。
◇　十月ドジョウ養殖池付近に給餌場所をつくり給餌する。
◇　十二月の一斉調査で確認六十七羽。
◇　十二月「日本の鶴」を発刊、お礼に全国にくばる。
(10)**昭和四十年**一月ツル給餌校交流会が下雪裡小学校で行われ参加する。
◇　四月校訓として「鶴翔青雲」を設定する。
◇　五月愛鳥週間にさきがけて学校の裏林に二十箇の巣箱をつける。
◇　八月ツルクラブ夏季研修を釧路市立郷土博物館で行い、正富館長の指導をうける。
◇　十月給餌活動を校下九ヵ所に分けて行う。
◇　十月アメリカの鳥類研究家ウオーキンショワ夫妻来校する。
◇　十二月の一斉調査で確認八十二羽。
(11)**昭和四十一年**一月第一回丹頂祭を開く、併せて給餌校の交流会を阿寒で開く。
(12)**昭和四十一年**四月　－三原校長－

◇　四月三原校長着任引継ぐ。
◇　四月愛鳥週間にちなんで野鳥研究家永田洋平氏を招いて講演をきく。
　午後ツルクラブ員と懇談する。
◇　六月ツル公園を訪れ管理人の高橋さんからツルの話をきく。
◇　十月阿寒町開基八十年式典でツルクラブ員表彰を受ける。
◇　十一月愛知県の片山さんからドジョウ六十キロが送られて来た。
◇　十一月一斉調査十五周年記念式典でツルクラブ表彰される。
◇　十二月の一斉調査で確認八十羽。

(13)昭和四十二年三月第二回丹頂祭に茨城県小松小学校、山口県熊毛中学校を招待し両校と交流会を行う。

◇　四月生徒全員が一人一人愛護の意識をもって集団としての愛護活動を行うため在来のツルクラブを解消して各学級にツル委員をおき、生徒会にツル委員会を設置する。
◇　五月餌の外部依存を排除して自らの手で餌を作り汗のにじむものを給餌するために十アールの荒地を拓いてトウキビ畑とし全校生徒の手で播種する。
◇　七月野鳥の習性と観察の要領について講演をきく。
◇　十一月ツル愛護活動十周年を記念して行事を行う。
◇　十二月町内タンチョウツルを守る子どもの集いに代表四十名参加する。
◇　十二月の一斉調査で確認九十八羽。

(14)昭和四十三年四月ツル委員第一回の会合を行って本年度の活動について計画する。

◇　五月委員代表でツル公園を訪ね管理人の高橋さんから公園のツルについて説明をきく。
◇　六月全校生徒で給餌畑にトウキビを播種する。
◇　六月ドジョウ池の整備をする。
◇　六月ドジョウや小魚をとってツル公園にとどける。
◇　十月ツル委員でトウキビの収穫を行う。
◇　十月小松小学校からトウキビがとどく。
◇　十一月片山さんからドジョウがとどく。
◇　十二月リーダースダイジェスト社アジア局長来校、ツルの記事取材する。
　（一月号に登載される）
◇　十二月の一斉調査で確認七十二羽。

(15)昭和四十四年四月中学校で使用の教育出版社版国語教科書に「ツルの日記」から選出登載される。

◇　六月給餌畑の播種を行う。本年度活動計画をたてる。
◇　八月ツルクラブ生みの親大井校長死去する。
◇　九月ドジョウ池を整備する（周囲の立木伐採のためひどくあらされていた）
◇　十月小松小学校からトウキビ百キロ送られてくる。
◇　十二月の一斉調査で確認百二十一羽（調査開

始以来最多数をかぞえる）

（ＮＨＫから全国放送される）

⑯**昭和四十五年**三月第四回吉川英治賞授賞校に選出された旨の通知あり。

◇　四月吉川英治賞授賞式へ出席のため学校長生徒代表男一女一を引卒して上京する。四月十一日受賞する。

◇　四月学校長から受賞についての状況報告がなされる。

◇　四月十五日北海道放送から表彰される。

◇　五月吉川英治賞受賞記念講演会を開催。講師としてツル公園管理人高橋さんに来校してもらう。ツルの記録（卵から雛へ雛から幼鳥までの）を映写しながら説明をきく。席上代表生徒から受賞報告あり。

◇　五月吉川英治展札幌で開催され招待をうける。田中教諭ツル委員長若林良恵をつれて出席する。

◇　六月給餌畑の播種作業を全校生徒で行う。ＨＢＣで撮影する（ツルと共に）

◇　八月ＨＢＣで放送「ツルと共に」を

◇　八月ドジョウ池の整備を行う。

◇　九月末に給餌畑のトウキビを収穫する。

◇　十月新校舎落成開校二十三周年記念行事の際「ツルの資料展」を開催する。

－ツル委員の手で整理して－

◇　十一月トウキビをツル委員の手によって飛来箇所に運び散布する。

◇　十一月観察記録を開始する。

◇　十二月の一斉調査で確認八十四羽。

⑰**昭和四十六年**一月在来発刊された「鶴の日記」と「日本の鶴」を補完するためと資料集成のため発刊を企画着手する。

◇　四月ツル委員会活動計画作成。

◇　給餌畑の播種作業を全校生徒で行う。

◇　ドジョウの養殖のための観察開始。

◇　舌辛川からウグイをとり養殖のための観察開始。

◇　タンチョウツル愛護週間（ポスター、詩、作文、標語募集）

◇　トウモロコシの収穫。

◇　小松小学校よりトウキビが送られてくる。

◇　十月タンチョウツル「給餌畑」に来てえさをついばむ。

◇　十月文化祭「ツルコーナー」で、標語、ポスター、資料展。

◇　十一月舌辛川からウグイをとり山崎さんの池に放流。

◇　十一月ウグイの給餌の実験を行なう（ＮＨＫＴＶ放送）

◇　十一月フジテレビ、日本テレビ「阿寒の里」を撮影

－ツル委員会の活動を中心に－

◇　十二月一斉調査、校下確認数五十一羽。

⑱**昭和四十七年**四月　ツル委員会活動計画作成

◇　五月トウモロコシの播種（一、二年）観察記録の開始。

◇　六月ツル資料の整理、タンチョウのはくせい

一羽。

◇　九月全校生の、ツルの愛護に関するポスター展を開く。
愛護普及運動、タンチョウパレードに全校生参加　－各学級のアイデアを生かして、プラカード、旗、など製作－
タンチョウ愛護思想普及のため、「滅びゆく野生の詩」の映画鑑賞
トウモロコシの収穫

◇　十月舌辛川からウグイをとり、山崎さんの池に放流。

◇　十二月一斉調査、校下確認数六十羽。

(19)昭和四十八年四月　ツル委員会活動計画作成

◇　五月給餌畑播種（一、二年）

◇　六月ツル資料整理

◇　八月東神楽中学校三年修学旅行の途中、ツルについての説明を聞きに来校。

◇　九月愛護普及運動タンチョウパレードに全校生参加。

◇　十一月全校タンチョウのポスター展を開く。

◇　十二月一斉調査、校下確認数七十九羽。

(20)昭和四十九年五月　ツル委員会活動計画案作成

◇　五月公営住宅地造営工事のため、給餌畑の作付不可能となる。

◇　八月愛護普及運動タンチョウパレード全校生参加

◇　十二月一斉調査、校下確認数六十七羽。

給餌と愛護、開始以来主として手がけて来た先生方

△沢出喜代志先生　△畠山軍司先生
△塩梅祥次先生　△伊藤博通先生
△佐々木勉先生　△大山　昇先生
△田中博昭先生　△松川利雄先生

現在の活動体制と仕事

学校長 － 分掌教師 － 指導教師 － 担任教師
←　←　←
生徒会 ↓↑ 鶴委員会 ↓↑ 学級鶴委員
－　－　－
（学校としての活動審議）　（企画・学習・中間審議・実施）　（学級としての意見を・日常実動）

北海道新聞社提供　岩松健夫氏撮影

(21) 昭和五十年～平成十六年

◇ 五月　ツル委員会活動計画案作成
◇ 六月～　デントコーン栽培
◇ 十月　丹頂の里千年祭（活動発表）
◇ 十二月　一斉調査　ニオづくり

阿寒中学校活動記事

ツルと子供たち

釧路市から北へ二十㌔、阿寒岳のふもとの町や村にはことしも赤いベレー帽をかぶったタンチョウヅルが美しいつばさをひるがえしてやってきました。阿寒小の子供たちは半年ぶりで姿を見せたタンチョウヅルに大喜びです。

子供たちに見守られて楽しそうにエサをついばむツルの群れ

『ホラ、そっちへ逃げた』とツルのエサのドジョウを追う子供たち―阿寒中のドジョウ養殖池で

学者顔負けの専門的な研究をする阿寒中の生徒たち

こども

15年前から仲よし
クラブを作って観察、保護

ツルが人里にたくさんやってくるようになったのはトウモロコシなどのエサがあるし、それにもましてやさしく迎えてくれる子供たちがいるからです。

でも、ツルと子供たちは初めから仲よしだったわけではありません。農家の人たちは『一生懸命につくった作物を荒らす悪い鳥だ』とツルの姿を見ると追いはらう人がいました。このため、ツルは白一色の雪原に取り残され、一羽、二羽と飢え死にし、人里に美しい姿がみられるのも少なくなりました。

『このままではツルがかわいそう。いまに一羽もいなくなってしまう』とだんだん減りはじめたタンチョウヅルのことを知った農家の人や動物好きの子供たちが中心になって保護に乗り出しました。

阿寒町の"ツル一家"で知られる山崎定次郎さん(七〇)の家族は十年以上もツルにエサを与えています。子供たちがツルにエづけを始めたのは二十七年二月、釧路地方一帯が猛ふぶきに襲われ、人里も原野も真っ白な雪でおおわれた朝、鶴居村幌呂小の子供たちが寒さにふるえながらエサをさがすタンチョウヅルの一群を見つけたときからです。子供たちが雪におおわれた裏の畑にトウキビを撒くと、ツルたちははじめのうち用心深そうに遠くからながめているだけだったのが、しばらくするとやせ細ったからだをひきずるようにして近づき『クワッ、クワッ』とのどを鳴らしておいしそうに食べるようになり、そしてこれが仲間のツルたちにつたわったのか、翌日からツルの数がふえ、とうとう冬になるときまってエサを求めてやってくるようになりました。

『ぼくたちがきちんとエサをやれば、ツルは畑を荒らさなくなるだろう』―阿寒小や阿寒中、そして隣の鶴居村の小、中学生たちが競争でエサまきをはじめました。毎朝、学校へ行くときにトウモロコシをツルの来そうな雪原にまきました。こうしてタンチョウヅルはだんだん子供たちや村の人たちになついていったのです。そしていまでは人の姿を見ると二十㍍ほど近づいて、美しい"ツルのダンス"を見せてくれます。羽根をいっぱい広げ、首を上下に動かして、まるで『おいしいエサをいつもありがとう』とおじぎをしているようです。やさしい子供たちに守られて人里にくるツルはどんどんふえてきました。二十七年の一斉調査で三十三羽だったのが、三十三年には六十一羽、そして最近は百六十羽もいることがわかりました。

三年前、北海道はひどい冷害に見舞われました。凶作―人びとは自分たちの食べものにもことかき、とても苦しみました。トウモロコシの出来も悪く、ふえたツルのエサにもこと欠くようになりま

のときからツルの大好物のドジョウを毎年、二万匹も送ってくれるようになりました。全国のよい子たちからもどんどんエサがくるようになりました。でも、ときき、ツルと白鳥を雨迎えて窓ガラを送ってくる友だちもありました。そして、ことしは阿寒町のタンチョウヅル愛護会のおじさんたちが中心となってトウキビ一握り運動が十一月いっぱい行なわれており、"ことしはツルに腹いっぱいごちそうしてやるんだ"と子供たちは張り切っています。"ツルの学校"で知られている阿寒中の生徒も『ツルクラブ』という愛鳥サークルをつくり、観察のかたわら暖かい保護の手をさしのべてからもう十年以上になり、毎年十一月から翌年の四月まで生徒一人一人がツルの生態を見守りつづけた記録・ツル日記はもう三尺近くの高さになって積み重ねられています。こうしたツルをかわいがる子供たちのつどいが昨年に続いてことしも十二月三日阿寒町で開かれます。ツルの大好きな子供たちが

昭和四十二年十一月二十九日付　北海道新聞掲載

(22) 平成十七年～二十五年

◇ 五月　ツル委員会活動計画案作成
◇ 六月～　デントコーン栽培
◇ 八月　鹿児島県出水市立荘中学校、同高尾野中学校との鶴交流
◇ 十月　丹頂の里千年祭（活動発表）
◇ 十二月　一斉調査　ニオづくり

(23) 平成二十六年

◇ 五月　ツル委員会活動計画案作成
◇ 六月～　デントコーン栽培
◇ 八月　鹿児島県出水市立荘中学校、同高尾野中学校との鶴交流
◇ 十二月　一斉調査　ニオづくり
◇ 二月　丹頂の里千年祭（活動発表）

(24) 平成二十七年

◇ 五月　ツル委員会活動計画案作成
◇ 八月　鹿児島県出水市立荘中学校、同高尾野中学校との鶴交流

鹿児島県出水市立 荘・高尾野中学校との交流会

平成二十六年八月二十二日

阿寒中学校、鶴特別委員会委員長の梶谷龍平です。

僕たち、阿寒中学校鶴特別委員十二名は、一年間を通して、タンチョウの保護活動をしています。それではこれから、タンチョウの生態と、鶴特別委員会の活動について発表します。

スライドは、新しいスライドと古いスライドが混じっていますのでご了承ください。

僕たちの住んでいる釧路市阿寒町には世界的にも貴重な二つの特別天然記念物があります。それは「マリモ」と「タンチョウ」です。二つとも昭和二十七年に、国の特別天然記念物に指定されました。

タンチョウは、大正時代には絶滅したと思われた時期もありました。原因は、明治時代の近代化により、繁殖地である湿原が失われたことと、乱獲されたことがあげられます。しかし、大正十三年、釧路湿原の奥地で十数羽のタンチョウが奇跡的に発見され、絶滅はまぬがれました。

このグラフは、昭和に入ってから現在までの、北海道におけるタンチョウの生息数の推移です。昭和初期は、数十羽のままで推移していましたが、昭和二十五年に阿寒町に住む山崎さんが、日本で初めてタンチョウの給餌を成功させて以来、徐々に個体数は増えてきています。平成十五年には八百羽を超えるようになりました。いろいろな方法でタンチョウの保護活動がされていますが、最近ではもう繁殖地が満員なようで、個体数の増加は頭打ち状態です。

タンチョウは渡り鳥とは違い、一年中北海道内で過ごします。春から夏にかけては、子育てのため、釧路湿原などの湿原の中で過ごし、エサの少なくなる冬は、阿寒や鶴居の給餌場で越冬します。しかし開発などの影響で、繁殖のための湿原が減少してしまったため、いまだにタンチョウは絶滅の危険があり、特に冬などは人間の手で給餌をしないと生きていけない状況です。

冬の間、タンチョウは給餌場にやってきますが、一日中給餌場にいるわけではありません。昼間は給餌場にいますが、夜になると、暖かく、外敵に襲われにくい、川の浅瀬などに移動します。

タンチョウは雑食性なので何でも食べますが、おもに昆虫やザリガニ、タニシ、カエル、ミミズ、小魚、木の芽、ドングリ、トウモロコシなどを食べます。冬の給餌場では、ウグイなどの小魚や、デントコーンをまいています。

タンチョウは「にお」を目印にやってきます。「にお」とは、デントコーンのくきを円すい状に積み上げたもので、タンチョウは「にお」のまわりにエサがあることを知っているのです。

阿寒中学校でも冬の間、給餌のため、グラウン

ドに「にお」をつくり、そのまわりに、えさとなるデントコーンをまいています。

それでは、僕たちの阿寒中学校での、タンチョウの給餌活動の歴史を簡単に説明します。

昭和二十五年に、阿寒町の山崎さんがタンチョウの給餌をはじめて以来、中学校周辺にもタンチョウが姿を見せるようになり、昭和三十二年から阿寒中学校植林地での給餌と観察がはじまりました。

最初はトウモロコシなどをまいていたのですが、やがてドジョウなども養殖してあたえるようになりました。学校では「ツルクラブ」も創設され、観察活動や保護活動も盛んに行われ、タンチョウの分布や個体数の調査も行われました。

それらの活動は「鶴の日記」「日本の鶴」などの本にまとめられ、全国に配られました。また昭和四十五年にはそれらの活動が認められ「第四回吉川英治賞」を受賞しました。

盛んだったタンチョウの保護活動も、昭和四十九年には住宅地の造成や、送電線によるタンチョウの事故死の増加により、給餌が困難になり、途絶えてしまいました。しかし、平成十一年、私たちの先輩が、総合的な学習の時間で、タンチョウの餌付けを二十五年ぶりに復活させました。

それ以降、タンチョウの餌付けは委員会活動として行われ、「鶴特別委員会」として一年間通して活動しています。それでは僕たち、鶴特別委員会の一年間の取り組みを紹介します。

まず四月、グラウンドの雪が解けるとともに、前年度の「にお」を撤去します。

五月は、タンチョウのえさや「にお」をつくるためのデントコーンの種まきをします。デントコーンは地域の方の協力も得ながら、グラウンドの端の畑で栽培しています。

六月から七月にかけて、芽の出てきたデントコーンを、より大きく成長させるために、成長の悪い芽の間引きをします。

また、たくさん雑草も生えて来るので、雑草を手で抜いて、より大きく実らせるために肥料を追加します。

十月はデントコーンの収穫の時期です。デントコーンを刈り取って「にお」をつくります。

実（み）は干して、十分に乾燥したら手でほぐしてタンチョウの餌にします。

十一月いっぱいは、まだグランドを使っているので、それまでは乾燥して保存し、十二月になったら、グラウンドに支柱を立て、そのまわりにデントコーンの茎を円すい状に積み上げ、「にお」を作ります。

しかし、タンチョウのえさはこれだけでは足りないので、地域の農家の方にも、牛のえさ用のデントコーンを寄付してもらっています。今年は学校の畑でのデントコーンの発育が悪く残念ながら

ほとんど実りませんでした。

初雪が降る頃、タンチョウはグラウンドがやってきます。冬になり、湿原にはエサがなくなってくるため、雪が降る頃、給餌場所に来るのです。このころはまだエサをまいていませんので、タンチョウは「にお」についているデントコーンの実をついばんでいます。

十二月初めには、丹頂一斉調査があります。一、二年生生徒がバスや徒歩であらかじめ指定された場所に行き、午前九時きっかりにそれぞれの場所にいる丹頂鶴の数を確認します。

釧路根室管内でだいたい千羽の鶴が観測されています。

寒いし、雪などが降ると視界も利かなくなるので大変な作業ですが、何十年も前からずっと続けられている調査です。グラウンドが一面雪でおおわれると、タンチョウは毎日やってくるようになります。このころからエサまきを始めます。

エサまきは毎日、交代でおこないます。「にお」のまわりに、バケツの半分くらいの量のデントコーンをまきます。休みの日などは先生方にも手伝ってもらいますが、基本的には、鶴特別委員会のみんなで分担して、春に雪がとけるまで、毎日エサをまきます。

タンチョウは非常に縄張り意識が強く、グラウンドには一つの家族しかやってきません。ほかの家族が来ても追い払ってしまいます。一家族三～四匹と、グラウンドに来る数は少ないですが、大きな翼を羽ばたかせ、いつも優美な姿を見せてくれます。

こうして、エサまきは三月まで続けられ、タンチョウは湿原へと帰っていきます。そして僕たち鶴特別委員会の一年間の活動も終わります。

僕たちはこの活動を通して、タンチョウの美しさや地域の人々の暖かさ、そして自然を守ることの大切さを学び、さらにはこのタンチョウの里阿寒に誇りを持つようになりました。いろいろと苦労は多いのですが、この取り組みは阿寒中学校の伝統的な取り組みとして、後輩たちにも引き継ぎ、ずっと続けていきたいと思います。

以上で、タンチョウの生態と僕たち鶴特別委員会の一年間の活動についての発表を終わります。

ツルの保護活動
（デントコーンの栽培から給餌まで）

《現在の活動体制と仕事》

学校長―生徒指導部―生徒会

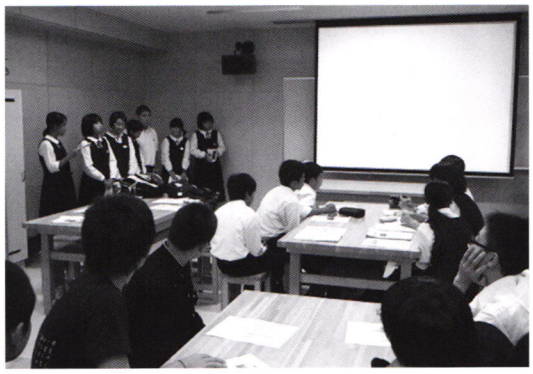
―

鶴特別委員会

仕事～エサづくり、ニオ設置、エサやり、出水市との交流、一斉調査の協力、阿寒町千年祭での活動発表

※エサづくりはデントコーン栽培の不作が続いているので休止中です。

阿寒町千年祭（活動発表）

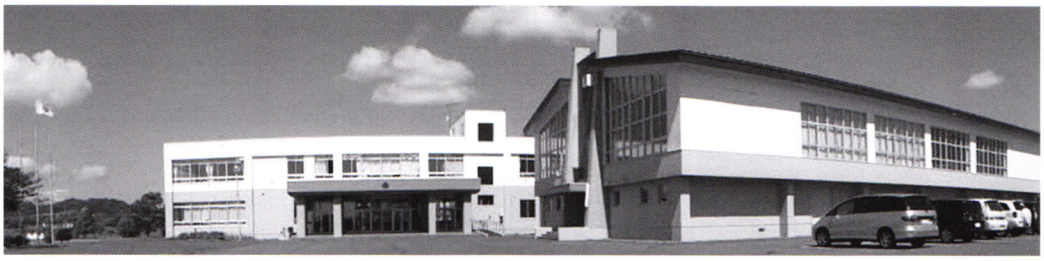


ツル交流（発表・交流）

ツル交流（平成26年８月22日）
（鹿児島県出水市立荘中学校・高尾野中学校）

釧路市立音別中学校

校長　福原　聡



音別中学校は、釧路市の西、旧音別町の中心にある学校です。平成二十七年四月現在、生徒数は三十五人と少なくなってしまいましたが、教育に熱心な地域にも支えられ、子どもたちはぐんぐん成長しています。

音別中と鶴との関わりですが、恥ずかしながら、この記念誌への寄稿の話をいただいたときに初めて、「音別にも鶴がいる」と言うことを知ったという状態でした。

話を聞いた後、すぐに車を走らせて中音別方面に向かってみると、なんと、ほんとうにすぐそこの牧草地に、鶴がいるではありませんか。しかも、ひとつがいだけではなく、たくさん！　もう、びっくりです。

その日以来、鶴の存在が気になるようになってきました。ある朝には、ほんとうに校舎の上を飛んでいく鶴の姿を見ることができましたし、その声も、校長室にいてはっきりと聞くことができました。

こんなに身近に鶴の姿を発見できるし感じることができるのに、実は学校の中にも鶴の存在を感じさせるような物はなく、また、そういった記述をしている冊子も、学校中探してみたけれども見つかりません。ということは、以前はそんなに「音別に鶴」の存在は意識されていなかったのか、それともあまりに当たり前に居すぎて、あえて取り上げるまでもなかったと言うことなのか…。

※　今回、一年生が鶴の話題を壁新聞で取り上げましたが、実はそれくらい、子どもたちの中にも「音別の鶴」の存在は大きかったようです。

※　ある日ふと目にした（平成一六年発行）「第三次音別町総合計画」の中には、ごく当たり前のように丹頂の写真が載せられていました。また、環境保全に向けた施策の中に「自然環境の保護」として、丹頂（を含めた希少動物）の保護というのが明記されていました。びっくりです。

現在私たちの暮らす社会は、グローバル化の一途をたどっています。そんな中、私たちは自分の住んでいる地域を、日本や世界に対して発信できる力が必要です。（どこにあるか、だけではなく、その特徴を自信を持って紹介できる力を持ちたいものです。）

私たちが「音別」について何をアピールするか考えたときに、これだけ当たり前のように存在している丹頂のことを抜きに語ることはできないでしょう。この先、子どもたちが自分たちの住んでいる地域を知る学習の一つとして、何らかの形で丹頂について学び、関わっていく教育課程づくりはできないものか、そういう思いを巡らせているところです。

車を走らせるとすぐに、
このような風景が
見られます！

中音別にて
（H27,９,16）

平成27年度　１学年の壁新聞が丹頂を取り上げました。

朝夕、ふと見上げると、校舎の上を鶴が飛んでいく。「そういえば、音別にも丹頂がいるのに、学校ではほとんど話を聞いたことがない。どういうことだ？」と思ったのが、今回の記事を書こうと思ったきっかけです。（壁新聞編集長）

光輝
I中A
音別

音別にもタンチョウ!?

皆さんは、知っているだろうか？世界には、鶴が15種類いることを。その中の1種類が、日本、ロシア南東、中国、韓国にいる丹頂鶴だ。丹頂鶴の特長は全長125～152cmで翼を広げると240cmにもなる。頭頂には羽毛がなく、赤い皮膚が裸出している。そもそも丹頂とは丹（赤い）頂（頭頂部）からきている。丹頂鶴の生息地は、湿原、湖沼、河川などだ。釧路には、丹頂鶴の90％以上が生息していると考えられる。丹頂鶴は、冬になると餌を求めて給餌人の所へ、やってくる。給餌人とは、鶴に餌をあげる人のことだ。この鶴の事について、行政センターの十河さんにお話を伺った。鶴が居る場所と言えば、鶴居村、阿寒町が思い浮かぶだろうが、実は昨年の統計でいえば、音別町がそれに次ぐ3位の地域である。なぜ、鶴居村・阿寒町にたくさん鶴がいるかというと、元々の生息地であったり、給餌人がたくさんいるからだそうだ。私たちの町、音別町にも給餌人が二名いる。そのニ名のうち、一名が高橋さんという。高橋給餌場では、標識個体の観察から十勝方面からの鶴の来る数が多いことがわかっている。北海道と連携し給餌場への移動期間（九～十一月）に餌をあげている。音別では音別川河口付近の湿地で見られる。

丹頂鶴は狩猟による乱獲や生息地である湿地の開発などにより江戸時代後半から明治時代にかけて激減し、一時は絶滅したものと思われたこともある。そこで特定天然記念物に指定された昭和27年から毎年、タンチョウ越冬分布調査というものを行っている。この調査は、餌を求めて来た鶴の羽数を数えたものである。昭和27年の第一回調査では33羽しかいなかったが、平成26年の第一回調査では、1187羽にまで増えた。地域住民の保護活動や給餌人の方たちの努力もあり丹頂鶴の数が回復してきたと言える。

音別中学校の校舎の上の空を飛んでいる姿や河口付近に居るところを見かける。その姿は美しく普段何気なく見かける風景であるが私たちは恵まれた環境であるのだと思う。私は、鶴がもっと住みやすい環境にしていきたい。これからも、鶴にとっても私たちにとっても過ごしやすい音別にしていきたい。

〈鶴のおはなし〉

釧路市動物園 園長補佐　**松　本　文　雄**

11月に入り、給餌場での給餌も始まりました。

今年はツルセンター前のビオトープで餌まきを始めました（12月前には、通常の観察センターに餌をまく予定です）。ただし、なかなかタンチョウが集まりません。今の所、５，６羽程度のツルが時折、飛来しますが、ずっと居つくことはありません。

今年は、例年よりも暖かく、繁殖地からの移動が、遅くなっていることと、秋の暴風雨の影響で、飼料用のトウモロコシ（道東は酪農が主体で、牛用のトウモロコシを栽培しています）の茎が倒れて、収穫できないまま放置されたところも多く、そこがツルにとって良い餌場になっていることなどによると思います。雪もようやく降り始めましたので、これから徐々に数も増えてくると思います。北海道のタンチョウは1500羽を超えるほどまでに数が増えてきており、生息域も少しずつ広がってはいますが、未だに道東地域（釧路・根室・十勝）に集中しています。

越冬地も鶴居の二つの給餌場（鶴居伊藤タンチョウサンクチュアリ、鶴見台）に約600羽、阿寒の給餌場に約270羽と、半数以上が阿寒・鶴居にいます。

タンチョウの安定した生息を考えていく上で、生息地の分散化ということが、以前から考えられてきました。環境省では２年前に「タンチョウ生息地分散行動計画」を策定して、タンチョウ生息地を、北海道一円に、さらには本州まで広げていくことを提案しています。

まず、その取り掛かりとして、環境省が管理している給餌場（阿寒と鶴居の２か所）で給餌量を減らして、タンチョウが、他の生息地に広がっていくかどうかを調べていこうとしています。今年から５年計画で、１割ずつ減らしていく予定です。今後、タンチョウがどのように動いていくのか、注意して見守っていきたいと思います。

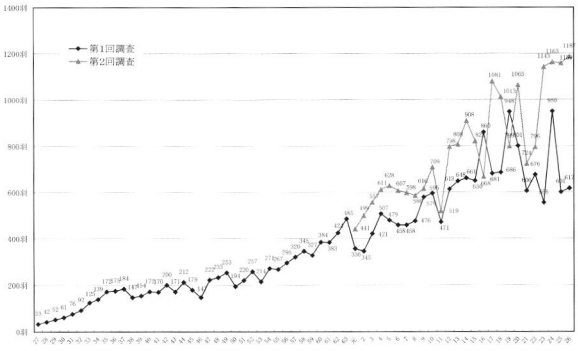
資料

『愛護会50周年特別課外授業①』

■回復した生息数 絶滅の危機乗り越えて、約一二〇倍に！

人間が足を踏み入れることができなかった釧路湿原がタンチョウを絶滅から守ったのです。

この奇跡が「タンチョウ物語」始まりです。昭和十年、タンチョウは天然記念物に指定、保護活動が始まります。当時十数羽と言われた生息数は、タンチョウの警戒心が強いこともあって、なかなか増えませんでした。



タンチョウ生息数

■一九二四年（大正十三年）の奇跡

いまから一五〇年ほど前までは、タンチョウは北海道の青い空を自由に飛び交い、この北の大地で悠々と暮らしていました。でも、明治時代になると本州からどんどん入植者が増え、農地を開墾したり、田んぼを切り開き、タンチョウは、段々と住む場所を狭められていきました。やがて、殆どその優雅な姿は見られなくなり、「絶滅した！」と思われるようになりました。ところが大正十三年に北海道の狩猟取締専任官吏がタンチョウを確認します。

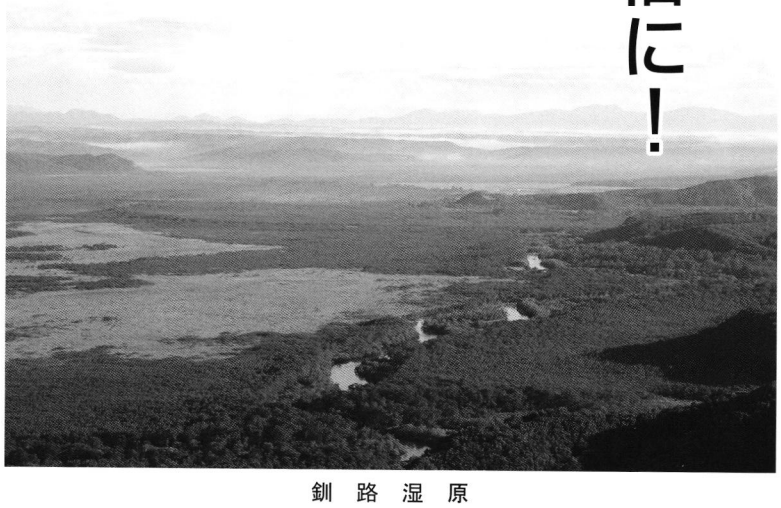
■物語は一九五九年（昭和二十五年）、第二章へ

一九五〇年厳寒の一月、物語はドラマチックな展開を見せます。阿寒町で農業を営んでいた山崎定次郎さんが、餓死寸前のタンチョウ鶴数羽に、見るに見かねてトウモロコシを与えたのです。何日も、何日も…。そしてある日、鶴たちはついに雪の上のトウモロコシをついばんだのです。世界で初めて鶴の給餌が成功した瞬間でした。

その後、冬期間の給餌を通じて小学生や、中学生の参加など、町ぐるみの保護活動が大きく広がります。また、ニュースなどを通じて全国的な関心も高まり、タンチョウの生息数は急カーブを描いて上昇します。

阿寒町タンチョウ鶴愛護会が発足した一九六六年には一七〇羽。四十周年の二〇〇五年（平成十七年）には、一〇〇〇羽を超えるタンチョウが観測されています。

二〇一五年の観察では当初の約一二〇倍、一五五〇羽を数えるに至っています。



釧路湿原

※ミニミニ資料館①
「タンチョウの夏は子育ての夏」

三月半ば、タンチョウは湿原や最近では民家に近い湿地帯でも、ヨシを使って巣づくりします。そこで生んだ一～二個の卵を親が交代で抱き続け、約一か月でヒナが誕生。一〇〇日で親と同じくらいの大きさに成長し、飛べるようになります。

※ミニミニ資料館②
「吉川英治賞を受賞、阿寒中学保護活動」

一九七〇年（昭和四十五年）阿寒中学校ツルクラブは代々の教師と生徒が一致協力、タンチョウの保護活動を続けてきたことから、日本文化の向上に寄与したとして文学作家「吉川英治氏」の偉業を記念して設けられた「吉川英治賞」を受賞しました。

■広がる生息地域
いま、タンチョウは釧路湿原から全道へ

■新天地を求めて、羽ばたきを

二〇一五年、タンチョウの生息数はついに一五五〇羽を数えたことが生息数調査（タンチョウ保護研究グループ）で分りました。しかし、急激なスピードで回復してきた生息数が今度は別の問題を引き起こしています。タンチョウの〝住宅難〟です。タンチョウは縄張り意識の強い鳥で、1㎞四方の縄張りを持つと言われています。

一羽の縄張りがそこまで広いと、広い釧路湿原でも、流石に手狭になってきます。そこで、タンチョウは、北海道の快適な住まいを求めて別の地域へ移住し始めました。

心配事がもうひとつあります。鳥から鳥へと感染する鳥インフルエンザです。一箇所に集中していると、再び絶滅の危機に見舞われることになりかねません。そこで、環境省では「タンチョウ生息地分散行動計画」を策定し、分散事業に取り組んでいます。

■釧路市音別、十勝川

新しい生息地は釧路湿原を中心に、さまざまな地域に広がっています。釧路湿原から30㎞ほどの音別にはすでに一〇〇羽ぐらいが越冬していると考えられています。また、根室地方、霧多布湿原、知床半島に近いオホーツク地方や道北でも、目撃されています。

ことに、十勝地方ではＮＧＯが厳冬期でも結氷しない水域に新設した餌場で、二〇〇九年（平成二十一年）から給餌を始めました。その結果、餌を食べている様子が確認され、市街地で観察できる環境は国内でも非常に珍しいとして注目を集めています。ウイルスなどの大量死リスクを分散させることもでき、またその美しい姿が観光資源にもなり得るとあって、ＮＧＯでは「活動の趣旨を理解し近づかずに見守ってほしい」と呼び掛けています。今後の保護活動のひとつの道と言っていいでしょう。

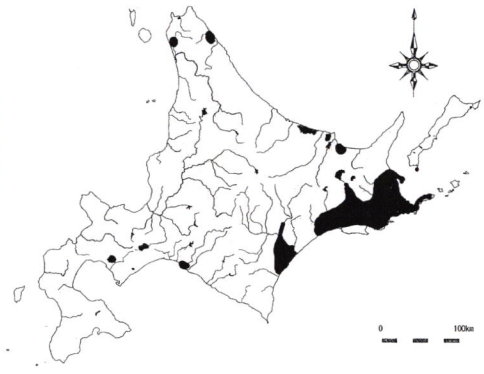
※ミニミニ資料館③
「北海道のタンチョウは渡りをしない」

ロシア、中国、韓国、北朝鮮などに住んでいるタンチョウは、冬と夏の生活場所を変える渡り鳥ですが、北海道にいるタンチョウは「渡り」をしません。その理由は、北海道にいるタンチョウの先祖は「渡りをしない」群れであったからと考えられています。

※ミニミニ資料館④
「千円札になったタンチョウ」

一九八一年（昭和五十六年）新千円札の裏面にタンチョウが登場しました。原画には「ツルの鳴き合い」を幻想的に捉えた林田恒夫氏の写真が使用されました。タンチョウは大勢の日本人に国民に毎日いつでも、どこでも見られる鳥として飛び立ったのです。

タンチョウ三羽飛翔



『愛護会50周年特別課外授業②』

■給餌発祥の地に建つタンチョウの総合学習センター
「見る」「聞く」「知る」…タンチョウの全てが体感できる
阿寒国際ツルセンター「グルス」

センター正面

住所：〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒23線40番地
電話番号：0154-66-4011　FAX：0154-66-4022
URL：http//aicc.webcrow.jp

■ここはタンチョウ学の聖地

一九五〇年（昭和二十五年）一月、この地でドラマが起こりました。餓死寸前のタンチョウたちが山崎定次郎さんの私有地で与えた餌を口にしたのです。日本初のタンチョウ人工給餌が始まった瞬間でした。

阿寒国際ツルセンター［グルス］は、その発祥の地に一九九六年（平成八年）開館しました。展示棟は１２００㎡もあり、タンチョウの生態や習性、体のしくみを紹介する展示コーナーやタンチョウの四季の姿、その生活を体感できる映像コーナー、ミニシアター、タンチョウの文献や模型、さらには超望遠レンズによる観察装置など大がかりにタンチョウの生態を観察できます。

また、野外施設では自然に近い状態で飼育されているタンチョウの観察ができるほか、ビオトープ（生物の生息空間）を散歩したりすることもできます。ここはまさに、タンチョウ学の聖地と言っていいでしょう。

■さまざまなイベントや体験が

見事な展示、装置もさることながら、ツルセンターの大きな特長はソフト面の充実と言ってもいいでしょう。

なかでも冬の人工給餌は、魅力の中心です。毎年、十一月も末になると餌を求めて沢山のタンチョウがやってきます。そのタンチョウを観察しようと国の内外から沢山の観光客やカメラマンもやってきます。それから三か月間国際ツルセンターは、文字通り国際色豊かに賑わうのです。

こうした活動に代表されるように、国際ツルセンターは催し物でもにぎわいます。タンチョウ写真コンテスト、ツルの飛来数を当てる「数当てコンテスト」、また、「タンチョウ検定」や講演会、学習会なども企画されています。時には「タンチョウ結婚式」や「コンサート」などのイベントが行われることもあります。これほど多角的に活動している施設はほかにはありません。

※ミニミニ資料館⑤

「グルス」って？

よく阿寒国際ツルセンター「グルス」とは何か？と質問を受けます。「グルス」とは、ツル属の学名、ラテン語でツルのことです。タンチョウはGrus japonensis（グルス・ヤポネンシス）と言います。「日本産のツル」と言う意味です。その学名をとって命名しました。

※ミニミニ資料館⑥

「天然記念物ＶＳ特別天然記念物」

阿寒国際ツルセンターでは冬の間、毎日魚の生餌をタンチョウに給餌しています。この生餌を狙って天然記念物のオジロワシやオオワシが飛んできて、タンチョウと餌取りを繰り広げる壮絶なバトルは一大ショーです。

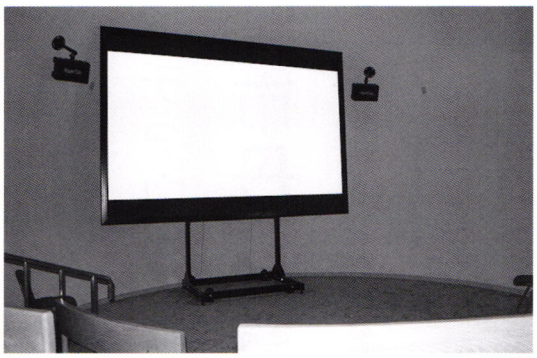
※ミニミニ資料館⑦

「コスチューム飼育」

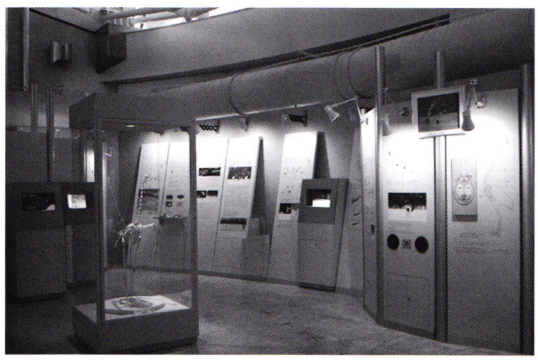
鳥族には最初に見たものを親と思う習性があります。いわゆる「刷り込み」です。

ツルセンターでは人工飼育で人間に懐きすぎないようアメリカで開発されたタンチョウの親に似せた着ぐるみを着る「コスチューム飼育」を行ったこともあります。

広くて明るいエントランスロビー

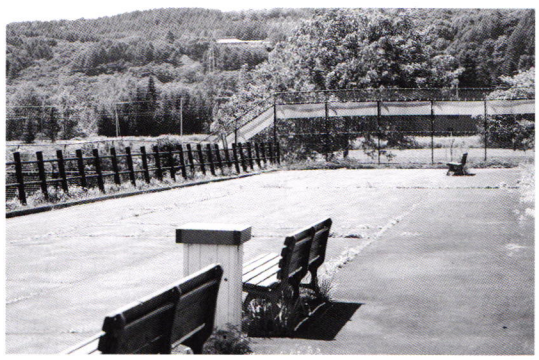


ミニシアター
生き生きとしたタンチョウの姿が映像に

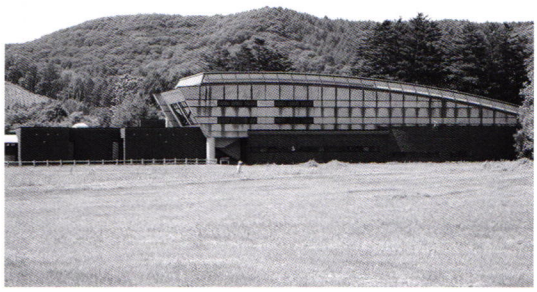


映像展示
映像と音でタンチョウは身近に・・

湿原再現
湿原の営巣状況を体験



野外ケージ



外へ出れば広いビオトープが…
ビオトープ側からのセンター

『愛護会50周年特別課外授業③』

■世界でただひとつの「タンチョウ自然公園」
保護されたタンチョウや幼鳥と間近に会える！
釧路市丹頂鶴自然公園

正　面

住所：〒084-0926 北海道釧路市鶴丘112
電話番号：0154-56-2219　FAX：0154-56-2216
URL：http//kushiro-tancho.jp

■ほとんど自然の状態で

絶滅の危機にあったタンチョウを保護し、増殖するために一九五八年（昭和三十三年）に世界で初めてつくられた施設、それが「釧路市丹頂鶴自然公園」です。「たんちょう釧路空港」にほど近い、釧路市鶴丘に五羽のタンチョウが放され、開園しました。一九七〇年（昭和四十五年）、初めて人工ふ化に成功。その後いろいろな人たちの手厚い保護を受けて、多くのタンチョウのふ化を手掛けてきました。人工ふ化聖地と言っても言い過ぎではありません。ここの特徴は何と言っても幾つもの大きなケージです。ケージにはいずれも屋根がなく、タンチョウは自由に出入りができるようになっています。そのためトビやカラスもタンチョウの餌を狙ってケージの中にまで侵入してきます。このような自然な状態で生態を観察できる場所は、この公園だけと言ってもいいでしょう。ただ、以前はタンチョウも自由に出入りをしていましたが、現在では鳥インフルエンザの感染を避けるため、羽を切っています。

■人工ふ化に苦闘した資料も展示

最近は、一年を通して二十羽前後のタンチョウが放されていて間近に観察ができます。公園の中央には展望台もあり、ケージを一望することもできます。五～六月頃には、繁殖が成功してふ化したヨチヨチ歩きの愛くるしいヒナの姿が見られることもあります。一年を通して鑑賞することができることから、国内外からの観光客が訪れる人気スポットになっています。間近で見られるタンチョウは自然観察の場としても絶好です。管理棟にある展示室やレクチャールームでは、手探りで人工ふ化を始めたころの資料や、プロセスなどを記録した貴重な資料、そして、人工ふ化によって生まれたタンチョウの家系図なども展示されていて、保護活動の熱気が伺えます。また、タ

ンチョウの骨格などの標本もあり、タンチョウの大きさを感じさせてくれます。家族みんなで気軽に楽しめる公園です。

※ミニミニ資料館⑧

初めての人工飼育の名前は

人工育雛に成功した最初のヒナは三羽。「クン」「シン」「ロン」と名付けられました。一九六八年（昭和四十三年）のことでした。その後、成鳥としてつがいになって子孫を残し、その家系図がパネルになっています。まるで人間の家系図のようです。

※ミニミニ資料館⑨

雄と雌の見分け方は？

雄雌は外見からはわかりません。確実な方法は雄と雌が声を合わせて鳴く「鳴き合い」です。片方が「コ～」と鳴くと、片方が甲高く「カッ、カッ」と答えます。「コ～」が雄で「カッ、カッ」が雌。この時、普通雄は雌より翼を高く持ち上げます。

※ミニミニ資料館⑩

幼鳥がオトナになるのは？

タンチョウの年齢は人間と同じように、生まれて一年が満一歳です。三歳くらいでオトナと同じ姿になりますが、野外での子育ては四～五歳なので、その頃がオトナになったと言われます。ちなみに野生のタンチョウの寿命は三十歳ぐらいと言われています。

※ミニミニ資料館⑪

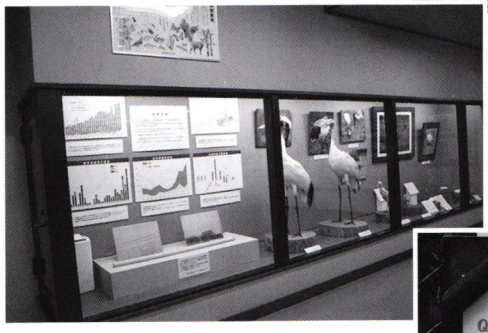
タンチョウの卵の大きさは？

長さは大体10㎝　幅は6㎝ぐらいです。ニワトリの卵より二回りほど大きく、重さは約四倍ほどです。タンチョウは、ふつう春先の三～四月に二個の卵を産み大切に育てます。つがい（夫婦）は生涯、寄り添って生きると言われています。

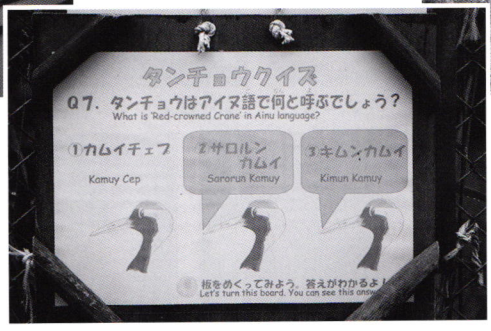
職員手作りの看板

丹頂親子　幼鳥と親鳥

ケージ
金網は側面のみ、天井はない


展示室
タンチョウの家系図もある

カメラ窓
生態を金網越しにではなく
撮影できるよう窓が開けてある



丹頂クイズ
子どもたちがタンチョウ博士になれますように…

『愛護会50周年特別課外授業④』

■「タンチョウはどんな自然環境で暮らしているのだろうか？」
北海道ゾーンでタンチョウの暮らしぶりを体験！
釧路市動物園

動物園正面

住所：〒085-0201 北海道釧路市阿寒町下仁々志別11番
電話番号：0154-56-2121　FAX：0154-56-2140
URL：http://www.city.kushiro.lg.jp/zoo/

■タンチョウの生息環境を立体的に

釧路市動物園は、日本で一番東の端にある動物園です。一九七〇年に開園。総敷地面積47・8haで開園当時は国内最大の面積を誇りました。一九七五年（昭和五十年）には園内に「タンチョウ保護増殖センター」が設置され、タンチョウの孵化、増殖事業が始まりました。その後は、毎年傷ついたタンチョウを保護して野生に戻す作業を続けています。

広い敷地の中には北海道の自然を再現した「北海道ゾーン」があり、そこではタンチョウはじめ、世界で初めて飼育下で繁殖に成功したシマフクロウはじめ、エゾフクロウ、エゾリス、ヒグマなどと対面できます。さらに、ゾーンをぐるりと巡る木道脇には、北海道ならではの樹木や草花も茂っていて、タンチョウがどんな自然環境で暮らしているのかも、体験できます。タンチョウの生息環境を立体的に体感できるゾーンでもあります。

北海道ゾーンへようこそ

北海道ゾーンへタンチョウが誘う

タンチョウに見えるよう
電線に通した保護カバーも展示

飼育されているタンチョウ

飼育場のケージにはツルの像

『愛護会50周年特別課外授業⑤』

■絵本から写真集まで…多いタンチョウBooks

■知れば知るほど知りたくなるタンチョウの魅力

「ツルの恩返し」と言う民話が語り継がれてきたように、タンチョウは昔から人間にいろいろなことを語り掛けてくれてきました。確かに、タンチョウは知れば知るほど、もっともっと深く知りたくなる神秘的な鳥です。アイヌ人たちはタンチョウをサルルン・カムイ（神の鳥）として崇めていました。

近代、「タンチョウの魅力をもっともっと深く知ってもらいたい」というタンチョウ大好き研究者やカメラマンたちが増えてきました。その結果、沢山の本や写真集が出版されています。

豪華な写真集や絵本、物語、研究成果・・・さいわいそれらの出版物は、市内の図書館や国際ツルセンター［グルス］などに沢山置かれています。世界各地の人が注目するタンチョウのことを深く知ることは今住んでいる郷土を誇ることにつながります。さあ、貴重な一冊を手にしてみよう。

■気軽に手にしてみたいあんな本、こんな本

書名	著者	出版社	発行年月日	定価	ISBN	ページ数	
タンチョウーいとこちたき　さまなれど	正富　宏之	北海道新聞社	2010年10月	2052	489453567X	147	単行本
北海道の動物たち　人と野生の距離	千嶋　　淳	ホーム社	2014年10月	1944	4834253023	208	単行本
タンチョウの里	井口万喜男	吉備人出版	2003年10月	1944	4860690303	222	単行本
知里幸恵の神謡　ケソラプの神・丹頂鶴の神	北道　邦彦	北海道出版企画センター	2005年２月	2592	4832805029	202	単行本
ツルになったおばあちゃんーツルとトメさんが教えてくれたこと	伊藤　重行	中西出版	2007年５月	1028	4891151633	64	単行本
釧路叢書（第17巻）タンチョウの釧路	釧路市	釧路市	1976年５月			338	単行本
図鑑・写真集							
タンチョウのきずな:「日本の鶴」の一年(小学館の図鑑NEOの科学絵本)	久保　敬親	小学館	2015年７月	1404	4097265865	40	大型本
世界ツル大鑑　15の鳥の物語World's Cranes	林田　恒夫	山と渓谷社	2015年１月	8532	4635596230	304	大型本
北の大地タンチョウ	和田　正宏	芸艸堂	1991年１月	4104	4753801810	83	大型本
タンチョウ　四季の彩	和田　正宏	芸艸堂	2000年４月	4104	4753801373	95	大型本
湿原の神・タンチョウ	中地　　茂	竹林館	2003年２月	2484	486000315	72	大型本
タンチョウー釧路湿原と人里に生きる	村本　輝夫	北海道撮影社	2000年１月	4752	4938446200	135	大型本
タンチョウー湿原に生きる	笹森　繁明	偕成社	1985年６月	2376	4039660404	56	大型本
いっしょがいいね	間山　公雅	文藝春秋	2009年１月	1337	4163709703		単行本
丹頂(ペーパモデルズ・プロフェッショナル野鳥シリーズ)	宍沢　郁雄	集文社	2004年６月	3024	4785102616	31	大型本
絵本							
どうぶつさいばん　タンチョウは悪代官か？	竹田　津実 あべ　弘士	偕成社	2006年４月	1512	4033313702	32	大型本
たんちょうづるのそら(手島圭三郎版画絵本ー極寒に生きる生きものたち)	手島圭三郎	リブリオ出版	1998年12月	1836	4897847079	31	大型本

『愛護会50周年特別課外授業⑥』

■歌って、踊って、タンチョウの舞い

雪原の中で優雅なダンスを見せてくれるタンチョウたちは、まるでバレリーナのように幻想的な風景を見せてくれます。釧路地方でしか見ることができなかったこの美しい舞を、踊りで表現してみたい。「丹頂音頭」はそんな願いを込めて一九六六年（昭和四十一年）三月に誕生しました。

作詞者の藤田久さんは「人間と鳥との交歓、無言の愛情、自然との調和、タンチョウの子の美しさ、このやさしさをなんとか世の中と分かち合いたかった」と語っています。その強い思いを受けて「新民謡として全国的に愛唱される曲、先住アイヌ民族の調べを取り入れた会心作」が、飯田三郎さんによって作曲されたのです。

現在では、「盆踊り」や「ふるさと祭り」などさまざまなイベントで踊られているだけではなく、小中学校などでも講習会も行われ、郷土の誇りとなっていると言っていいでしょう。

※ミニミニ資料館⑫

【新バージョン音頭】

現在、さまざまなイベント会場などで踊られている「丹頂音頭」は、一九八五年（昭和六十年）に当初の振り付けを改良した、より踊りやすくバージョンになっています。「丹頂音頭保存会」の講習を受けた子供たちは現在のバージョンで踊っています。

丹頂鶴音頭

北海道民謡

藤田 久作詩／飯田三郎作曲／瓦吹 哲・編曲

唄　藤山 進・比気由美子

ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ

一、ハアーアー
丹頂鶴は日の本　祝いの瑞鳥
たくさん幸福わせ　呼んでくる
（ソレ）
たくさん幸福わせ　呼んでくる

ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ

二、ハアーアー
愛にこたえて　丹頂鶴の群
ここに阿寒に　棲みついた
（ソレ）
ここに阿寒に　棲みついた

ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
イヤコーコ　ソラ　イヤコーコ

三、ハアーアー
朝日照る照る　雪の原
目出たい羽衣　舞いおりる
（ソレ）
目出たい羽衣　舞いおりる

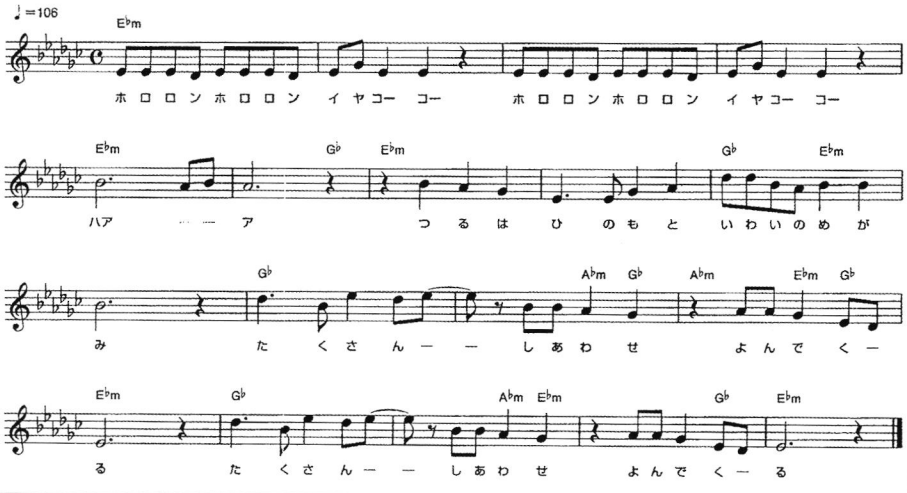
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
イヤコーコ　ソラ　イヤコーコ

四、ハアーアー
静かに集う　丹頂鶴
雪より白く　清らかに
（ソレ）
雪より白く　清らかに

ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
イヤコーコ　ソラ　イヤコーコ

五、ハアーアー
湖近く　里ちがく
すがた美くし　鶴の舞
（ソレ）
すがた美くし　鶴の舞

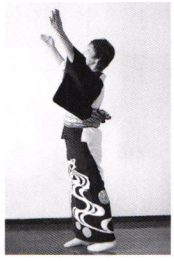
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
ホロロン　ホロロン　イヤコーコ
イヤコーコ　ソラ　イヤコーコ



◆隊　形：輪おどり
◆進行方向：反時計まわり
◆踊り始め：進行方向を向き前奏8呼間聞いて踊り始める。

◆踊り方

①一つの二つ
進行方向を向き〝チョチョンがチョン〟と手拍子を行う。
（写真1）



②三つの
右足を出し、両手は伏せて胸の前から斜め上にあけ開く（鶴がさっと羽根を広げた感じ）。
（写真2）

③四つ
左足を出し、両手を体前肩の高さからやや下に右手が上になるように指先を重ね前に伸ばす（鶴のくちばしの感じ）。
（写真3）

④五つの六つ
左足を右足に引き揃え〝チョチョンがチョン〟と手拍子を行う。
（写真4）

⑤七つ～十
②～④をもう一度行う。

⑥十一
右足を出し、両手を伏せて肩の高さで右横に振る。
（写真5）

⑦十二
左足を出し、両手を伏せて肩の高さで左横に振る。
（写真6）

⑧十三・十四
⑥・⑦をもう一度行う。

⑨十五
右足を出し、左手を頭上にあけかざし、右手は右下に伏せ流す。
（写真7）

⑩十六
左足を出し、右手を頭上にあけかざし、左手は左下に伏せ流す。
（写真8）

⑪十七・十八
⑨・⑩をもう一度くり返す。

⑫十九・二十
右足から右斜め前に3歩進み4歩目の左足を添えあげる。その時、両手を伏せ手で、左から小さくかぶせるように右に振り、もう一度左から小さくかぶせるように行い右下に伏せ伸ばす。
（写真9、10）

⑬二十一・二十二
⑫の反対動作を左足から行う。

⑭二十三
右足を出し、両手を顔の横に掌内向きに立てる。
（写真11）

⑮二十四
左足を出し、両手山開きを行う。
（写真12）

⑯二十五・二十六
左足を右足に引き揃え、〝チョチョンがチョン〟と手拍子を行う。
（写真13）

以上を②からくりかえす。

「丹頂ほろろん会」

この会は、タンチョウ鶴愛護会制定の「丹頂鶴音頭」の保存と普及、その他郷土芸能の振興に努め、地域に根ざした文化活動の発展に寄与することを目的とした愛護会の呼びかけに賛同した有志が集い、平成十九年五月に発足し、今年で八年目をむかえます。

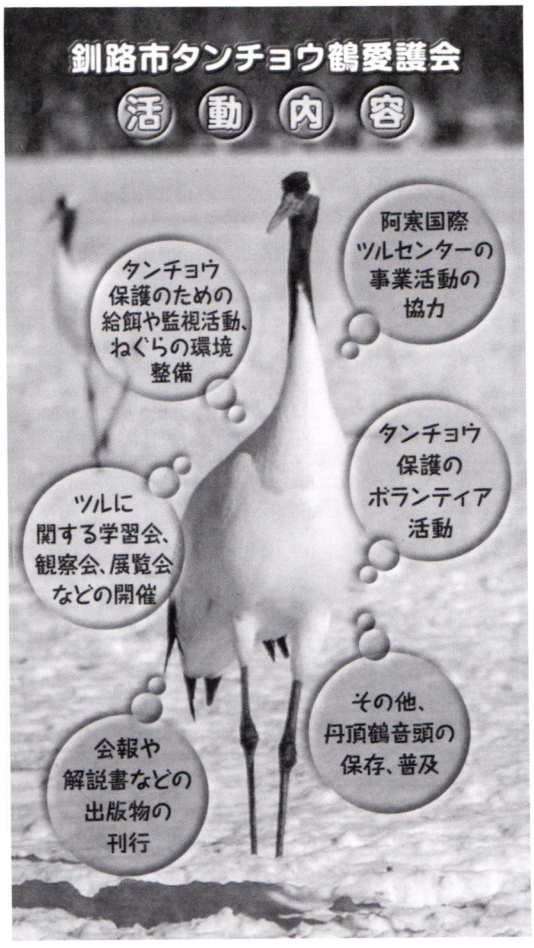
「ふるさと・ほろろん祭り」や「盆踊り」「敬老の集い」「総合文化祭」等々地域のイベント参加は勿論のこと、町内会や小学校への出前講習会にも積極的に出向いて普及に努めています。

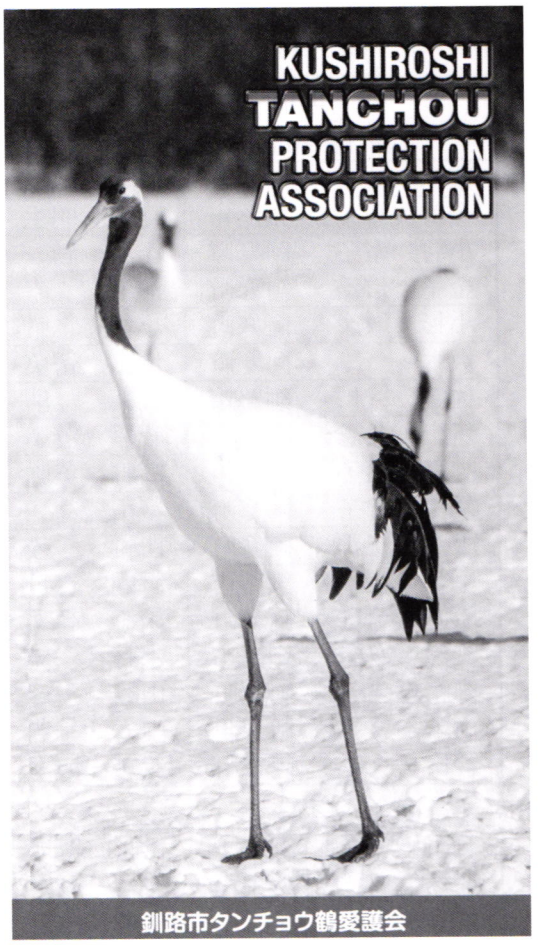
平成二十四年には熱海市で開催された日本民踊指導者研究大会で約九百名の受講者を前に披露し、指導、翌平成二十五年には釧路市から観光大使として旅立ったタンチョウの「ビッグ」と「キカ」に会って見送った時と同様に踊ってみてもらおうと台北市立動物園まで出かけて台湾の人達と友好を深めるなど町内のみならず広範囲な活動を続けています。が悩みは一つ、後継者の育成です。年々高齢化していく会員をサポートしてくれる若手の会員の入会を心から期待しています。

（荒木千枝子　記）

台北動物園特設ステージで交流する会員と台北市民

踊りに合わせて「生花」を披露





会員募集

昭和40年に発足した「タンチョウ鶴愛護会」は、越冬するタンチョウ保護のために給餌をはじめ監視活動等を続けています。これからも人と鶴が共存できる環境保全と保護を目指していきます。

また鶴に関する学習会や観察会の開催、会報や解説書等の出版などを継続していきます。

会は会員によって組織だてられ運営しています。会費(年度会費)を納入することによって誰でも、いつでも加入できます。

入会をお待ちしております。

会員特典

タンチョウ鶴愛護会が発行する会報等新しい情報をお届けします。

会員証のご提示で

●阿寒国際ツルセンター	入館	1回無料（年度内）
●赤いベレー	入浴券	プレゼント
	レストラン	10%引き
●釧路湿原美術館	入場料	10%引き

入会のご案内

会員は会の目的に賛同し、事業活動に参加、又は支援できる方なら誰でも加入できます。

一般会員/年1口　2,000円
法人会員/年1口　10,000円

お申し込み方法

●郵便振替の場合
　□座番号：02730-9-102187
　□ 座 名：釧路市タンチョウ鶴愛護会
●直接持参の場合
　阿寒国際ツルセンター・釧路湿原美術館
　※入会されると会員証を発行します。

お問い合わせ
釧路市タンチョウ鶴愛護会
〒085-0245 釧路市阿寒町上阿寒23線40番 阿寒国際ツルセンター内
電話 (0154) 66-4011　FAX (0154) 66-4022
E-mail:mail@946tanchou-aigokai.com
WEB:http://946tanchou-aigokai.com/

特別天然記念物タンチョウが舞う
阿寒丹頂の里

タンチョウは秋も深まると人里に現れ、やがて湿地（湿原）が氷と雪に覆われるころになると給餌場に集まり越冬生活が始まります。

丹頂の里の給餌場では11月から3月まで毎日給餌活動を行っており、給餌場に隣接するタンチョウ観察センターや阿寒国際ツルセンターからは毎日100羽以上のタンチョウを間近に見ることが出来ます。

餌をついばんだり、休んだり、踊ったり、鳴き合いしたりする行動、また給餌場とねぐらを行き来するタンチョウの飛翔する美しい姿は、来訪者を感動させてくれます。

編集後記

タンチョウ鶴愛護会は阿寒町、町教育委員会が四十年間、釧路市と合併して十年間、釧路市、市教育委員会のご支援と全国のタンチョウを愛する方々のご支援をいただき五十年間の愛護活動を継続することができました。

昨秋には、釧路市タンチョウ鶴愛護会として日本善行表彰を受賞し、関係機関、多くの市民の方々からお祝いをいただき光栄に浴することができ会員一同感激いたしております。

記念式典に向けて、記念誌の編集に汗を流してまいりました。

関係機関の代表の方々よりのご祝辞を賜りましたこと、永く愛護会事務局長でありました写真家佐藤照雄氏より表紙・グラビアを飾るタンチョウの写真を賜りましたことと、更に写真をご提供いただいた関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

結びに、編集に努力された部会員の方々の労に感謝し、編集後記といたします。

編集部会長　伊藤　博通

編集部会

吉田守人
大山昇
髙野英弥
山﨑定作
松本文雄
横田昌美
佐藤浩
飯沼勇一
小林靖之
島田覚
荒木千枝子
小関拓美
伊藤博通

釧路市タンチョウ鶴愛護会
設立五十周年記念誌

発行者　釧路市タンチョウ鶴愛護会
発行日　平成二十八年三月六日
印刷　釧路綜合印刷株式会社